Rediscovering Prayer

礼拝の再発見に向けて

Ahmad Bassam Saeh
Translated by Kazuki Shimomura

アフマド・バッサーム・サーイー
下村佳州紀 訳

International Institute of Islamic Thought (IIIT) East Asia

訳者からの注記

・訳注は全て脚注とした。本書の脚注は全て訳者によるものである。

・クルアーンの引用は作品社版を用い、適宜表現を改めた

・原書はハディースに関しては、伝承者の追加した説明などを( )の中に示し、ハディース中に表れるクルアーンの節を{ }の中に示し、原著者の追加した説明などを__ __の中に示しており、本訳書も是に倣った。

・原著者による原注は、原書に倣って本文中で[ ]中にイタリック体で示した。

訳者による解説

下村佳州紀

著者のバッサーム・サーイーは1941年シリア生まれ、学士号をダマスカス大学、修士・博士号をカイロ大学から取得した、近代アラブ文学の専門家である。アラブ圏の大学で教職生活を送った後、1984年に英国に移住。著者の人格形成は完全にアラブ圏で行われたため、移民第一世代と言える。著者はサラフィー主義者達のモスクに通い、アルバーニーを師と仰ぐことからサラフィー主義への近さが窺われるが、ムスリムの分裂状況を憂い、哲学を排撃しない融和的な立場である。

さて、著者が英国で見たのは、圧倒的な西洋文明の力と繁栄、在英ムスリム達の著者の理想との乖離であった。幼少期の記憶もあってか、著者は現代文明への賛美を惜しまず、現実のムスリムが文明状態とはほど遠いことを的確に描写し嘆く。著者は文明は普遍的な存在であると見なし、イスラーム文明も西洋文明も共に①清潔、②正確、熟達、③刻限の遵守、④制度化、秩序遵守、⑤正直、信用、⑥集団行為ないしチームワーク、⑦寛容、謙虚、他者の受入、⑧専門分化、個人責任、⑨忍耐、意志、決意、⑩公正、平等という種子から結実したのに他ならないとする。これらはエートスに関わるものであり、著者の言う文明社会とは倫理社会と大差ない。だが、例えばかつてのイスラーム文明に於ける時間概念が純然たる太陰暦を大枠とし、南中・日没といった太陽の動きに基づいて定められた一日5回の礼拝時間によって区切られた自然を基本とした時間単位に基づくのに対し、西洋文明は機械的に均質に分けられた時間単位によって動いており、両者の間には質的な差異が存在するのであるが、著者はそれには無自覚であるため、文明論としては皮

相なものに留まっている。

著者は、無学なアラブが初期イスラーム史に於いて「20年ないし30年を越えないうちに、言語学、統語論、形態論、辞典学、修辞学、批評学、啓典解釈学、読誦学、ハディース学、法学、預言者伝学、伝記学、地学、歴史学、地理学、哲学、論理学、医学、天文学、計算学、数学、その他諸々の学問を確立した共同体」となったと理解しているが、これは独特な歴史観であって、歴史学者は言うに及ばずシャリーア学者でこの様な見解に立つ者は管見の限りでは存在しない。文明がエートスの結実であり、実を結ぶのには2、30年あれば十分であるとの理解によって、「10年ないし20年以内に、エジプトはこのプログラムを通じて完璧性、秩序性、規律性、衛生、外見の良さ、生産性、労働現場における安全性、教育水準、初等教育水準、対人関係水準の向上の点で、欧州諸国と同列になるであろう」との結論が導き出される。これはイブン・ハルドゥーンの歴史理解とは対蹠的である。著者は歴史的関心が薄く、「暴力、恐怖、革命」ですら「自然の即興」と片付けてしまい、そこに至る経緯が省察されることはない。

長年に亘る英国大学及び高等学院認定評議会の査察官としての経験と、近年では湾岸産油国でも流行中の「管理学Administration」に着想を得て、著者は原著『礼拝の管理』を著したが、その要諦は「君に到達した礼拝の真髄の一覧表」と「君から逃れた礼拝の真髄の一覧表」に基づいた礼拝の自己採点であり、それを折れ線グラフに表示し中長期での比較を行うことが管理手法であるのに過ぎない。

やはり著者の本領は、専門であるアラブ文学において発揮される。文体は散文ではあるものの反復が多く、韻を踏むような箇所も少なくない。誇張法（白髪三千丈の類）も随所に見られ、「功成り名を遂

げた」大先達が礼拝の滋味を知らない哀れで無知な若輩者を教え諭すという枠組みと相俟って、仰々しい内容になっている。本書が『礼拝の再発見に向けて』と名付けられているとおり、著者は主に言語的観点から形骸化した礼拝に新たな光を当てようとしている。但し、英語に礼拝と祈願の区別は無いとの記述は明らかな勇み足であるし、「慈悲あまねき（al-raḥmān）」と「慈悲深き（al-raḥīm）」に関してもサラフィー主義でも尊重されるイブン・カスィールのタフスィールは al-raḥmān が al-raḥīm よりも強調の程度が激しいと原則を述べた上で、前者が現世と来世での後者が来世での慈悲を指す等の伝承を引用する。また著者はバスマラについて統語論学者達が「（〜において）開始する」との仮想に満足したと批判しているが、その後の著者の議論は動詞の適切な仮想についてではなく、「アッラーの御名において」が「アッラーの権能と源泉性によって」の意味であるとの説に収斂しており、これは統語論ではなくクルアーン解釈学の領域であって、批判対象領域自体が的外れである。なお、構文解析書の al-Durr al-Maṣūn は「助けを求める際の bi」が用いられていると解釈し「アッラーに助けを求めつつ読む」と仮想している。

本書がシャリーア学者によって執筆されたので無いことを充分意識しつつ読むのであれば、本邦にこれまであまり紹介されていない論点や、ムスリムの現状に関する直截な批判などが有益かと思われる。なお、邦訳に際しアラビア語学の観点から、Muḥammad Jabāṣīnī 博士にご教示いただいた。記して感謝したい。

巻頭言

アフマド・バッサーム・サーイー

あらゆる著作権を放棄。本書或いはその一部の如何なる形態での頒布、入力、複写、翻訳も、著者ないし頒布者の許可なしに許される。但し、新版ないし頒布版毎に両者への通知及び複数部の提供が望ましい。

本書はアッラーのご尊顔のみを目指したものであり、如何なる言語によるものであれ今後の諸版がより豊富で正しく完成されたものとなるように、著者は全読者に対し本書に対して惜しみなく論評、見解、意見、訂正を与えるよう呼びかける。本件に関して、著者ないし頒布者の連絡先に書き送るよう希望する。全ての増補はその原所有者に依拠することとなり、アッラーがお望みであれば該当者にはかかる永続的喜捨への寄与分があることとなろう。

最後に；

我々の日常生活や大学世界において、工業、貿易、農業、建築プロジェクト管理のための最適な方法、また我々の生活に所得を実現し公的ないし私的な益をもたらす投資を研究する分野や教科のなんと広範となったことか。しかし、一体誰が我々の学校、学院、大学にこれら全てのプロジェクトよりも良く、より有益で、より長く続き、より結果が保証され、現世及び来世で共に有益である点でより広範であるものの管理、つまり礼拝の管理に関する専門、分野ないし教科を創設しようと考えたであろうか。

- 本書は、礼拝の再発見、および日常化、慣習化、自動化の埃をそれから払い去ろうとの試みである。

- 如何にして礼拝が「義務」から「権利」、「重荷」から「楽しみ」に転じるか。
- 如何にして礼拝が我々の内部で生活、時間、日常化が駄目にしたものを再編成するか。
- 如何にして礼拝が我々の生活を再構築し、我々の考えを再構成するか。
- 礼拝；現生と来世にとって共に最大の投資計画、イスラーム文明再興のための最大の計画。

慈悲深く慈悲あまねきアッラーの御名において

礼拝

アッラーよ、あなたは私がこれらの思いつきと諸頁によってあなたのご尊顔と私の後生以外を望んでいないことを知り給います。譬え有限で弱い人間的な私の言葉であなたに向かったとしても ―というのも、私は普通の人間に語りかける普通の人間であるゆえ― 我々の言葉の中にはあなたの荘厳さに到達し、あなたの威厳と偉大さをとらえるには不十分な言葉しか見出せません。もし私の駿馬がそれに躓き私が滑ったとすれば、あなたへの道程ですべったのであります。例え正解が私から逃れ、あるいは私の舌が逸れたとしても、最初から最後まで私の希望があなたこそが望み給うたことの真理に到達することに他ならないことをあなた只お一人が知り給います。しかし、あなたの叡智の目的の地平、偉大なる昇天の際にあなたがあなたの預言者 ―彼が我々の五回の礼拝の立法というあなたの聖なる御命令を受け取った際、それから比類無き宝を地上の我らにもたらした― に啓示し給うたものの神秘を、その全ての詳細と細部と神秘に於いて如何にして我々人間が知り得るでありましょうか。

アッラーよ、私が書いたものの中で正しいものには、あなたがあなたの義しい僕達に報奨とした良きものから私に報奨を与え給え。そして、あなたの偉大さを讃えようとの私の真意よりも私の舌の弱さが先走り、どうあがいても私の筆があなたの叡智の高みに到達できないことによる私の思考、評価、解釈ないし表現の過ちについては、私があなたの真っ直ぐな道の導きによる光明とあなたの諸世界への慈悲の泉の水場を求めたのに他ならないと超越者たるあなたが知り給うたことによって、報酬を与え給え。あなたはこれまでも、これからも、良く赦し、良く免じ、情け深く、高貴な御方、慈悲あるもののなかで最も慈悲ある御方にあらせられます。

常にあなたの慈悲に身を寄せる者
オックスフォードの寄留者
バッサーム・サーイー

ヒジュラ暦 1436 年ジュマーダー・ウーラー月 15 日、金曜日、黎明時
西暦 2015 年 3 月 6 日

アッラーとの約束[1]

彼は驚いて私に言った。「礼拝の管理？！　礼拝に管理が存在するのか？！」。私は答えた。「もし現世的経営管理を学び最良の仕方でそれに投資しそこから希望の利益　―消えて無くなる利益―を引き出さんとするのであれば、来世の行為[2]のために管理がないというのはどうしたことか？　そして、最良の仕方でそれに投資しそこから最大の利益　―永遠の利益―　と減ることのない報酬を引き出さないとはどういうことか？現世と来世の善が共に見込まれる礼拝のような類例のない仕事・行為よりも、投資面、経営及び保存性の良さで引き合う仕事・行為があるであろうか？

ラマダーン月のある日、オックスフォードのサウジアラビア学生クラブが斎戒明けの食事の少し前に公演をするように求めてきたので、「礼拝の管理」について彼らに話すことにした。

決められた時間になって、私は礼拝に関するクルアーンの2つの節と2つのハディースを記した紙を持って説教壇に向かった。ありふれた挨拶を行い、紙を広げ、何を喋っているのか彼らにはほとんど解らないほどの凄まじい早さでそれを読み上げた。1分以内に読み上げ終わると、急いで紙を畳み、「急いでしまって申し訳ない、しかしお別れしなければなりません、皆さんよりもずっと重要な方々との約束がありますので…アッサラーム・アライクム」と言いながら立ち去ろうとした。扉に急ぎながら鞄を掴みつつも、目の端では驚き口がきけない彼ら

---

[1] maw‘id は現代では特に会合や訪問などの約束・予約（appointment）、刻限の意味で使われることが多い。

[2] a‘amāl は行為、仕事、ビジネス、経営、労働、成すべきことといった多義語であり、著者は現代アラビア語で business administration の訳語として使われる idārah al-a‘amāl にかこつけて、行為ないし成すべきことの管理とした口合（くちあい）である。

の様子や、抗議、戸惑い、不信の、否むしろ不満、非難の混ざった表情を捉えていた。

これが、会合の約束をした人々に対する非礼な振る舞い ―私の振る舞いのような― に対する人間の自然な反応である。であれば、アッラーに対して同様の振る舞いを行った場合にどのような反応があると想像されるであろうか？

数秒の内に、私は学生達のところに戻り、今の出来事に対して謝罪しつつ、「諸君、怒っているかね？良かろう。私が諸君にこうしたのは1回で、謝ろうと戻ってきた。しかし、我々はアッラーに対して毎日5回この様に振る舞い、決して謝罪して悔悟しつつ戻ろうとはしないのだ」と語った。

アッラーに対して時間を惜しみ、彼の前でこの様な方法で礼拝 ―もしそう呼べるとしたらだが― を行うことによって、如何に貴重な機会、偉大な約束、高貴な場面を手中から逃していることか。

私がサウジアラビアの学生達に対して記憶からではなく、手にした紙からクルアーンの諸節とハディースを読んだことに気付かれたであろうか？ 紙を読み上げるのと、言いたいことを即興するのとどちらが聴衆にとってより効果的であろうか？ 一般的に、我々は礼拝に於いて読誦するものを紙を読む者の流儀で読誦するが[3]、それは胸からではなく唇から出る読誦であって、アッラーに対して唇によって礼拝を「読み上げる」ことと、心から「即興する」こととの違いのなんと大きいことよ。

[3] クルアーンの章句を読誦することは礼拝の一部である。

至高者が金の盆に載せて我々に提供し給う壮大な投資計画に対して、我々が軽んじて断れば、何も得ずに、全く何も得ずに去ることになろう。否、仮に我々が自らに対して客観的であれば、そのような挨拶 ―挨拶と言うよりは皮肉により近いが― に対する拒否、抗議、あるいはむしろ罰を想定せずにはいられない。

我々自身、敬神行為、我々を取り巻く諸事の再発見が、また、我々の息子達や娘達の眼前にあるこれら発明品を含めた周りにある全てのものを再発見することに役立つ思想的計画に基づいた教育が不可欠である。もし、彼らに暗記者と追従者の位階を越えて、思考者と革新者の位階に到達して欲しいと望むのであれば。

1940年代末期に私が7年生ないし8年生であった頃、母 ―アッラーの慈悲があらんことを[4]― がラタキアのキリスト教徒の女友達への訪問を終えて帰宅し、彼らの息子がフランス留学を終えて帰国した際に携えてきたという「驚くべきラジオ」について私たちに語り始めた。母が語ったのは忘れることが出来ない話だった。この「ラジオ」には前面に窓が付いており、そこからその中で喋っている人を眺めることが出来るのだ、と。

その夜、その小さな箱に「追い込まれて」閉じ込められた可哀想なアナウンサーのことを考えて、眠ることが出来なかった。どうやって彼らは彼をその中に入れることが出来たのだろう？ その箱が十分な広さであるような小さな体の者を選んだのに違いない。よしよし。だが待てよ。この哀れな者は ―申し訳ない。まだ小さな子供だったのでこ

[4] 故人に言及した際に付ける慣用句。

の様に考えていたのだ―　如何にして夜にお手洗いのために出ることが出来るのだろうか？　どこで用を足すのだろうか？　幾十ものあるいは幾百ものこの様な疑問が入れ替わり立ち替わりして眠らせてくれず、その後も、最終的にそれが「テレビジョン」であることを知るまでの長い間、私の想像力の中を巡り続け不安にさせたものだった。

私たちの子供達は目の前にテレビジョン、ラジオ、携帯電話、コンピューター、光ディスク、人工衛星、自動車、屋内及び屋外にある驚くべき電気機器がある状態で生まれてくるため、これらの発明品や発見の偉大さ、これらを発明し発見した者の偉大さ、我々がそれらを発見した瞬間の偉大さについて多く考えることはない。

これらの物事の偉大さの再発見、それらの発明者の偉大さの発見の訓練が必要であり、これによって彼ら自身及び周囲の被造物の偉大さの再発見、かかる創造におけるアッラーの偉大さの再発見に導かれ、ひいては彼ら自身、その宗教及びその敬神行為の再発見に導かれ、それらの反復、習慣化、日常化の埃を払い落とすであろう。彼らの目にそれらが常に再び新しいものなり、まるで初めてそれらを知った或いは初めてそれらを行ったかのように。聖クルアーンはこの様に我々を　―もし我々がクルアーンの徒であれば―　「再発見」するために数多くの節に於いて訓練した。例えば

> ❑　重層に七つの天を創り給うた御方。おまえは慈悲あまねき御方の創造になんの不調和も見出さない。それから（天に）視線を戻してみよ、おまえはなにか裂け目を見出すか。それから視線を二度戻してみよ。疲れた視線は伏し目に、おまえの許に引き返す。*［クルアーン 67 章 3-4 節］*

❑　それとも彼らは彼らの上に（翼を）広げては畳む鳥の方を見たことがないのか。それらを（空中に）把持するのは慈悲あまねき御方のほかにない。*［同 67 章 19 節］*

❑　言え、「おまえたちは見て考えたか、もしおまえたちの水が（地中に）しみ込んでしまったならば、誰が湧き出る水をおまえたちにもたらすか」。*［同 67 章 30 節］*

これが殆どの章及び節に通底するクルアーンの方法論であり、この方法論に従って育った社会は自ら及びその周囲を再発見することを常とする状態に、そこからさらには、諸世代に継続する継続的な信仰的及び文明的状態に、自らがあることを見出すであろう。我々は、毎朝、両目に新しく使われていない眼鏡を掛け、それを通じて自ら自身を見て、あたかも初めて見るかのごとく我々の周囲を見るように呼びかけられている者である。その時には、この眼鏡によってどれほど我々がアッラーに近づくことが出来るか解るであろう。

我々の日常生活、大学や教育機関において、工業、貿易、農業、建築プロジェクト投資、さらには所得を実現し人々に公的ないし私的な益をもたらすあらゆるものの最善の投資方法の研究を扱う管理学に関する各種分野や教科が広がっている。しかし、一体我々は我々の学校、学院、大学にこれら全てのプロジェクトよりも良く、より有益で、より長く続き、より結果が保証され、現世及び来世でより広範に益があり、さらには過ぎ去ってゆくこれら現世的プロジェクト成功の基本的要件でもあるものの投資、つまり敬神行為 ―その一番の柱は礼拝である― の管理、その再発見に関する専門、分野ないし教科を創設しようと一度でも考えたであろうか。それはアッラーとの約束であり、またあらゆる約束でもある。

それは、敬神行為あるいは現世－来世的投資の一覧表の最上位を占める会合である。イスラーム法に於いて困難で費用がかかり危険な義務であるジハードの義務の順位が1番でも2番でもなく第3番であることに驚きはない。その上には両親の孝行が位置し、そのさらに上には定刻の礼拝が位置する。

> ❑ アブドゥッラー・ブン・マスウード(R)[5]は、次のように伝えている。私が預言者ムハンマド(S)[6]に「どの行為がアッラーにとってより好ましいですか」と尋ねたところ、彼は「定刻の礼拝である」と答えた。「それから何ですか」と尋ねたところ、「両親の孝行である」と答えた。「それから何ですか」と尋ねたところ、「アッラーの道へのジハードである」と答えた。*[ムスリム所収]*

これは、たとえ我々の殆どが気にせずに通過することに馴れてしまっているとはいえ、驚くべきハディースである。礼拝がジハードよりも重要性、忍耐、耐久性、美点、報奨において幾幾倍も優っているということは、立ち止まって本当に深慮すべき事実である。特に我らが主が、それを我々にとって「大儀」であると形容しながらも、「謙る者たち」を除外し給う点において。本当に彼らはそれが大儀であるないし困難であるとは見出さない。なぜならば、謙りによって、滋味、安心感、快適さ、人生に於いて寄りかかる防壁を見出すからである。否、それは、読誦、動作、思考、想像における謙り、静謐、熟慮の遵守によ

[5] Raḍiya Allāh 'an-hu の略記。アッラーが彼を嘉し給いますように、の意。
[6] Ṣallā Allāh ‘alay-hi wa sallama の略記。アッラーが彼に祝福を垂れ、平安を与え給いますように、の意。

って、忍耐、精神の集中、傾聴、謙譲、他人を良く受入ること、よく聞くこと、精神の静謐さ、決定を下す際の熟慮及び平常心、色々な立場における平衡、判断における過激さや猛進の無さ、人生や人々との遣り取りにおける叡智を訓練する霊的学校なのである。従って、一つ以上の聖なる節において思考者が礼拝と忍耐を結びつけていることに奇異はないのである。

- そして忍耐と礼拝に助けを求めよ。だが、それは謙る者たち以外には大儀である。*[クルアーン2 章45 節]*
- おまえの家族に礼拝を命じ、それに忍耐せよ。*[20 章132 節]*

「それは大儀である」。何故か？！

なぜ礼拝なのか？

なぜ、我々の約束を解消し、我々の仕事を放棄し、我々の商業を中断し、如何に重要であろうとも日常生活における全ての物事を宙吊りにして、礼拝の実施へと向かうのだろうか。

なぜ、使徒(S)はそれを信仰と不信仰を分ける決定的な分水嶺としたのだろうか？　なぜ、死の床で使徒(S)の口から繰り返し出た末期の言葉が「アッラーにかけて、アッラーにかけて、礼拝こそ」との礼拝に関する注意喚起と強調であったのだろうか？

そもそも礼拝は罰としてそれとも報奨としてもたらされたのだろうか？もしそれに本当に何かしらの困難性があるとすれば、その理由は何か？　もしそれに本当に何かしらの喜びを感じるのであれば、その理由は何か？　なぜ、これらの定刻においてなのか？　なぜ、このような動作や屈礼回数によるのか？　なぜこれらの表現や読誦によるのか？　なぜ、それは全ての宗教に見出されるのか？　如何にしてそれはアッラーとその使徒の許でかかる高い重要性や意義を占め、戦闘や戦いの場におけるジハードや戦闘や殉教を凌駕するのか？

私が礼拝によって最大の商業プロジェクトを有し、その投資予算はアッラーが私の銀行口座に入れ給うたこと、また、この地上にて人間が望みうる最高の喜びと最大の収穫を引き出すべくその管理と運営に理想的な方法を選ぶために努力することが課せられていることを発見するために50年間礼拝し続けたことを告白せねばならない。

砂糖の小片を巡る蟻の2集団同士の戦いを幸運にも見たことはあるだろうか？　全てがそれを獲得しようとし、こちらのものは別のものの背中を上り、そちらのものは砂糖の小片に敵が到達するのを防ぐべく妨害しようとその小さな爪を敵の足に引っかけ、別のものはこちらのあるいはそちらのを殴る。疑いなく、君はこの小さな軍勢同士の驚くべき戦いを笑いながら楽しんで立ち止まり眺めるであろう。しかし、何を巡ってであるか？　取るに足らないつまらない砂糖の小片を巡ってである。

もし、完全に本当の礼拝、それによって現世から浮上しアッラーに到達すると感じるような礼拝を行い、それからその遙かな高みから眼下の現世、君が礼拝によって先ほど離脱した場所を眺めたとすれば、そこにある全てのものが君の視線ではどれほど大きかったとしても、裸眼では見えないほどに小さく見えるだろう。また、蟻たちが戦いを繰り広げていたちっぽけな砂糖の小片が、取るに足らない君の現世に他ならず、その小片を得ようと争い対立していた愚かで小さい蟻たちが、君と人間集団　―君が彼らに敵対し彼らも君に敵対する、君が彼らと戦い彼らも君と戦う、そして最後には君が彼らに勝って砂糖の小片を手に入れるか、彼らが君に勝ってそれを手に入れるかするような―　に他ならないことを見出すであろう。

義務から権利への旅

その通り。礼拝は我々のシャリーアにおいては義務として始まる。「おまえたちの子供達が7歳に達すれば礼拝を命じよ、そして10歳に達すればそのために打擲せよ」*[アムル・ブン・シュアイブの祖父→父→アムル・ブン・シュアイブ経由でアフマド所収]*。そのために、「男と不信仰との間には礼拝の放棄がある」*[ジャービル・ブン・アブドゥッラー経由でムスリム所収]*のであった。

しかしながら、人間の成長の次段階に於いて、つまり子供が初期段階を終え、礼拝の性質とその化学[7]を理解し、彼の主と連絡できるこのホットラインの重要性の大きさを発見する頃には、かかる「義務」が、「義務」であるとの理解が徐々に後退するまでにそれほど時間はかからない。その代わりに徐々に「権利」であるとの理解が場を占めるのである。

我々が小さな子供が嫌がるにも拘わらず薬を飲ませる様子を見たことはないだろうか？　しかしながら、時間と共に小さな子供が次第次第に男や女に変化するにつれて、薬の理解が「義務」の段階から「権利」の段階へと変化し始めるであろう。そしてついに今ではこの薬には霊魂の救済と健康の回復が存在すると完全に認識するようになった。

想像して欲しい。君が美しさ、広さ、立地の良さ、家具や設備の豪華さに魅了されて大いに気に入った大きな家を借りようと考え、決断し用意を調えて大家と賃料の交渉の席に座った際に、彼が君をこう

[7] あるいは錬金術。

言って驚かすとしたら。「その賃料は、私の許で私の負担で毎日5回美味しい料理を食べることです。私はそれ以上もそれ以下もあなたに求めません」。

これは一体全体、どれほど気前の良い申し出であろうか？！　この様には思わぬだろうか？！　この申し出は、我々が至高者のものであるこの地上に暮らし、その良き物に喜び、その服を着て歩き、その繁栄に参加するに際しての、彼からの我々への申し出と全く同じである。

我々が自分の時間から日々の礼拝という定時の「食事」を与えないのは、我々自身に対する不正ではないのか？　食物という定時の食事を与えているにも拘わらず。我々が食物という定時の食事を楽しんでいるのと同様に、礼拝という定時の食事を楽しまないというのは我々自身に対する不正ではないのか？　なぜ、胃への食事には大いに時間を割くのに、霊魂の食事に同様の時間を割くのを惜しむのか？　一体、我々にとってどちらの方が重要だと思われるか？

授与者が受賞者に対して、彼[8]が他の大賞を受け取ることに同意しない限り受け取ることが出来ないという条件を課した大賞の存在を耳にされただろうか？　一体それはどのような種類の賞であろうか？　それが礼拝である。君は礼拝を義務や重荷としてではなく「権利」として遂行する楽しみによる大いなる霊的賞を獲得しない限り、アッラーの許での最大賞を得ることはない。

[8] 受賞者。

「アッラーフ・アクバル[9]」と繰り返しながら礼拝を始める際に如何なる楽しみを感じるであろうか。君の罪　―君の全く全ての罪―　を持って君の両肩に高い塔の様に積み上げようとやってきた天使たち、そして屈礼及び跪拝を感じる毎に、これら二つの塔のような罪が一層毎に崩れてゆくのを想像する際の。そうであれば、屈礼及び跪拝を長引かせるなり、短くするなりせよ[10]。

> ❑ 本当に、僕が礼拝に立てば、その全ての罪が持ってこられ、両肩に乗せられる。そして、彼が屈礼するか跪拝する毎に、それらは彼から落ちてゆく。*[イブン・ウマル経由、アルバーニー『真正ハディース双書』所収]*
>
> ❑ ムスリムで、ウドゥーをするには念入りに行い、それから礼拝に立ち、自分の読誦することを理解している者で、母から生まれた日であるかのような状態に戻らない者はない。*[ウクバ・ブン・アーミル経由、アルバーニー『奨励真正集』所収]*

我々の前にある権利が義務へと、あるいは即座に終えることを望むような重い義務へと転化することのなんと容易なことよ。これが、数回の屈礼を行う為に自らの貴重な時間から「消費」ないし「損をしている」ないし「無駄にしている」としか感じられない者の状態である。

我々の記憶の中では「義務」は常に「重荷」と結びつけられており、重荷は心にとって重い事柄である。そこには与えてくれるのではなく奪い去ってゆく要素を見出すであろう。なぜなら、時間ないし休息といった権利の一部を禁じるからである。ここから嫌悪感が生じ、ここから

---

[9] アッラーは至大なり。

[10] 好きにするが良い。

多数の者にとって礼拝が「さっさと終え」て肩から降ろそうとする重荷に変化するのである。

> ❏ ビラールよ、それ[11]から休ませてくれ。*[ビラール・ブン・ラバーフ経由イラーキー所収]*

そうであれば、問われるべきは「礼拝を行ったか否か？」ではない。かかる質問の重要性と重大性にも拘わらず、毎回の礼拝の後に私が自分自身に対して問うべき質問は、「私はこの礼拝において用意されていた私の賞を得たのか否か？」である。

「果たして自分は、それを本当に楽しんだであろうか？　その現世的成果として即座に　―その最中と終わった後までも―　得られる味わいに喜びつつ、その期待されるべき成果として自らの来世に確保したものに舌なめずりしながら」。

君の礼拝から、世界とは言わず宇宙全体を周遊するための面白い旅のための無料の旅行券を作り出しなさい。それによって、君はこの宇宙の王、その絶対的支配者に到達するであろう。

[11] 礼拝。

義務と権利の境界

我々の日常に於いて義務が権利と混合している場合は多く、我々は両者を分かつ境界線を知らない。何処で義務が終わって権利が始まり、何処で権利が終わり義務が始まるのであろうか？

大巡礼は義務、情熱、旅、費用であり、さらにもしかしたら危険でもあるが、我々の一歩一歩によって与えられる報奨について考えるとき、それが義務であるとの感情は頭から蒸発し、権利意識がその場を占め始め、ついには我々のなかに義務意識の残る場が無くなるのである。

喜捨[12]は義務、尽力、費用であるものの、もし我々がそれを納得しながら、それによって得られる報奨について理解しつつ、幸福感によって支給対象者に与えたならば、我らが主の嘉されることを成したこと及び必要とする者に保護、暖かさ、安全を供与したことによって降り注ぐ安心と平安の豪雨を感じるであろう。

斎戒は義務、成すべきこと、飢餓、渇き、辛抱、困難であるものの、我々を過ぎ去る1分毎に、我らがアッラーの御命令と御禁制に応じ、彼が我らに約束し給うた報奨の時が近づいたことによる、報奨の楽しみとアッラーへの接近の滋味を感じるであろう。それは飢餓と渇きの長い一日の後のイフタール[13]に限られているのではなく、自我から欲望を禁じる戦いに勝利する楽しみと、永続する神的銀行の我々の口座への加算額という楽しみを感じることがその上に来るのである。

---

[12] ṣadaqah.

[13] 日没後の断食明けの食事。

それは、許されたものと禁じられたものとの違いと同じである。至高者が我々に対してあるものを禁じ給うたのはその害からの予防のため—その害の性質を我々が理解したか無知であるかに拘わらず—に他ならず、あるものを許し或いは命じ給うのはその益や利点を獲得させんがため —その利点の性質を我々が理解したか無知であるかに拘わらず— に他ならない。もし我らに最低限の知性があり、許されたものと禁じられたものに関する経済的、精神的ないし医学的に客観的な表現を探すとすれば、両者を有益と有害という言葉に置き換えるであろう。

我々の手中にある全権利が義務に転じることのなんと容易な事よ。しかしながら、同様に、我々の手中にある全義務が権利へと転じることのなんと容易で楽しく美しい事よ。

もし、君がある組織から大きな賞金を獲得し、その賞を受け取るための旅行が求められるということが起きたとすれば、その賞を得るために喜び勇んで、自分の時間と努力を犠牲にして、その道程にあるかもしれない全ての困難を容易なものと見て、急ぎはしないだろうか？であれば、君にとって礼拝の賞は、この様な否むしろこれ以上の努力に値しないだろうか？　現世的な報奨が如何に偉大であっても、礼拝の報奨と比較しうるであろうか？

如何にして、果実の滋味を、木に手を伸ばしてもぎ取ることなしに、楽しむことが出来ようか？　如何にして、寝る場所を用意して平らに均し、平らな寝床と十分な覆いと静かな雰囲気と光と音の少ない部屋を確保することなしに、美味なる睡眠を楽しむことが出来よう

か？ 「アッラーこそが鳥たちにその滋養を与えるというのは正しいが、しかし、それらがそれを食べて滋味を楽しむには飛んでそれに到達する必要がある」と言った者たちは真実を述べたのである。

礼拝のために起床する楽しみ

私が小さかった頃、「真夜中」！　__当時はそう思われたのだった__　に夜明け前の礼拝に起床しなければならず、「なぜ、夜のこの様な時間に？！」と自らと自我の間で互いに尋ね合っていていたものであった。アッラーは我々が彼に対し5つの礼拝を行うことを望み給うのではないだろうか、そうでれば、何故かかる難しい時間にそれを設定し給うたのか、我々が最も楽しい眠りの時間にいるときに我々に彼に礼拝するべく起床するよう求め給うたのは何故か？！　我々がこの礼拝を午前7時ないし8時、いっそのこと10時に実施することに何の問題があるというのか？　どの時間にもたらされようとも、礼拝は礼拝ではないのか？　それ[14]のうち遅れた時間に読み上げるものも、早い時間に読み上げるものも、一緒ではないか？　礼拝がアッラーとの「我々の連絡」を保ち我々から悪魔を遠ざけるためにもたらされたのであれば、我々が深い眠りの状態にある際に、悪魔が我々に対してどのような役割を有しているというのであろうか？　我々が眠っており如何なる種類の連絡ないし無連絡についてもそもそも考えることが出来ず、善ないし悪を計画することも出来ないというのに、何故、我々のアッラーとの連絡を失うことあるいは悪魔の陥穽に陥ることを恐れるのであろうか？

これらの自問は若輩者たちだけではなく、年輩者たちの脳裏にも去来するかもしれない。しかしながら、年輩者たちは、礼拝が至高なるアッラーとの単なる定期的な連絡行為ではなく、同時にそれが後述するとおり生活のプログラムに過ぎないことを、最終的には理解する者たちである。

---

[14] 礼拝。

黎明に起床することの甘美さを味わい、それから夜の白白明にモスクに向かい家を出て、日々の仕事 ―如何なる仕事であれ― を始めるために日の出前にモスクを出る、このような人間のみが早起きの価値、黎明の清々しい新鮮な空気の吸気の価値、早朝の静謐さの楽しみ、黎明の礼拝の最中のみならずその前後におけるアッラーとの距離の近さを知るのである。

彼は生命が休息の後に新たに目覚め、夜から昼が分離し、眼前にて黎明の白白明が夜の子宮から産まれ出で、天、地、木々、草々、花々がその覆いを取り除き、含羞を含みながら彼のために顔の覆いを外し、眼下で生命が新たに甦るのを目撃するのである。今彼の前には、創造の第一日目が如何に開始されたかという驚くべき神的ミニチュア・ディスプレイが、昼の夜への没入という奇蹟が如何に完遂したかが、そして宇宙の血管に伸び広がっている生命の最初の復活が存在しているのである。この類例のない時間を目撃した者は、自らの理性、能力、思考が産出と寄与のために溢れ燃え上がらんばかりに開花し、それが彼に追加活力、肥沃さ、活発さ、富、生産性、創造力を与え、それは彼に贈られた新たな無垢の生命であるかのごとくである。

それこそが黎明、それは宇宙の神秘を見て創造の奇蹟を発見することの出来る新たな目を君に与える。それは一日の別の時間では、発見することが出来ないものである。

一日の最も早い時間に起床し働いた経験のある者は、生命の時間の内でこれらの時間における2、3時間の労働がその成果に於いて、如何にしてそれ以外の時間における長時間労働に匹敵するかを

よく知っている。君と、類例のないこれら時間帯を獲得することとの間には、君の睡眠という悪魔が存在する。もし君が、一日目、それから次の日、さらに継続的に数日間、彼への抵抗と圧倒に成功したならば、今後は早起きを君からの遵守事項及び約定にするとの契約を自分自身とする。これは、斎戒者によるラマダーン月最初の困難な日々の斎戒の遵守と同様である[15]。もし君がそうしたならば、その後には、それは君の物理的存在に深く根ざした習慣となり、それ無しにはいられないような日々の予定の楽しい一部となるであろう。

見よ！　君は目を開けたがまだ寝床にある。 見よ！　彼は悪魔であり、君の頭を枕へと縛り付け、「おお私の大切な人よ、両目を閉じて眠りに身を任せよ。朝のこの様な早い時間における微睡みの妙味を無駄にしてはならない。

これこそは深い眠り、だらけ、弛緩にとって最も甘美な時間である。心地よく眠れ。なぜ急ぐというのか？」。

これは悪魔の執拗な反復的語りかけであるが、君は如何にして彼のささやきと誘惑に立ち向かうのであろうか？　アッラーの使徒（S）がそれを乗り越えてうち勝つために君を助けようとして説明した内容が、以下である。

- ❑　悪魔はあなたたちの誰かが眠るとき、そのうなじに3つの結び目を作る。全ての結び目には、「あなたの夜は長い、だから眠れ」とその場に打つ　__つまり封印を刻印する__。もし

[15] ラマダーンの斎戒が特に困難なのは最初の日々であり、その後は徐々に楽になるとの認識に基づく。

彼が起床してアッラーを念唱すれば一つの結び目がほどける。もし、ウドゥーをすれば一つの結び目がほどける。もし、礼拝すれば全ての結び目がほどけ、心地よく活動的に朝を迎える。もしそうでなければ、 __つまり礼拝のために起床しなければ__ 居心地悪く緩慢に朝を迎える。 *［アブー・フライラ経由、ブハーリー所収］*

君は一度でも、朝の礼拝のために早起きするべく早寝した者たちの表情を観察し、深夜まで夜更かしし礼拝の時間が過ぎ去ったころに目覚める者たちの表情と比較しようとしたであろうか？ もしそうすれば、製造者が製造時に驚くべき物理的法則を設定した「人間」という名前のこの驚くべき機械の秘密の一部を知るであろう。すなわち、睡眠後にそれを「再起動」させるのに最良の時間は日の出前であってその後ではないということであり、我々が理解できるか或いは出来ない叡智に基づいた製造者の設計はこの様なものとしてもたらされた。この人間的機械の明らかにされた或いは明らかにされていない秘密について、誰が創造主以上に知っているのであろうか？ 「創造し給うた御方が知り給わないことがあろうか、彼は緻密にして、通暁し給う御方であらせられるというのに」。*［クルアーン 67 章 14 節］*

君のために自然が ―その創造主及び我らの創造主が組み込んだとおりに― 寝床から起き上がり、黎明の白白明と共に君のために君の周りにある全ての生命の素晴らしさを照らし出す。君が眠るためにではなく、君が起床し、労働し、生産し、地上を繁栄させるためにである。従って、かかる神的恩寵の価格を減額してはならず、また、アッラーが君と君の周囲の全ての被造物が新しい一日を始めるようにと従わせ給うたこの活力を無視してはならない。日没とともに瞼を

閉じた花が黎明の最初の光と共に再び開花するのを、鳥が早起きしてさえずりながら空を飛び糧へと急ぐのを、牛、羊、山羊、鶏、そしてアッラーがこの地上で創造し給うた全ての動物たちが黎明の白々明と共に活発に起き出して、新しい生命の廻りを始めるのを見なかったであろうか？

　生命を理解し、その果実をもぎ取りなさい。戻ることのないその列車に乗り遅れる前に。

忍耐の楽しみ

仕事にあるいは何処かに向かって車を運転するとき、一般的に車を運転している際の関心事は許されている最大速度で、あるいは許されていない最大速度でかもしれないが、目的地に到着することに他ならない。これが、脳裏にて諸義務がせめぎ合い、神経を消耗させる標準的な道程である。

もし、自動車の運転を楽しむものための権利と成したら、どうであろうか？　時間を掛けそれに忍耐し、注意深く運転するために十分な時間があるように少し早めに出る。このようであれば、周囲に広がる道程の景色を見回し、以前の旅では発見できなかったものを発見し、運転の滋味と、安心の滋味を楽しむ機会が、過ぎ去った時間について考えることないしこの先まだ残っている距離について考えることによって神経を消耗すること無しに、与えられるのではないか？

君と同行者のために楽しみを、また味わって実施するための権利を—君や彼らに対する重い義務ではなくして—　作り出すために、旅行のために追加的時間を用意するのはどうだろうか？　礼拝に対してこの様にせよ。

そのためには、忍耐それ自体から楽しみを成すべく、君と時間との間に君が我慢するのを助ける短期的休戦協定を締結することだけが必要なのである。斎戒に対するイフタールまでの忍耐、忌まわしい事柄に対する打開されるまでの忍耐、病気に対する癒されるまでの忍耐、入場券獲得の列に並ぶ事に対するやっとのことで祝賀会場

への入場が許可されるまでの忍耐、学業に対する成功するまでの忍耐の甘美さを経験しなかったか…。

あるものを入手可能でありながらにして自らに禁じ、我慢することの楽しみを経験したことはないだろうか？　菓子一切れ、新たな上着、ないし新たな車を買う能力がありながらにして、原則の把持、約束への忠実さ、謙譲ないし同行者が購入資金を有していないことを慮って、その購入を思いとどまることの素晴らしさを経験したことはないか？　それが忍耐の楽しみであり、礼拝とはそのようなものである。

- ❑　おまえの家族に礼拝を命じ、それに忍耐せよ。*[クルアーン20 章132 節]*

真に、礼拝に対する忍耐とはアッラーからの罰、試験、苛烈さを意味するのではなく、それに対する忍耐とは、何であれ収穫したいと望む楽しみを獲得するための忍耐に他ならない。楽しみの大きさとその獲得の凄さが増加するにともなって、価格が凄くなり忍耐が増加することは避けられない。君の創造主の前に立ち、秘密の話を打ち明け、両肩にあった心配事と不安をその御足下に置き、この親密な会見の後には罪が清められ新しく生まれ変わる事以上に偉大な喜びがあるであろうか。

礼拝は忍耐の学校、忍耐は文明の学校

「忍耐」の美徳に関する話が、西洋文学に於いてはほぼ完全なほどに隠れてしまっており、彼らが人間の基本的な美徳について語っているときまるでこの美徳が場を占めているのを殆ど見出せないほどである事に私は当惑している。この文学を私よりも良く読んでいる人々が、こう証言してくれる。彼らは勇気、正直さ、決意、行動、高貴さ、男らしさ、人助け、一本気、直向きさ、愛情、公正さ、平等、自由、民主主義、謙譲、貧困者及び困窮者の支援、その他多くの性質について語るのであるが、しかしながら驚くべき事に、忍耐という性質に付いてではないのである。それが、他の全ての美徳の基本となっている美徳であるにも拘わらず。対照的に、クルアーンにおける「忍耐」とその派生語を計数したところ、少なくとも103回繰り返されていることが解った。さらに、高貴なハディースに於いては何百回も出現している。

私はその発見と発明によって世界に押し広げられている西洋文明を眺めながら「驚きながら」述べるのであるが、忍耐は発見者や発明家が一番最初に装備する武装であることを我々全員が知っている。彼は実験室のなかで倦むことなく眠らずに日夜の大半を過ごし、終了した実験のことが頭を離れず、新たな発見を求め、他者が出来なかったことに到達しようと固執する。このようなことが、執拗さ、決意、固持、忍耐なしに如何にしてありえようか。類例のない科学的発見、そして思想、言語、領土における世界の覇権という彼らが成し遂げたことは、忍耐、固持、堅固さが彼らの人間的性質に深く根を下ろした要素であるという事実に恐らくは帰着するのである。従って、恐らくは、彼らはそれについてその文学に於いて言及する必要性を見出さなかったのであろう。

イスラームにおける最重要の三つの敬神行為、すなわち礼拝、斎戒、大巡礼を参照したならば、それら全てがあたかも忍耐の訓練と忍耐者の輩出のために特別に設計された学校であるかのように見えることを見出すであろう。あるいは、君は自問するかもしれない。斎戒と大巡礼に関しては、両者の忍耐的側面は明瞭であるが、しかし、礼拝は忍耐とどう関係しているのであろうか？、と。

君がある忍耐教育訓練学院の訓練コースに登録した場合、このコースでどのような種類のプログラムと訓練が提供されるのかを想像して欲しい。

もし礼拝が嫌り、我らの高貴な預言者（S）が強調されたように礼拝者が「自分の読誦することを理解している」ことによりもたらされる嫌りによってのみ礼拝たりうるのだとすれば、そのような嫌りが忍耐無しに実現するであろうか？

礼拝における読誦、タスビーフ[16]、タクビール[17]を「自分の読誦することを理解していない」程度に急ぎ読誦することの、なんと容易で、商売としてなんと安く、しかしなんと利益の少ないことか。それに対して、幾十もの仕事や約束事が扉で待ち構えているというのに、クルアーンの一つ一つの節、一つ一つの言葉、停止を必要とする全言葉の末尾に一つ一つ停止を挟み、「自分の読誦することを理解している」程度に読誦することの、なんと困難で、商売として偉大であり、なんと利益の大きいことか。

---

[16] スブハーナッラーと言うこと。

[17] アッラーフ・アクバルと言うこと。

「アッラーフ・アクバル」等の開かれた表現*[開かれた言葉については後述する]*をくりかえした後に、幾十もの仕事が扉で待ち構えているというのに、「アッラーは誰より偉大なのだろうか？　何より偉大なのであろうか？」というような仮想の空隙を脳裏で埋めるために立ち止まることは、忍耐を、否多くの忍耐を必要とする行為である。

また同様に、「スブハーナ・ラッビヤ・ルアズィーム ／ ルアアラー」[18]という開かれたタスビーフを繰り返した後に、幾十もの仕事が扉で待ち構えているというのに、その後にある「何によってアッラーを偉大であると讃え、あるいは彼が何から超越していると讃えるのか」という仮想の空隙を脳裏で埋めるために立ち止まることは、忍耐を、否多くの忍耐を必要とする。

また、「慈悲あまねく」、「慈悲深き」、「アッラーの御名において」を預言者（S）が延ばされたように、つまりそれぞれの他とは違った意味と個性を理解するように、幾十もの仕事が扉で待ち構えているというのに、延ばして発音することは、忍耐を、否多くの忍耐を必要とする。

また、「アッタヒーヤト・リッラーヒ」、「アッサラワート」、「アッタイイバート」の各々を唱えた後に、幾十もの仕事が扉で待ち構えているというのに、威力比類無き威厳に満ちたアッラーからの返答を受け取る楽しみを味わうべく立ち止まり、それから預言者（S）に挨拶した後に返答を受け取るのを楽しむべく立ち止まり、同様に「アッラーの義しい僕達」に挨拶した後に彼ら全てに挨拶したことに対する報酬を受け取る

[18] 讃えあれ、偉大なる ／ 至高なる我が主こそは超越者。

のを楽しみにすること ―この点については詳述する― これら全てのことは、忍耐を、否多くの忍耐を必要とする。

動作と動作、読誦と読誦、節と節の間で立ち止まり、幾十もの仕事が扉で待ち構えているというのに、アッラーの許で受け入れられるべくそれら全てに真剣さ、信用性、経緯などの当然の権利 ―この点については後に解説する― を与えることは、忍耐を、否多くの忍耐を要求する。

もし君の全ての成功、功績、成果[19]について熟考したならば、それらの背後に忍耐があることを見出すであろう。そして、君の全ての、失敗、敗退、罪、間違いの背後には忍耐の不足を見出すであろう。成功と救済のための何とも驚くべき学校、それが忍耐であり、忍耐のための何とも驚くべき学校、それが礼拝ではあるまいか？

我らの高貴な預言者(S)は、「このウンマ[20]から取り去られる最初のものは謙りである」と言われたが、謙りについて、我々の礼拝からそれが取り去られたときにそれと共に忍耐も取り去られ、忍耐が取り去られたときにそれと共にこのウンマの文明も取り去られたのを目の当たりにしているようである。我々が謙っている際の我々の天との連絡と、地上における我々の成功とを繋ぐこのような永遠の真理について、至高者は次のように言われる際に、強調し給うているのではないか。

---

[19] khaṣā'il(肉片、毛や髪の房)とあるが、ḥaṣā'il の誤記であろう。あるいは、khiṣāl(品質、気性、単:khaṣlah)の誤記か。

[20] イスラーム共同体。

❏ 確かに信仰者達は成功した。彼らは己の礼拝において畏まる者たち。*[クルアーン 23 章 1-2 節]*

全ての義務[21]を終えた後に、自らに問うが良い。この礼拝に於いて獲得した忍耐力の補給量はどの程度か？、と。

[21] 義務の礼拝。

何故我々は礼拝するのか？

何故、礼拝なのか？　それは忍耐の為だけであるか？

何故我々は、以前に何百回も反復した言葉を反復し、奇妙な動作を行う為に、毎日1、2時間を無駄にするのだろうか？　この時間を他人の手助け、あるいはそれ以外の如何なる人道的ないし慈善的で有効な別の行為のために使う方が我々のためではないのか？もし礼拝が存在しなかったら、どうであったというのか？

突然に、世界の携帯回線および固定回線を含む全ての電話が不調となり、有線及び無線の通信が全て切断され、インターネット、衛星及び地上放送局が停止し、陸路、海路、空路の全てが不調となり、云々ということが生じたと想像せよ。一体世界に何が起こると思われるか？　如何なる混乱、如何なる異常、如何なる喪失、経済的、社会的、政治的、文化的、文明的な如何なる崩壊が生じるであろうか？

これこそが我々と我々の創造主との間で礼拝が果たす役割であるが、果たして一日でもそれを不要とすることが出来ようか？　我々とアッラーとの間のホットラインが切断したとしたら、どうであるか？　そうであったとすれば、アッラーが我々に与え給うたこの驚くべき通信装置を我々自身で再発明しなければならなかったであろう。

果たして我々は、礼拝が組み立てられているような高い製造能力の「性状」や「組成」よりもより良い何らかの形態を見出すであろうか？　如何なる通常ではない過程、如何なる比類無き組成、慎重

に選出された言葉、また特別で表現力豊かな動作が、今の礼拝に新しくもたらされるというのであろうか。

礼拝は我々のプログラムを元に戻す

何日も何年もかけて海辺の岩礁を押し寄せる波が浸食する。時間、日常化、反復、習慣化に象徴されるように、この様に生活は我々の中で、日常生活の汚辱からの浄化、平衡、力などの礼拝が我々の中に実現した岩礁の浸食行為をなす。これら[22]の現世的要素は、毎時、毎日、毎年と寄せては返す波によって、その欲望の線に従って我々をプログラムしようとする。我々が時間と共に変化したと、また移動によって我々のために設置された神的プログラムの本性的オリジナル・コピーから我々が遠ざかったと感じない様に。それは、オリジナル・プログラムの行程を、それの天のオリジナルから遠く逸らせてしまうような如何なる「ウイルス」も含まない「光明ディスク」である。

> ❑ 信仰というものは、服が襤褸になるように、あなた方の中で襤褸になる __つまり、傷だらけになる__。それゆえ、至高なるアッラーに、あなた方の心の中に信仰を新しくし給うよう祈るが良い。 *［アブドゥッラー・ブン・アムル経由、アルバーニー『真正集』所収］*

アッラーの我々に対する、他の共同体や宗教にはない恩寵の一つに、我々の信仰プログラムのためのこの「光明ディスク」のオリジナル・コピーを保持し続けていることがある。おかげで、我々はそれに立ち戻り、我々自身をそれに基づいて再プログラムし、補修をし、その上に漏れ落ちた「ウイルス」や逸脱や病など全てを取り去ることが出来るのである。

---

[22] 日常化などを指す。

それは、今に至るまで保持されたコピーであり、垂示されたときと全く同じで改変も改竄も増加も減少もない聖クルアーンのプログラムであり、多数の伝承者と典拠、検証された文字伝承により他の宗教ではなく我々のために保たれたコピーであり、聖預言者の発言と行為による礼拝プログラムであり、我らの聖預言者(S)はその本質を4つの言葉で要約している。

> ❑ 私が礼拝しているのを　おまえたちが見た　とおりに　礼拝しなさい[23]。*[マーリク・ブン・フワイリス・ライスィー経由、アルバーニー『真正集』所収]*

一体、礼拝がなかったとしたら、我々の生命の偉大なる差配者、世界と宇宙に秩序を与える力ある御方と我らを繋ぐ礼拝を「発明」することが出来るだろうか？　そして一体、通信手段における重要なかかる人的「発明」が如何なる形態になると想像されるだろうか？　あまり根を詰めて考えないようにせよ、既に我々以外の者もそうしたのだから。

現状の律法の書[24]や福音書[25]を精査したとしても、モーセの礼拝あるいはイエスの礼拝　──両名共に平安あれかし──　の形容についての門下達が模倣しうるような詳細は一切見出せない。従って、彼らにとって礼拝　──つまり父祖から継承され今日行なわれている礼拝──　を発明することは自明のことであった。

---

[23] アラビア語の表記法ではこの様に空白が空くため、著者は四つの言葉と表現している。

[24] 旧約聖書。

[25] 新約聖書。

しかしながら、それらの礼拝者が失うであろうもので ―そして事態は実際にこうなのだが― 最多のものは何であろうか。それは疑いなく、ムスリムの礼拝者が礼拝している際に感じるあの素晴らしい楽しみ、他の如何なる楽しみも匹敵しない、栄えある超越者アッラーから彼の預言者が直接得た礼拝を繰り返すことに他ならないと感じる喜びである。

律法の書や福音書には信徒達が自らの礼拝に於いて依拠できるようなこれら2名の威厳ある預言者の礼拝の形容は全く存在しない。福音書にある内容はすべて、例えば、キリスト ―彼に平安あれ― の弟子の一人が、「(洗礼者)ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った、そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい」[26]とある通りである。この後に、35語の祈りが続く(ルカによる福音書に従えば。マタイによる福音書に従えば42語である)*[マタイによる福音書 6 章 9-13 節、ルカによる福音書 11 章 2-4 節]*。彼らと斎戒の関係もこの様であり、全ての集団はその条件、原則、許されたこと、禁じられたこと、斎戒の期間および時間を自ら提案するため、時代や場所によって常に変化するのである。

一部のムスリム達が礼拝における微細な違いを巡って互いに怒り唾み合うことを君は多く見かける。例えば、全てのタクビールに際して両手を挙げるべきなのか、一部のタクビールに際してか、それとも最初のタクビールに際してのみか？ 立礼の際に、何処に両手を置くのか、臍のところか、臍の上か、それともも少し上か？ あるいは礼拝に関する別の詳細を巡って喧嘩、対立、口論となることのなんと

[26] ルカによる福音書 11章1－2節、新共同訳より。なお、著者は聖書にある「主よ」との呼びかけの言葉を含まないように引用しているため、そのように訳した。

多い事よ。さて私自身はといえば、信じていただきたいのだが、幸福と法悦を感じる！　どうしてそうでないことがあり得ようか、時としてこの様に細かく、精密で数多くある詳細を巡って相違が生じるほどに、アッラーの使徒（S）から教友を経由した幅広い数々の伝承に繰り返し表れるように、我々の愛する預言者（S）から礼拝の有り様が完全且つ詳細に我々にもたらされたというのに。

本当にイスラームの全規定は天から地へ降されたのであるが、礼拝だけは例外である。諸世界の主は、そのために預言者が天に上がりそこで彼からそれを神的オリジナル・コピーによって受け取り、ムスリム達への贈り物としてそれを携えて地上に戻るということを選び給うた。

アッラーよ…。そこここにある一部の詳細を巡って相違が生じるほどに、諸伝承や諸典拠を満たす宝で我々が楽しむことが出来る、なんと素晴らしい天からの贈り物であることか？！　また、それを天で彼の主から直接に、彼の主から受け取ったとおりに完全に我々に伝え、人類史に於いて最も驚くべきそして最も容易な移動手段の製造と地図に関するこの様な精密な詳細を伝えようと熱意を注いだ、なんと誠実な預言者であることか。それは我々を伴って最上宇宙の諸層を突き抜けアッラーのところに至るのだ！！

全てのムスリムの諸学派がその大枠に於いて、いや時にはその微細な詳細においてすら一致する、昇天の夜に我々の預言者（S）が彼の主から受け取ったのと同じである、礼拝の完全且つ詳細な有り様が我々の許にあることの価値を諸君は知っているか？

礼拝に於いて自らが繰り返す言葉、行う動作、遵守する時間、礼拝の直前、最中、直後に行う所作、準備及び手順が、我らの誠実な使徒(S)が完全な誠実さと正確さで我々に伝えた、至高なるアッラーからの文字通りの伝達に他ならないと知りながら礼拝するものの感情と、自分たちの神に到達するための人間的装置を発明するべく自らと同様の人間が慎ましい人間的学問努力を払った結果得られたあるいは発明された人的学問成果を実施しているに過ぎないと知りながら礼拝をしている、この世界にいる誰でも良い別の礼拝者の感情との違いを諸君は知っているか？

ムスリムの礼拝者の楽しみの偉大さを、また、「この様に浄化せよ、この様に顔を向けよ、この様に心構えよ、この様に始めよ、この様に唱えよ、この様に動作せよ、この様に終了せよ…」と諸世界の主が設計し、製造し、彼に与えた間違えることのない神的装置によってアッラーとの通信を実施しながら、自らの声が通信線のあちらの端に届いていると信頼し、安心し、不安を覚えることがない素晴らしい感情を諸君は知っているか？

いや、それこれよりもさらに重要なのが、預言者(S)の生活の全てを描写することによって我々の生活の全事柄の詳細を網羅するイスラームにおけるスンナ[27]の存在であることを諸君は知っているか？

他宗教がスンナに恵まれていないと知らない者は、その価値を理解しない。かかる事実を知らずに、それらの宗教に影響されて、ムスリムにはスンナが必要ではなくクルアーンだけで十分であると主張する者たちには、最大限の驚きと哀れみを感じる。

[27] 預言者ムハンマドの慣行。

彼らはイスラームから、なんという宝、なんという特徴、なんという暖かな覆い、明瞭で安全な道程を取り除こうと欲するのであろうか。あたかも、至高者がその高貴な書の幾十もの節において「スンナ」を引き立てておらず、我々にそれに従い、堅持し、その所有者(S)を模倣するようにと呼びかけていないがごとく。だが、アッラーは次のように述べ給う。

> ❑ 使徒がおまえたちに与えたものがあれば、それは受け取り、彼がおまえたちに禁じたものがあれば、避けよ。*[クルアーン 59 章 7 節]*
>
> ❑ アッラーに従い、使徒に従え。*[クルアーン 5 章 92 節]*

いやむしろ、我々の彼への服従と我らの預言者(S)への服従は同等である。

> ❑ 使徒に従う者はアッラーに従ったのである。*[クルアーン 4 章 80 節]*

彼は預言者(S)のスンナと我々との連繋を協調し、このスンナを「良い模範」と呼び給う。

> ❑ 確かにおまえたちにはアッラーの使徒のうちに良い模範があった。*[クルアーン 33 章 21 節]*

ここからスンナの重要性が生じ、礼拝の重要性と、それを完全なる動作、明文および詳細によって実施することの重要性が明瞭となる。それは、毎日5回我々自身を再プログラムし、完全、高密度、即効性ある、短期間の神的プログラムのオリジナル・コピーである。それは、昼や夜の時間に我々のコンピューターに侵入するあらゆるウイルスを根絶するのに十分な反復であり、一方では我々を我々自身や我等の神的天性から逸らせようと止めない逸脱のウイルスを跳ね返す防護壁を提供し、他方では我々の現世的生活の全ての支柱において燃えさかる罪や悲しみの森林火災の消火に当たる。

> ❑ お前たちは燃えている、お前たちは燃えている、だがもし朝の礼拝を行えばそれはそれを洗い流す。それから、お前たちは燃えている、お前たちは燃えている、だがもし昼の礼拝を行えばそれはそれを洗い流す。それから、お前たちは燃えている、お前たちは燃えている、だがもし日没後の礼拝を行えばそれはそれを洗い流す。それから、お前たちは燃えている、お前たちは燃えている、だがもし夜の礼拝を行えばそれはそれを洗い流す。それからお前たちは寝てしまい、起きるまではおまえたちに対し記録が取られることはない。 *［アブドゥッラー・ブン・マスウード経由、アルバーニー『奨励真正集』所収］*

日本人の若い女医が尋ねてきた。ムスリム達が毎日5回礼拝するというのは本当ですか？、と。私は、そうだ、と答えた。彼女は驚きというよりは非難に近い口調で、あなたたちはどうやってそれが出来るのですか？、これはとても多いのではありませんか？、と尋ねた。私は、あなたは女医ですね、仕事を通じて数多くの病人と会って治療をしますね、毎日どのくらい両手を浄化しますか？、と答えた。彼女は、

30回…50回…と言って私を見つめたが、私が言うよりも前に、私の言いたいことを彼女が理解したことが彼女の目に見て取れた。

❑　立って、礼拝せよ。真に、礼拝には治癒が存在するからには。*[アブー・フライラ経由、イブン・マージャ所収]*

我々の周りの生活は誘惑、好餌、人間的弱さ、逸脱、悪魔的傾向といったウイルスで満ちており、これら全ての浄化は水ではなく礼拝によるのである。水は我々の体を外側から浄化し、礼拝は我々を内側から清めることが出来る手段なのである。もし、礼拝者が礼拝に入ったのと同様にそれから出たと感じ、自分の中の何かが変化した或いはまとわりついていた過誤の汚れの多くが無くなったと感じない、あるいはあたかも自分が新しく生まれたかの如く感じないのであれば、これはつまり彼がこの礼拝に於いて用いた「再プログラム」ディスクを適切に使わなかったことを意味する。その根拠は諸ウイルスが未だに残って彼の本体の深奥部を汚染し続けていることであって、彼は今礼拝から離れて、逸脱、誘惑、人間的弱さという元いた状態に戻ることになろう。

仮に、礼拝者の生活と、非礼拝者の生活を比較したならば、我々は後者が日常で直面する実に多くの悲劇、出来事、不幸の全てに際して助けを求める重要な武器を有していないことに憐憫を覚え、また、礼拝者　―真の礼拝者―　の状態に、そして彼の前の細道がいかに真っ暗であろうともその輝く顔の状態に驚き、例えどんな激しい困難があろうとも、柔和、謙譲、慈愛で刻印された寛容な両目によって狼狽に捕らわれるであろう。また、ついには君が周囲の顔を見渡せば礼拝者と非礼拝者をほとんど区別出来るほどであり、前者の

両目を継続的に覆うこの慈悲は聖なる節の言及する内容であるかのようである。それは、礼拝者達の顔にある跪拝の「徴」について語るのである。

> ❑ おまえは、屈礼し跪拝する彼らを見る。彼らはアッラーからの御恵みと御満悦を切望するのである。彼らの徴は彼らの顔に礼拝の跡としてある。*[クルアーン 48 章 29 節]*

それは ―アッラーこそは常に最もよく知り給う御方― 一部の人々の額にある黒い印[28]ではない。我々の一部はそのように理解するのが心地よいのだろうが、もしそれが意図されていることであったとすれば同節は「彼らの徴は彼らの額に」であったはずである。

真にそれは顔にある寛容の輝く特徴、礼拝者以外が獲得することはなく礼拝者達の顔にあるそれを信仰者の慧眼が見間違うことはないものそのものである。

我々に求められている全ての敬神行為は、これら敬神行為がその持続時間と役割において相違していたとしても、その本質に於いては我々自身の「再プログラミング」に他ならない。

斎戒は我々自身のコンピューターに「ダウンロード」するのに長時間かかるプログラムであるが、しかしその効果も長続きする。それをダウンロードするのに1ヶ月かかるが、その有効期間は丸々１年に及ぶ。我々は過ぎ去った1年間の間にウイルスで重くなった我々の欲望を

[28] 跪拝の際に額を床や地面に擦りつける結果できた礼拝胼胝（れいはいだこ）を指す。

斎戒によって再プログラムし、悪魔の誘惑を前にした人間的弱さによって時間と共に必然的に弱められた心眼を再プログラムし、月々の経過によって真理と虚偽、良き物と悪しき物、許されたものと禁じられたもの、正しさと過ちが混ざり合うようになった舌を再プログラムし、我々の中にある良き語り、信仰の甘美さ、感謝、善、忍耐、謙譲、充足、満足、良い方に考えること、公正、真理、慈悲の種を今にも殺しそうな様々な形態の悪魔の病気が1年間に亘ってしたたり落ちた我々自身を再プログラムする。

それはまた大巡礼の役割でもあるが、但しより深くより長い期間においてである。というのも、高貴なる使徒（S）が約束されたとおり、嘉された大巡礼は「その報奨は楽園に他ならない」[29]のであり、アッラーがその大巡礼を嘉納し給うた者は「母から生まれた日のように」[30]戻るのである。従って、生活の悪魔の君に対する攻撃が加速するにつれ、一日の礼拝も徐々に加速するのである。まず君は黎明の礼拝を行い、ズフルの礼拝[31]を行うまで日中の半分を待って過ごす。しかしながら、次の待ち時間はより短く、今回は日中の残りの半分の真ん中にはアスルの礼拝[32]が位置し、その後日没の礼拝によって封印される。それから、1時間と少しを過ぎると、夜の礼拝が訪れ、それから君は眠りへと去るのである。

これが礼拝の特徴であり、我々が毎日5回反復し、その諸定時が近接していることの神秘の一部である。この武器のように効果的で、

---

[29] アブー・フライラ経由、ブハーリー及びムスリム所収のハディースより。

[30] アブー・フライラ経由、ブハーリー及びムスリム所収のハディースより。

[31] 南中を過ぎて行う礼拝。

[32] ズフルの礼拝と日没（マグリブ）の礼拝の間に存在する礼拝。

正確な射的で、目標に当たることが保証されており、その所有者の勝利を保証し、期待される成果とそれ以上を実現する武器を、諸君は世界中の最新鋭の最熟練の武器工場の何処に見出すのであろうか？

礼拝のリズムと生活のリズム

人は冬には暖かさを探し、夏には冷たさを、病には薬を、餓えには食物を、渇きには水を、騒音には静粛を、恐怖には安心を…。もし、生活の速度が加速するのであれば、いや、この圧倒的な機械とエレクトロニクスの時代には加速以上であるが、またもし、生活の速度が我々を踏みつけその固い鉄の歯で我々を食らうことから守ってくれる逃げ場に礼拝がなるのであれば、礼拝が我々にもたらす反－速度が緩和、静謐、平穏、平安であってより強いものとなることが自明である。

礼拝のリズムが生活のリズムと、早い調子あるいはもしかしたら狂気そのものの調子で、同じであったならば、との想像をしたことはあるだろうか？　もしそうであれば、実際に多くの者に生じているように、礼拝は他の機械的な重荷に合流する新たな生活の重荷へと転化し、追加の時間と努力と動作と神経を消費するものによって肩の荷が増したであろう。そして、他の機械類との取り組み方と全く同様に、なるべく早く実施して終えようと望むだろう、否むしろ、この全く喜ばしからぬ結果に照らせば、多くのムスリム達に実際に生じているように、我々の生活からこの追加の機械的「義務」を完全に無くすように望むかもしれない。従って、この様な種類の混み合った「諸義務」を追加できる場所は、我々の生活には存在しない。

当初は、事態が我々にとって簡単ではないことは承知している…。如何にしてゆっくりやると言うのか、千の仕事、義務、責任、約束、プログラム、会合、訪問、研究、決定が扉で待っているというのに？！

もし、我々が礼拝の宇宙に飛翔するための準備をしているというのに、これが本当に我々の考え方であったとすれば、我々は礼拝という乗り物によっては宇宙の外側の皮を通過することも決して出来ず、乗り物は我々と共に発進する前に燃えるであろう。

- 戻り、礼拝せよ。お前は礼拝しなかったからには[33]。*[アブー・フライラ経由、ブハーリー所収]*

これに基づけば、昼間の礼拝に密かさ、つまり礼拝者が読誦の声を潜めることが存在することは自然である。この密かさの性質によって、それは話し声の高さ、日光と気温の高さ、我々の周囲の活動のリズムの高さ、仕事、獲得への猛進、込み合った緊急且つ急ぎの物質的成果の調子の激化という、一日の騒がしい時間帯の生活のリズムの高さと対蹠的に相応しいのである。

他方、夜の礼拝については、夜の沈黙、静粛、密かさ、闇と、また、活動スピードの減速と、また、追求、仕事、糧を求める調子の後退と、また、生活の挽き臼が回転と騒音を止めることと対蹠的に相応しいのである。

従って、これの空隙の一部を埋めるべく、明らかなる読誦がもたらされ、精神の連通管の均衡を取り戻し、我々内部の生活のリズムの均衡を保ち、さらには音、表象、動作の調子を整え、そうして精神的均衡が丁度我々がそれを失いそうになる時間に実現するのである。

---

[33] 預言者がモスクで座っていたところ、ある男がやってきて礼拝し、その後預言者に挨拶した際に礼拝が不十分であるとして言われた内容。

我々は一日を夜の礼拝で閉じるが、そこには長さと多様性が見られる。今我々の前には、長い4ラクア[34]が存在し、そのうちの2ラクアは夜の密かさと静粛に対蹠的に相応しい明らかなる読誦によって行う。あたかも、昼が後退して君の前に君の声で満たしてアッラーに嘆願することが出来る固有の宇宙が出現したかのように。それから、スンナ[35]の2ラクアを、それから1ラクアあるいは複数ラクアのウィトル[36]礼拝を行うが、後者については1，3，5，あるいはそれ以上のラクアとしても良い。この数における開放は、後述するとおり我々の敬神行為の多くの特徴でもあるが、日中に積み重なった穢れの規模を感じ、夜の悪魔達による悪のささやきが積み重なり誘惑してくるのを恐れるのにふさわしい程度に延長するべく、礼拝を長くするための柔軟な措置である。

ここで、礼拝における諸スンナは諸義務が多くなるにつれて増え、それが減るにつれて減ることに注意せよ。これはある程度まで、我々の生活状況の推移に対して各礼拝のラクア回数が適切であることの必要性を、また、過ぎ去る災難中あるいは昼ないし夜における我々のアッラーとの連絡必要性の高まりの程度を明らかにしている。

---

[34] 礼拝の最小単位で、例えば黎明の礼拝は2ラクア、日没の礼拝は3ラクア、ズフル、アスル、夜の礼拝は4ラクアより構成される。

[35] 推奨行為。

[36] ウィトルとは奇数を意味する。

多様性：最初の文明学校

私がかつて自問したように、諸君も自問したであろうか。なぜ、諸礼拝はこのように長さ、ラクア数、動作、読誦、時間、名前、種類などが違った状態でもたらされたのだろうか？　なぜ、他宗教の多くの礼拝と同様に、単一の形、単一の長さ、単一の色を有する存在ではないのか？　なぜ、この様な多様性、「複雑性」、「困難性」、「混乱性」があるのか？　なぜ、黎明、ズフル、アスル、日没、夜の礼拝でラクア数が異なるのか？　なぜ、義務、推奨、ウィトルというように多様なのか？　また前推奨、後推奨[37]に分かれるのか？　また強調、非強調[38]に分かれるのか？　また昼性、夜性に分かれるのか？　また密かさと明瞭さ[39]に分かれるのか？　また集合と単独[40]に分かれるのか？　これにより、それ[41]はあたかも高度で困難な学科であるかのようである。礼拝者はどう礼拝するかを知るためにそれに取り組み完璧に自家薬籠中のものとする必要がある。これは、年少者、未成年者、文盲者、無知者達に対する困難化ではないのか？　イスラームは読むことも書くこともない文盲のウンマに下されたというのに？

本当に、このような疑問に対する答えを探そうとしても我々人間の不十分な理性が、偉大なる神的叡智をとらえることはない。しかしながら、我々はムスリムであるからして、アッラーが我々に望まれた事に関する叡智を巡って「考え」、「理性を使い」、「見て考える」ことが、

---

[37] 義務の礼拝の前に行われる推奨の礼拝か、義務の礼拝の後に行われる推奨の礼拝か、の違い。

[38] 強調される推奨の礼拝と、非強調のそれとの違い。

[39] クルアーンを読誦する際に、呟くか朗々と読むかの違い。

[40] 集合礼拝か単独礼拝かの違い。

[41] 礼拝を指す。

例えその全てに到達しなかったとしてもその一部に到達するよう努力することが、命じられている。

我々自身や世界がどれほど尋ねたことだろうか。如何にして、イスラームがアラブを、今日のコンピューター革命の早さと比較しても記録的な早さで、当時、手紙が書かれることがあったならばそれを読んでくれる者を見出すべく旅をしなければならないという手紙解読者を必要とする共同体から、20年ないし30年[42]を越えないうちに、言語学、統語論、形態論、辞典学、修辞学、批評学、啓典解釈学、読誦学、ハディース学、法学、預言者伝学、伝記学、地学、歴史学、地理学、哲学、論理学、医学、天文学、計算学、数学、その他諸々の学問を確立した共同体へと移すことが出来たのか？

文明史が先にも後にも知らないような、イスラーム文明誕生における驚くべき早さに関して、礼拝がその役割を果たしていた。

かつて、礼拝の動作、諸読誦、読誦方法、定刻、形態、ラクア数、諸ラクアの種類に関する難しい多様性こそが、発明、創意、分析、記憶、思考を準備し、脳細胞を拡大するための物理的訓練をムスリム児童の頭脳が行う、最初の学校だったのである。それは、我々の子供の頭脳が、如何にして考えを纏め、諸問題を分類し、諸課題を章立て、データを分析し、学問と文明的地平を確立するかを学ぶ学校に他ならなかった。

[42] 原文のまま。それぞれ、10年を意味する‘aqd の双数形と複数形による表現であり、ゼロの書き忘れの可能性は排除される。

このような教育メカニズムによって、イスラームがこれらの文盲者達を、他ならぬ倫理、学問、文化、思想が相互補完する文明へと—帝国へとは言わない、というのもどれほど多くの帝国がモンゴルやタタールの様に戦闘、破壊、殺害しか知らなかったであろうか— 変化させることが出来たのではなかったか？

ここ西洋では、児童達は5歳で学校に入り、殆どのアラブ及びイスラーム諸国では6歳で、他方イスラームの学校に関しては7歳、つまり我々が子供達に礼拝を命じるよう命じられている年齢でそれに入る。

礼拝は、この様な多様性によって、全てのムスリムがこのような早期に学問、思考、文化、文明、建設の学校に、責任、理解、記憶、用意、準備、創意、上昇、成功のための計画といった学校が意味するところの全てとともに、入らなければならないことを意味する。

したがって今後は文盲はなく、今後は無知はなく、また、怠惰も、安逸も、無関心も、継承されてきた無知への降伏もない。君はムスリムである、しからば君は学んでいる。君はムスリムである、しからば君は文明的である。

イスラーム学校で学ぶべき最初の教科、そして熟達し合格し、それから実施しそれを生きるべき教科は、礼拝である。その数、定時、名称、種類、形態、動作、明文、遵守事項、許可事項、禁止事項を覚える必要があり、それから真のムスリムとなるために勉強を完遂し学校から卒業した際には実践を開始することが必要である。今日我々の学校や大学で勉強、教育、記憶などが学生の学問生活から消滅しているのが現実であるのとは、あるいは、学生ないし大学生

活の終了後に仕事や糧を探すための単なる手段として抱える卒業証書だけが残るのとは、反対に。

このイスラーム学校における最初の教科、また関連する聖クルアーンの科目、読誦、朗詠および復習、それから預言者のハディースの暗記によって、小さなムスリムは自動的にイスラーム諸学の他の科目へと、また理解するべき事の理解へと、そして暗記すべき事の暗記と復習へと導かれるであろう。そしてこの後、これが生活の学問の理解、沈潜、その神秘の解明への入り口となるであろう。

礼拝はムスリムにとって文化、学問、さらにそれから文明を意味する。もしそうでないならば、多くの場合、礼拝を行う家で育った学生達が礼拝の存在しない家で育った者たちよりも上位になると言うよく知られた現象を君は如何にして解釈するのか？

しかしながらこの礼拝における多様性には基本的かつ重要である文明的役割の他にも基本的で重要な役割がある。それは謙りである。

謙りのための多様性の重要性

反復、固定化、機械化を含む全てのものは、精神集中の欠如、思考の乱れ、それから散漫、もしかしたら睡眠に帰結する。

幅広く真っ直ぐに伸びた高速道路で自動車を運転している際に、如何にして眠気、倦怠、あるいは散漫が襲ってくるかに気付いたであろうか。変わることのない同一の道の形、殆ど増えもせず減りもしない同一の速度によるのではないか？　礼拝における謙り、沈潜、その意味の思考、それを通じてアッラーに到達することの第一の敵は、習慣や日常化に身を委ね、多様性をこの敬神行為において許される限りの多様性の範囲内での最良の仕方で投資せず、常に多様で変化するカーブのある生きた脇道ではなく、固定化した「高速道路」での走行に固執することである。

まさに、5回の礼拝のラクア数における多様性、これら礼拝の定時の差異、そこでの読誦の性質の差異、同様に、礼拝における体の姿勢と諸部位の動作の差異、身体動作の差異に伴う読誦の差異、その他我々が多様性技術に含めうるこれ以外の多くが、我々が礼拝に於いて実践ないし読誦する事から意識が逸れ散漫となることの防止、我々を固定や固化から遠ざけ、さらには読誦内容をより多く意識するようになり、日々の敬神行為のこの基本的柱を実施する際にアッラーとの繋がりをより強く感じより謙るようにさせ、さらには人間文明の建設における我らの出発地であった　―そしてそうあり続けるべきであるが―　学習のさらなる進展を準備する頭脳のための素晴らしい実践的訓練を目的としているのである。

かかる類例のない多様性を伴った礼拝の学習は、容易な学習ではない。そして、人間の確立が容易な行為であったのは、文明の設立が単純な事柄であったのは、そしてこの様な精神によらずして国家の建設と建立が実現したのは、この様に高い意識以外によって達成されたのは、一体何時であったというのだろうか？

見よ、果たして、我らの宗教の第2の柱における多様性のようなことの為に、そしてムスリムの子供が7歳になると受けなければならないこの「難しい授業」のようなことの為に、他の教示のようにジブリールを通じた伝達という慣れ親しんだ方法によらずして、諸世界の主が偉大なる我らの預言者を「召喚して」最果てのスィドラの元でイスラームの教えの内でも難しく長く重要な教えを与え給うたのであろうか？

多様性は柔軟性と他者を受け入れるための学校である。預言者的学校は、礼拝あるいはそれ以外、特に推奨行為において、柔軟性と多様性に関する忘れ去られることのない授業を我らに与えた。この柔軟性は、実際のところ、寛容で中庸で時代、環境、我々全てにとって多様であり得る状況に適応するイスラームの真髄を象徴しているのである。

姿勢と動作の推移…何故か？

礼拝における体姿勢の複数性と多様性は無駄にもたらされたのではない。さもなければ、例えば病人ないし脆弱者の礼拝のように、如何なる動作を行う必要もなく、座ったまま、立ったまま、もたれたまま、横たわったままで礼拝における全てを読誦することが出来たであろう。

礼拝中の諸動作が「多様性」の要素を充溢させ、反復、固定化及び散漫の危険性を排除することに果たす役割に加えて、我々は次のように問うことができる。なぜ、礼拝における読誦の推移は、身体姿勢の推移と結び付けられており、全ての姿勢には違った読誦が特化してあるのだろうか？　何故、例えば「スブハーナ・ラッビヤ・ルアズィーム」とのタスビーフが跪拝に対してではなく「屈礼」に対してあり、跪拝の時にはタスビーフが「スブハーナ・ラッビヤ・ルアアラー」であるのか？　なぜ立礼にはクルアーン明文の読誦が特化してあり、座礼の際には「アッタヒイイヤート・ワッサラワート・ルイブラーヒーミーヤ」という預言者の明文の読誦だけなのだろうか？　何故か、また何故か…？

まことに、礼拝における姿勢の変化の目的の一つとして、我々の目を覚まし、我々が顔を向けて語り始めた対象者に関する完全な意識を強化する補助作用がある。姿勢の変化とそれに同行して変化する読誦によって、礼拝が読誦内容を理解するための訓練であり、我々の実践と動作が口から出る内容と一致し、我々の言葉と行為が一致していること、我らの言うことを我々が完全に信頼し間違いなく信じていることを確認するのと同様であるように思われる。

姿勢に関する我らの理解やその哲学はさておいて、この哲学が完全で間違いのない神的解釈にどれほど及ばなかったにせよ、これら動作の目的の一つに、礼拝における行動線と発言線の伴走があり、後述するとおり、これは我々が語りかける対象者への顔向けにおける真正さとひたむきさを示す基本的で重要な事項である。

他者の注目を集めることがありそうなのは、礼拝における動作のみではなく、静息もまたそうである。まことに、礼拝中ずっとキブラ[43]に向くことの完全なる遵守、跪拝箇所を見つめることを継続的に保つこと、右や左に視線を逸らさない厳格な粘り強さ、如何なる理由があろうとも礼拝中に語りかけてきた者への返事の、さらにはそちらへ視線をそらすことの完全なる自制、いやさらには、我々とキブラとの間の空間が誰もそこを横切ることが許されない禁じられた領域であることの公表、これは、すべては他者を驚かせる事柄であり、現世的事項が混入したり、加わることが許されない、他に類例のない「大変特別な状態で」我々が礼拝を過ごしているというように彼らは区別するようになるのである。

[43] マッカ(メッカ)のカアバ神殿の方向。

アザーン[44]と10の驚異

アッラーフ・アクバル、アッラーフ・アクバル、アッラーフ・アクバル、アッラーフ・アクバル

アシュハド・アン・ラー・イラーハ・イッラッラー、アシュハド・アン・ラー・イラーハ・イッラッラー

アシュハド・アンナ・ムハンマダン・ラスール・ッラー、アシュハド・アンナ・ムハンマダン・ラスール・ッラー

ハイヤアラッ・ザカート、ハイヤアラッ・ザカート……

この様なアザーンを聞かれたことがあるだろうか？　私もない。これは、ビラール[45]が初めて聞いて読んだのと同じように、その明文を聞いて読むことを妨げる日常化を自分自身や諸君から取り除かんが為に、私が発明したアザーンである。

アザーン、同様にイカーマ[46]は、日常化とそれが我々を圧倒する事による犠牲者達の一部である。しかしながら、両者、両者の文言及び役割には驚異が存在し、我々はこれから少なくともそれらのうち10に触れようと試みるが、これは我々の人間的能力、或いは少なくとも私個人の能力が発見した内容全てである。

第１　我々のうち誰かが、次のように考えて自問したことがあるだろうか。何故、イスラームの5柱の中で礼拝のみにかかる実施前の「告知」が特化して存在するのだろうか？　アザーンはイスラームの諸柱の中でも重要なこの柱の実施が近いと告知するための音声的呼び

---

[44] 礼拝の呼びかけ。

[45] アザーンが初めて定められたときにアザーン係とされ、「預言者のアザーン係」として知られる。

[46] 礼拝開始の直前に行われる呼びかけ。

かけではないのか？　何故、斎戒のためにアザーンをしないのか？何故、礼拝のためにイカーマを行い、少し前に私が発明したアザーンにおいて行ったように、斎戒やザカートにおいてイカーマを行わないのか？

礼拝のみにこの一つの前置き ―否、アザーンとイカーマという二つの前置きと言うがよい― が特化して存在することについての神的叡智を人間的推察が把握することは出来ない。しかしながら、一瞥すれば、アザーンの意味論的重要性を理解することはできる。すなわち、それは礼拝の義務が人間が一人で他者から独立して行う個人的単独的行為ではないことを礼拝者に対し強調し喚起する ―我々のなんと多く忘れることか―、否、それが基本的に協同的公共的集合的行為であり、アザーンは礼拝に対してかかる「集合性」を結びつかせ、個人に対してこの「共同行為」に集合し一人の人間の背後で一つの場所で一つの時間に一緒にそれを行うよう呼びかけ、礼拝の役割が僕とその主の関係に限られずにしてむしろ僕とムハンマド(S)の共同体の他の僕達との間での会合、集合、近接、結束、理解、愛情にまで及ぶことを強調するのに他ならないということである。そのため、一般的に単独で行われる推奨の礼拝には、同じ礼拝であるにも拘わらず、アザーンもイカーマも求められないのである。これは礼拝の数多くの文明的諸側面のうちの一つの側面であり、これについては後ほど「集合礼拝、文明の秘密」において詳述する。

第２ アザーンとイカーマには、預言者伝中に啓示 ―方法と人物の違いによって啓示そのものではないにせよ― の位階に近い程度まで崇高な驚くべき誕生譚がある。方法について言えば、その明文

は覚醒時ではなく夢に於いてもたらされ、人物について言えば、使徒（S）ではなく教友達の夢に於いて生じたのである。

教友達2名が、同じ夢を同じ夜に同じ言葉で同じ詳細で見たのであるが、それよりもこの出来事に於いてより重要でより興奮させるのは両名のうち1名が第2代正統カリフ・ウマル・ブン・アル＝ハッターブ（R）であったことである。

これはアザーンだけにとっての特別で比類なき誕生であって、礼拝の誕生以外にはこれに比肩しその独自性と差異性を埋めることが出来るものは無い。イスラームは全てクルアーンとしてであれスンナとしてであれ啓示を通じて下された。例外は、アッラーの使徒（S）が特別な奇跡的で神聖な招待によって諸世界の主から全詳細と共に受け取るべく天へと招かれた礼拝と、至高者が類例の無い同時的で二重の教友の経路を通じて彼の誠実な預言者に伝達されたアザーンだけである。

第３　アザーンはその本質、構成、意味に於いて、それに続く長い礼拝を信仰者に準備する短い予備的礼拝の地位にある。新生児の耳にアザーンを繰り返すことは推奨行為であるが、これはあたかも彼の生涯全てに及ぶ長い礼拝を準備する短い予備的礼拝のようである。あたかも、アザーンは全ての新生児に次のように語るかのようである。おお、人間よ、君は既に人生に入った。そうであれば、そこから離れない限り終わることのないアッラーとの霊的連繋、敬神行為、礼拝を始めるべく用意せよ、その際には短い現世的な旅とは違う、アッラーとの長い来世的旅が始まるのだ。

本当に、我々の人生はその全ての詳細に於いて礼拝の一種に他ならないのだが、ただし多様且つ相違した方法においてそうなのである。生まれてから死ぬまでの我々の人生全てが至高なるアッラーのために行う崇拝行為に他ならないと高貴な書に明示されてはいないだろうか？ 「そして我が幽精と人間をつくったのは彼らが我らに仕えるためにほかならなかった」*[クルアーン51 章56 節]*。君が学習し勉強しているのであれば君は礼拝の最中であり、君が自分と家族を養うために働いているのであれば君は礼拝の最中であり、君が人々と社会に奉仕しているのであれば君は礼拝の最中であり、君が生きて強くあるために食べるのであれば君は礼拝の最中であり、君が健康に気をつけているのであれば君は礼拝の最中であり…。我々の生活は「A」から「Y」まで[47]敬神行為であり礼拝である。

アザーンの言葉をよく見よ、そうすれば詳細なる礼拝への道を準備する簡略な礼拝に他ならないことを見出すであろう。

第４　今、君がこれまでアザーンもその言葉も聞いたことが無いと想定し、「アッラーフ・アクバル」との表現を初めて聞いたと想像せよ。とはいえ、それはアザーン自体よりも古く、ムスリム達が礼拝を昇天の夜に我々の高貴な預言者が主から受け取ったとおりに知った時以来、それ[48]を知っているのではあるが。その意味、その言語的に類例無い形式について考えよ。それは、統語論的には不完全な表現であって[49]、それ故に想像及び現実に於いて補完されることが可能な

[47] 文字表の始めから終わりまで。徹頭徹尾。英語の from A to Z に相当。

[48] アッラーフ・アクバルとの表現。

[49] アクバルは比較級であるため、比較のためには対象者を表す前置詞の min（～より）が必要とされる。なお、アラビア語には英語の better と best のような比較級と最上級の形態論上の区別はない。

数多くの可能性に開かれているのである。アッラーは偉大なり…彼を差し置いて私を掛かりきりにさせようとする現世よりも。アッラーは偉大なり…私の手元にあるこの財物よりも。アッラーは偉大なり…私の生活を台無しにする不安よりも。アッラーは偉大なり…私の直面する敵よりも。アッラーは偉大なり…私を抑圧する巨人達や暴君達よりも……等々。*[この驚くべき表現については後に詳述する]*

「アッラーフ・アクバル」は真にアザーンの全てを要約する表現であり、イスラームのみが有するこの驚くべき呼びかけの軸であり、いやむしろそれはイスラーム全てを短く纏めた表現である。御自身を除くあらゆる事よりも「より偉大で」より壮大な御方が存在すると認め、従い、「身を委ねることを」公言したからこそ我々は「ムスリム」[50]なのであり、それゆえに我々は彼に従い身を委ねるのである。それは端的に「イスラームの表現」である。「アッラーフ・アクバル　＝　イスラーム」。

第５　アザーンは、限定された少ない言葉によって、アラブにとってまた当時のアラブ以外の諸民族にとっても同様に新奇で類例のない言語的表現様式によって、もたらされた。この表現様式は、当時の時代の何世紀も先を行っていた。それが、短くまた分断された文章として、「真に」や「既に」や「本当に既に」や「また」や「そして」などといった我々が表現を繋ぐ際に使い慣れた伝統的な言語的不変化詞や接続詞によって繋がれることなく、もたらされたことに注目せよ。これは、本当に、今日携帯電話で交換し合うファスト・メッセージの表現様式を思い起こさせるのでは無いか？　アザーンはこの少なく直截で明瞭な言葉によって、新たなる呼びかけ[51]　―それに向かって彼ら

[50] ムスリムとは言語的には帰依者を意味する。

[51] イスラーム入信への呼びかけ、宣教。

は彼らの偶像、信仰内容、無明時代を捨て去ったのだ―　の精髄をアラブの為に要約したのである。

第６　これよりもさらに驚くべき事は、この短い礼拝が、それをもたらしたこの素早い電報言語の性質に基づいて、大きな礼拝の一番大事な部分すなわち開端章の言語と交響していることである。開端章もまた、その短い電報的表現によって、我々やアラブが言語に於いて慣れ親しんだこれら接続詞を含まないのではないか？

　私は確信しているが、もし事態が我々の通常の人間的言語に委ねられていたとしたら、開端章の言語は以下のような内容の一種となっていたことだろう。

「称賛はアッラーに帰す」が我々はそれ[52]を高く掲げ、その御方は「諸世界の主」であって、また同様に「慈悲あまねく慈愛深き御方」であって、また他者ではなく彼のみが「裁きの日の主宰者」であるところ、おお、おお主よ、我々が人生のあらゆる事柄について「あなたにこそわれらは仕え、あなたにこそ助けを求める」存在であることを確認するがために参りました、そして我らはあなたに向かいます、「我らを真っ直ぐな道に導き給え」と冀いつつ懇願しつつ。

第７　アザーンが敬神行為に占める位置によって、それには諸作法と遵守事項が存在する。従って、我々には預言者のスンナに基づいて、それらの言葉一つ一つに対応した言葉で、それらの言葉の反響に相当するように、返事をする事が課せられる。また、それだけで

[52] 称賛。

は飽きたらず、アザーン係の読誦の後に、別の預言者的言葉を繰り返して最後に付け加えるのである。

コンピューター装置のインタラクティブ・システム、および今日それから派生したそれ以外の驚くべき諸装置や諸システムについて耳にされただろうか？　14世紀前に、人間とその周囲の自然との間のインタラクティブ・システムやコンピューターが存在する前に、高貴なる使徒（S）が我々のためにスンナとなしたとおり、我々とアザーンとの関係は、受信波[53]と受信内容に対する反射波との間で往返し反響するインタラクティブな関係性である。アザーン係から発出する全ての表現に対応して、その表現に対する反響に相当するべく、それを聞いたものが反響させる別の表現が存在する。

第８　礼拝とアザーンとの間のこの驚くべき言語的交響要素の一つに、その[54]各表現がそれぞれ2回繰り返される際の、言語的二重構造が存在する。この二重性によって、第一に独立した言語的特徴が強化される一方で、しかしより驚くべきは、礼拝の一般的構造と交響性が強化されることである。

「2」という数字はイスラームの敬神行為、念唱、祈祷において一般的な基軸的数字ではない。通常は、3、7、10、27、33、99、100が支配的である。それにも拘わらず、アザーンの表現は2回繰り返され、それはその二重性によって礼拝の構成と交響するのである。礼拝開始のタクビールの際に両手を挙げ、礼拝において2ラクア毎

[53] あるいは入射波か。ただ、入射波には mawjah sāqiṭah ないし mawjah wāridah との定訳が存在する。
[54] アザーンの。

に座り、各ラクアにおいて2回跪拝し、それから礼拝の終わりに2回アッサラーム・アライクムと挨拶するように。これは再度、アザーンを復唱する際の我々の感情を強化するのである。我々は、実際のところ明瞭な声によって短い礼拝としてそれを復唱するのに他ならないのである。

第9　如何にしてアザーンの表現が、一人称、二人称、三人称、単数、複数といった特定の代名詞をとらない中立的言語によってもたらされたかについて一度でも注意したことはあるだろうか。これから外れるのは二つの証言だけであるが、それはその中に個人的責任という意味、「私は証言する」と復唱する者の舌によってこの責任を確定することの重要性という意味が込められているからである。動名詞の「来たれ ḥayya」ですら、単数、複数、男性形ないし女性形の代名詞に特化していない。この言語[55]においてかかる中立的言語表現は稀であり、多くの場合、タスビーフ、唱念、及び礼拝に特化しているのだが、しかしながら再度この中立性によってそれは礼拝の柱である「開端章」の表現ともまた交響するのである。「開端」章の前半分は、かかる稀用表現によってもたらされたのではないのか？　これは時間的次元から免れており、また言語に次元を掛ける3つの代名詞、通常我々が話しまた書く殆どの場合に起点とするものからも自由なのである。

第10　現在では我々の一部の者は、アザーンの中に一般的に礼拝が我々から獲得する関心に匹敵しない周縁的言語的実施を見て、礼拝前のその実行を軽視し無視するかもしれない。しかし、我々に心を砕き、その使信に対し誠実であり、その主が「信仰者たちに対

[55] アラビア語。

して憐れみ深く、慈悲深い」[56]と形容し給うた使徒（S）は、我々に対し別のことを言われている。

> ❑　アザーンを行わず、彼らの間での礼拝の遵守もなされない3名があれば、悪魔が彼らを圧倒したのに他ならない。*［アブー・ダルダー経由、アフマド所収］*
>
> ❑　アブドゥッラー・ブン・アブドゥッラフマーン・ブン・アブー・サアサアが彼の父から伝えたところによると、アブー・サイード・アル＝フドゥリーは彼[57]に次のように述べた。あなたは羊や沙漠が好きと見受ける。あなたが羊たちと共にいるか沙漠にいる際に、礼拝のアザーンを行ったならば、呼びかけの声を高くせよ。アザーン実施者の声が届くのを聞いた幽精、人間、事物で、復活の日にその者のために証言すること無しにそれを聞くものは無いのだから。*［ブハーリー所収］*

見よ、もしこの呼びかけが単に注意喚起の手段であったとすれば、羊、沙漠、諸静物が何故それとそれを聞くことを必要としたのであろうか？　どのようにして、彼らの中でアザーンを行わない者を悪魔が圧倒するのか？　これら高貴な預言者的指示は、初期ムスリム達をアザーンとイカーマの価値および両者が人生に果たす役割へと導く、彼らのための灯台と導きだったのである。それ故、君の指の間からこの敬神行為がこぼれ落ちないように努めよ。

今日、礼拝には何種類あるのか？、と問われたとすれば、私は密かなもの、明瞭なもの、声高いもの　__この一番最後で意図するの

---

[56] クルアーン 9 章 128 節。

[57] アブー・サアサアの父。

はアザーンである__ と答えるであろう。これら3つの礼拝の全てに、我々の人生の管理と諸事の廉潔さに於いて異なった重要な相互補完的役割があるのである。

アザーンは、礼拝という集団的最終的最大的投資プロジェクトを用意する短期投資プロジェクトである。

2つのウドゥー

❏ もし、我が共同体に重荷になるのでなかったとしたら、私は礼拝ごとにウドゥーを、そしてウドゥー毎に歯磨きを命じたことであろう。*[アブー・フライラ経由、アフマド所載、アルバーニーにより真正と判定]*

何故礼拝毎に？！と自問しながら、私がこのハディースを前にして立ち止まることのなんと多かった事よ。私がウドゥーが有効であり清浄な状態 ―これはスンナの根幹である― であるというのに、アッラーの使徒(S)が新たにウドゥーをやり直すことを私に望まれるとは何のためであろうか？！ もしそうして、再度ウドゥーを行ったとしたら、そこには水の消費における浪費がないだろうか？ さらに言えば、この奨励が、ナイヤガラの滝や大湖を擁する国々ではなく、沙漠の中心から現れ出たとは一体どうしたことであろうか？！

私は三つの天啓の聖典を読み、高貴なハディースの一群でアッラーが私に読むことを望まれたものを読んだが、イスラームが行ったように、信仰箇条、礼拝、敬神行為及び文明全てを、浄化、沐浴及びウドゥーと関連づけた宗教を見出さなかった。また、ムハンマド(S)が自らの共同体に奨励したように、自らの共同体に清潔、装飾着用、良き外見を奨励した預言者を見出さなかった。そうであるというのに、イスラームの教えに関する、イスラーム共同体の現状はどうであろうか？

ウドゥーを繰り返すことの強調は、清潔がシャリーアの諸目的の一つとして求められる明確な目的の一つである健康的、文化的、文

明的外見である事のみにではなく、ここではウドゥーに象徴されるそれ[58]が内面的な精神の清浄さとも結びついていることによる。君の体や服を汚すもの全てからの完全なる外面的浄化は、結局のところ、外見に反映されることが必然的である内面的浄化 ―存在すればだが― の当然の帰結かつ正直な視覚表現なのである(一部の学派では、陰口はウドゥーを反故にするものに含まれる)。

この理路によって、我々はウドゥーには内面性と外面性の2種類があると言うことができ、前者がなければ後者は無益であるために、前者がより重要である。穢れの穴に沈んでいる者にとって、どうやってウドゥーがあり得ようか？ 君が外面的四肢に対して浄化行為を行っている際に、それと同じような浄化を内面的四肢に対しても行ったかどうかを確認することが必要である。それは水やタヤンムム[59]によって完遂するのではなく、怨み、嫉妬、怒り、陰口、我欲、虚言、欺騙、反抗、忘恩、攻撃、舌鋒、精神の低劣さ、罪、悲観、腹黒さなどの君の内部に蓄積した精神的な穢れを排除することである。

たとえ、諸段階に分けてでも、これら全ての穢れから清まるようにとの意図をひたむきにせよ、君の顔、心、魂および言葉を間もなく君がその御前に立つことになるアッラーのみに向けることが出来るようになり、君が言葉を明らかにすればそれを受け入れ給い、君が囁きかければそれを聴き給い、君が罪の許しを願えば赦し給うために。

❏ ある男が預言者(S)のところに来て、言った。某は夜には礼拝するが、朝になると盗みを働く、と。これに答えて、お

[58] 清潔。

[59] 土による清め。

まえが述べたこと[60]がそれを止めるだろう ＿つまり彼の礼拝が彼を盗みから止めさせるだろう＿ と言われた。*[アブー・フライラ経由、『光の壁龕』所収、アルバーニーにより真正と判定]*

❑ おまえたちは破産者が何であるかを知っているか？[61]

我々の中の破産者とは、1ディルハムも有さず、売るものも有さない者です、と彼らは答えた。そこで彼は言われた。私の共同体の破産者とは、復活の日に礼拝と斎戒とザカート[62]を伴ってやってくるが、彼はこの者を罵った、彼はこの者を中傷した、彼はこの者の財物を貪った、彼はこの者の血を流した、彼はこの者を打擲したといったこともやってきて、これには彼の善行から与えられ、またこれには彼の善行から与えられ[63]、彼の上にあるもの[64]が終わる前に彼の善行が消え去ってしまったならば、彼らの過ちが彼の上に投げ捨てられ、それから彼は火の中に投げ捨てられる。*[アブー・フライラ経由、ムスリム収集]*

見よ、我々の間にどれほど破産者がいることか？ 我々のどれほど多くにとって、実践から敬神行為が分離していることか？ 君は彼らが屈礼し跪拝し額に跪拝の印があるのを見るが、彼らと付き合いをすれば、彼らの付き合いの顔の上にはその印の痕跡すらも見出さない。

---

[60] おまえが述べた某が礼拝するという事実。

[61] 預言者ムハンマドによる問いかけ。

[62] 定めの喜捨。

[63] 他者に対して成した悪行に対し、埋め合わせとして自らの成した善行が支払われることによって相殺される。

[64] 彼の罪。

❏ まことに、礼拝は醜行と忌み事を禁じる。*[クルアーン 29 章 45 節]*

本当に、ムスリム達における敬神行為と行為との分離現象は、世界に対してイスラームの正しい姿を見えなくさせる最も危険な存在となっている。啓示として降されたものを人々に教える際、使徒(S)はクルアーンとクルアーンに基づく行為とを分離されなかった。

❏ アブー・アブドゥッラフマーン・アッニスラミーがウスマーン、イブン・マスウード、およびウバイイ・ブン・カアブから伝えるところでは、アッラーの使徒(S)はかつて彼らに対して10 __ つまり節のうちの__ を読誦したが、彼らがその内容を実践において理解するまではそれを超えて別の10に移ることはなかった。こうして、我々はクルアーンと実践を共に学んだのである。*[クルトゥビーの解釈書、1 巻 39 頁]*

我々が敬神行為を再発見し、礼拝を再発見し、致命的な日常化によって他の諸宗教に存在しないこのイスラーム独自の宗教行為の偉大さを感じることが殆ど死滅してしまいそうになる度に、日々ウドゥーの再発見をすることが必須である。

かつて、あたかも初めてウドゥーについて聞きまさにそれを実践しているかのように、ウドゥーをするという経験をしたことがあるか？ それを行ってみよ、そうして自分はいったい何を発見しただろうかと自問せよ。

もし、さらに思考に注力したならば、ウドゥーがその本質において礼拝と同様に生活のシステムであると発見したであろう。

それは第一に清潔でありこれによって文化人は区別され、第二に注意深さ、正確さ、継続でありこれによって成功者は区別され、第三はシステム、順列立て、約束の遵守、条件の尊重でありこれにより文明人が区別され、第四、第五、第十は継続的かつ執拗な内省および全てのウドゥーとウドゥーの合間に自我についたかもしれない生活の穢れからの浄化でありこれによって信仰者は非信仰者から、畏れ身を守る者はそうではない者から、アッラーへ回帰する者は迷い彷徨う者から区別され、遂には君はあれらの者の顔やこれらの者の顔によってこれを識別し、いやさらにはウドゥーを行う者の顔を行わない者からいまにも区別せんばかりである。

タヤンマムは、おお心よ、アッラーとの会合の準備をせよ、程なく始まる彼との会合を台無しにするかもしれない全てを排除せよ、彼こそはおまえの秘密を知り、おまえの隠すことも公にすることも見ておられる御方であるからには、との心への無線メッセージ __この場合には、無水メッセージ__ の地位にある。これに対し、ウドゥーはこの意味に於いて心に対して同内容の信号や忠告を担う有水メッセージであるが、ただ、別の方法によってである。

「ウドゥー wuḍū'」という単語は「光 ḍau'」から派生している。なぜなら、それは顔と心の両方に光を送るからであり、顔の光とは精神と心の内的光の反射に他ならないのだから。

人生に於いて、ウドゥーがない状態を無くすように努めよ。仕事へと歩むとき空を飛んでいるかのように感じるであろう、また人々に挨拶するとき天使達と握手しているかのように感じるであろう、仕事をするときその成功に対する全幅の信頼を有しているかのように感じるであろう、頭を枕に置いたとき信託事項に於いて果たすべきを果たしたかのように、信頼置ける高貴で良く赦し慈悲深い御方の前に身を横たえたかのように感じるであろう。

集合礼拝：文明の秘密

諸君は、私が自問したように、文明の定義とは何かについてかつて自問したことはあるだろうか？　それは、機械、工場、コンピューター、ロケット、艦隊、飛行大隊、宇宙船、原子力爆弾であろうか？　真に、これらは全て文明の成果であって、これらの成果を生み出した文明それ自体は10の種子に要約される。つまり、①清潔、②正確、熟達、③刻限の遵守、④制度化、秩序遵守、⑤正直、信用、⑥集団行為ないしチームワーク、⑦寛容、謙虚、他者の受入、⑧専門分化、個人責任、⑨忍耐、意志、決意、⑩公正、平等である。

諸君は、私が自問したように、集合礼拝が何故あるのか自問したことはあるだろうか？　何故我々は毎日5回、特定の　―いや例え五分間ですら遅れたならば逃してしまうほど厳格に特定されている―刻限に自宅、事務所、商店、工場を出なければならないのだろうか？　諸君は、私が自問したように、何故どこのモスクにおいても「我々が飾りを付け」[65]なければならないのか自問したことはあるだろうか？　何故、その前に浄化をするのか？　なぜ、ウドゥーなのか？　果たして、本件はアッラーの館の尊重にのみ、我々がアッラーの前に立つ準備のための「清浄さ」にのみ関わっているのか、それとも本件は、尊重や準備という宗教儀礼的な機能に匹敵し伴走するような、清浄、清潔、飾りを纏うこと、配列の文明的機能と結びついているのか？

刻限の遵守について言えば、集合礼拝はムスリムが文明の灯火を手に取る資格を得て卒業するのに最良の学校である。集合礼拝にたった5分間遅れることは、君がそれを損失し、その報奨を求める

[65] クルアーン 7 章 31 節参照。

権利が失われた事を意味する。この5回、毎回毎に、ムスリムに対して繰り返される素晴らしい授業が、一分間の価値を知り、他者との刻限を正確に遵守しないことによって生じる損失の価値を知るムスリムを輩出するのに十分では無かろうか？

私が年端のいかない若者だったとき、我等が師、故アルバーニー師と、一つのモスク内で一つの礼拝の為の集団成立の複数制という考えについて擁護の議論を行ったことがある。第1の集合礼拝に遅れた者たちが、自分たちの中からイマーム[66]を選出して第2集合礼拝を挙行する、それから別の者たちがやってきて第3集合礼拝を挙行する、それから第4集合礼拝、といったことが許されないのは何故か？

かつて、アルバーニー師は有給のイマームを有する一つのモスク内でのこの様な複数集合礼拝については、可能な限り厳しく拒絶した。そして私は、残念ながらずっと後になるまでこの拒絶の叡智を理解しなかった。モスク内での複数集合礼拝は、モスク外における複数集団、複数方向性、複数派、人々の心の不一致、疎遠、分裂の反映に他ならないからである。一つの集合礼拝の遵守は、一つの刻限、一つの列、一つの心、一つの共同体を遵守するための日々の継続的神的訓練である。

他方、浄化、清潔、装飾を取ることは、我々がモスクに入る準備、アッラーの前に立つ用意である。また、それ自体は、かつて君がしたように、我々が無知の不浄、文盲の闇、無駄の穢れ、遅延、無関心、無分別の混乱から移行させるための用意であり、身体及び衣

[66] 礼拝指導者。

類のみならずモスク、家屋、事務所、学校、病院、業務、道路、精神といった多様な生活の側面における、清潔、良き外見、適切さ、配列といった基本的文明条件を満たさない者全員の眼前で扉を閉めてしまう文明クラブに入るための準備である。

おお、いま我々はモスクの中にいる。イスラームが創始し我等の言語辞典に編入した信仰行為の館に対する新しい名前は、僕がその主に最も近くなる姿勢、つまり跪拝[67]を常に思い起こさせる。跪拝は君の頭、額、鼻が地面の水準に位置することを意味し、これは謙りと悔悛の限界的段階である。従って、頭を下げ、額を低くし、自分自身を土の上でアッラーに対し低めた程度によって、君は彼に近づき、天における彼の元での位階は上昇する。

アッラーが天使達を形容し給うたように「彼への崇拝に対して思い上がることなく」[68]、偉大なる創造主の前での、昼夜に亘る、1時間、2時間ないしそれ以上の時間毎に、信仰者達が実施するこの日々の謙り訓練によって、謙りは ―礼拝が畏怖によって成されたならば― 彼らの間で贈与交換する彼らの性質の深い一部となり、そうして彼らの人生にはもはや高慢にとっての場所はない。というのも、彼らは「信仰者達には謙虚で」[69]とアッラーがその書に於いて命じ給うたのと同様の状態に、彼ら同士の間でなるからである。誠実な彼の使徒に「そして信仰者たちに対しておまえの翼を低く下げよ(柔和であ

[67] モスクはアラビア語で masjid、跪拝は sujūd、両者とも語根 s j d からの派生語。仮に masjid を跪拝の意味に寄せて訳すならば、跪拝所となる。
[68] クルアーン 7 章 206 節、21 章 19 節。
[69] クルアーン 5 章 54 節。

れ）」[70]と命じ給うたのと同様に。そうなれば、文明領海に入るための第一歩を踏み出したことになるのである。

我等が「モスク」に入ると、我々は跪拝の学校、謙虚、謙下、悔悛、信仰者への柔和の学校に入っているのだと、また同様に我等を集め、平等となし、心を一つとなし、嫌悪と怒りを除去する「集会モスク」[71]に入っているのだと想い出す。そうであれば、仲違いも憎しみもなく、大きな者も小さな者もなく、偉大な者も卑小な者もなく、指揮官も貧困者もなく、抑圧者も被抑圧者もない。

> ❑ 列を成せ、お前たちは天使達の列によって並べられるのに他ならないのだから。肩と肩を並べよ、隙間を埋めよ、同胞の手に優しくあれ[72]、悪魔のために空隙を残してはならない。そして、列に繋がった者は、アッラーが彼に繋がり給うたのであり、列と切れた者は、威厳あり威力比類なきアッラーが彼と切れ給うたのである。 *［アブドゥッラー・ブン・アムル経由、アルバーニー『真正集』所収］*

アッラーよ…。我々はこの高貴な預言者の忠告をどれほどの回数読んだことだろう、あるいはハディース、諫言、金曜集合礼拝の説教においてそれをどれほど聞いたことだろう、モスクにおける礼拝のイカーマにおいて礼拝指導者が幾度我々に対して繰り返したことだろう、しかしながら、我々の中でその表現全てに注意を払い、言葉の背後と行間を読む者は誰であろう。そうすれば、この預言者のハディースは

---

[70] クルアーン 15 章 88 節。

[71] 集会モスクなどと訳される jāmi‘ は、「集める者」を意味する。

[72] 礼拝の列に加わろうとした者の為に場を空ける様にせよ。あるいは列に加わろうとして後から肩をたたいてきた手をむげに扱うな、の意。

単に列を等しくすることに関する基礎なのではなく、精神を等しくすることに関する憲法、誰かが誰かの上に立つことがない平等な文明的社会の建立[73]のための完全なる制度であることを知るであろう。

まずは次のような方法で、ハディースを読みながら自問していくこととしよう。なぜ、「列を成せ」、そして「肩と肩を並べよ」なのか？　列を真っ直ぐにし、肩と足を並べることに対して立法者によって据えられたこの大きな重要性は何故なのか？　答えは単純である。というのも、文明はここから始まるのであり、それは文明の諸種子のなかの別の種子なのである。

君は第一に、礼拝に於いてこの集合的会合への出席に招待されているのだ。なぜなら、文明とは集団行為であって個人行為ではなく、チームの精神を感じること、利己主義や我欲を取り去ることであるからだ。第一に、文明とは集団なのである。

第2に、一回だけではなく毎日5回も、同胞と会うための厳密で特定の約束時間の遵守に呼びかけられているのだ。そうして、血管の中を約束時間の遵守と忠実さ、厳密さの精神が巡るようになり、取り除くことの出来ない君自身の一部となるのだ。文明とは厳密さ、我々の時間及び他者の時間に対する尊重と遵守なのである。

第3に、この会合に於いて集団の他の諸個人と列を成すよう呼びかけられているのだ。なぜならば、そこでの組織化と秩序付けは自動的に諸君の精神の組織化、頭脳の秩序付け、仕事の完璧さ、心の繋がりに反映され、これら全てによって、成功した、協力的、相互

[73] イカーマ。

補完的、文明的社会が成立することとなる。文明は、集団的行為、相互補完、組織化、秩序付け、完璧さ、忍耐、謙虚さ、寛容さ、他者の受入、方途、目的、心、精神の触れ合いなのである。第3に、第4に、第5に、第10に。

それから、立法者はこの基礎を我々の前に放置する ―そうして、我等の弱さや怠け癖や自分の希望通りにしようとする人間的実施によって駄目にされてしまう― だけでは十分とせず、我々の誰もそれを排除したり歪めたり補正しようと考えないように、それを直接的に天と結びつけた。おお、アッラーの前に立つ者たちよ、地上での礼拝におけるお前たちのこの列は、あの天における天使達の列になぞらえられるのである、と想起せよ。「お前たちは天使達の列によって並べられるのに他ならないのだから」。これは、地における文明の条件と要件と、あの天において発生し秩序付けられる事との間の、驚くべき叡智に満ちた連繋なのである。このハディースは、短い言葉で我々にこう語るのである。正しい崇拝行為は正しい文明であり、天に於いてそうであるように、地においてもそうであるべきである、と。

それから、これら全ての後で、別の条件の遵守に呼びかけられているのだ。「隙間を埋めよ…悪魔のために空隙を残してはならない」。これは文明の創成における個人責任及び信用である。我々の全員は、共同体の様々な間隙のうちの一つの上に立ち、全員はその専門分野におり、全員にその文明構造の建立において個人的役割及び仕事、専門的技能を有しているのである。如何なる個人であれ、この間隙を埋める責任を放棄することは、悪魔のために空隙を残すことを意味し、さらには、それはかかる構造における裏切り、敗退、動

揺の惹起であり、そこから共同体に侵入されてしまうかもしれない。文明は、専門性、個人責任、癒合、構造である。

再度、立法者はこの大地的基礎を天に結びつける。アッラーの僕よ、想起せよ。本当に、おまえがここで列に繋がれば、あちらではアッラーがおまえに繋がり給い、おまえがここで列と切れれば、あちらではアッラーがおまえと切れ給うのだ。「そして、列に繋がった者は、アッラーが彼に繋がり給うたのであり、列と切れた者は、威厳あり威力比類なきアッラーが彼と切れ給うたのである」。ここ、大地の上での文明の条件と、あちら、天で起こることとの、これ以上明快な連繋があるだろうか？　これは、敬神行為の条件と、文明の条件の連繋である。

それから、あれやこれ全ての上に、冷酷さの排除、そして礼拝において／社会において／人生において同胞に対し柔らかく接するよう呼びかけられているのだ。「同胞の手に優しくあれ」。本当に、同胞たる礼拝者達が前に出たり後ろに下がったり列の間の空隙を埋めることによって列を整えることで私たちを助けるようとするとき、肩を柔らかくすることは、最終的には我々の心や性質を反映するのである。従って、我々は他者への冷酷さに傾いてはならず、思考及び諸事の処理に於いて、また見解あるいは信仰箇条について相違する者達との関わりに於いて、厳しさ、粗野さ、過激さ、暴力に傾いてはならない。信徒達の母アーイシャ（R）が伝えるとおり、アッラーの使徒（S）の有り様はその人生の全詳細においてこの様であった。

❑　アッラーの使徒は、召使いも女も打擲することは全くなく、その手で何かを打擲することも全くなかった。但しアッラー

の道に於いてジハードする事は例外であった。二つの選択肢の間で選択を迫られた場合には、彼にとって好ましいのはより容易なものであった。但し、罪にならない範囲に置いてである。もしそれが罪であれば、彼は罪から最も遠い人間であった。彼に立ち入った __つまり彼に向けられた__ 事柄に対して自分自身のために復讐したことはなかった。但し、威厳あり威力比類なきアッラーの禁忌が犯されない限りに於いてである。もしそうなれば、彼は威厳あり威力比類なきアッラーの為に復讐する。*[アーイシャ経由、アルバーニー『真正ハディース双書』において真正と判定]*

讃えあれアッラーこそ超越者、アッラーの使徒(S)がどれほど我々が謙虚であることを切望していたことか。だがしかし我々は傲慢となった。そして、我々が柔和であることをどれほど切望していたことか。だが、我々は冷酷となった。我々が中庸であり寛容であることをどれほど切望していたことか。だが、我々は厳しくなり、過激となった。我々が相互理解し、近接することをどれほど切望していたことか。だが、我々は互いに疎遠となり相違した。我々が集い、統一し、強くなることをどれほど切望していたことか。だが、我々は分裂し弱くなった。

既にムスリム達は、スンナ派とシーア派の間に、そして数多くの詳細を巡って相違している。しかし、時間と空間の広がりの中で、礼拝の柱、基礎、数、動作、定刻を巡っては相違していない。その理由は、礼拝実施の集合的形式である。

大多数の敬神行為における集合構造は、それを改変から守ったのである。ムスリム達はクルアーンの明文を巡って相違してはいない。

なぜならば、イスラームは朗々とした読誦を伴う礼拝を通じて毎日３回[74]の集合読誦及び継続的認証を義務づけているからである。これは、全ての地域及び村のモスク、全ての家で完遂される。礼拝指導者が読誦し、その背後の礼拝者達が彼の読誦を検証し認証するのである。ムスリム達はクルアーンの解釈を巡って相違しているのに他ならない。なぜなら、解釈は集団的行為ではないからである。彼らは礼拝の形態を巡って相違しているのではない。なぜなら、それは毎日５回集合形式によって、モスクに於いて認証される集合敬神行為であるからである。そうではなく彼らは、礼拝に於いて心が最初に向き合うべき対象者を巡って相違しているのである。とはいえアッラー以外には心を監視する者はいない。彼らは大巡礼の形態や基礎を巡って相違しているのではない。なぜならば、それは同様に集団監視と認証の元で行われる集合敬神行為であるからである。そうではなく彼らはどれが基礎であってどれが基礎ではないのか、どれが分枝であってどれが分枝ではないのかを巡って相違しているのである。

今日ある大地の諸共同体を眺め、文明化した者と遅れた者を区別しようと努め、両集団の最重要の諸属性を精査したならば、文明化した者達が、謙虚となり、寛容となり、集合し、連帯し、専門分化し、一つのチームとして、一つの手で、一つの心で、意欲と決意と意志を持って祖国の建設に働いたことを、また、遅れた者達が、尊大となり、傲慢となり、厳しくなり、疎遠となり、無関心となり、拒絶し合い、離れ離れに行き、それぞれが別の道にあり、もし彼らの２集団が出会ったならば、両者の間に燃えさかった内戦の火あるいは戦闘にあることを見出すであろう。残念ながら、ムスリム達の最も一般的な状態や大多数の国々はこの様な事態ではないだろうか？

[74] 黎明、日没後、夜の礼拝。

我々の全てが、次のハディースを眼前に置き、その言葉に目をこらし、それから自分自身、自分の家族および周囲の者に当て嵌めたならば、使徒（S）がそこで集合礼拝を強調しただけではなく、この強調の秘密を明らかにされたことが明瞭となるであろう。統一、力、連帯、さもなくば我々は狼たちの餌食として倒れる群れからはぐれた羊のようであり、この世界に於いて我等の周囲になんと狼たちの多い事よ。

> ❑ 沙漠ないし村にいる3名で、彼らの間では礼拝が遵守されないのであれば、悪魔が彼らを圧倒したのに他ならない。それ故、集団と共にあれ。狼ははぐれもの __つまり、群れから離れて一匹でいる羊__ を食するのに他ならないのだから。*［アブー・ダルダー経由、アブー・ダーウード所収］*

集合礼拝に於いて体だけではなく心が集ったのであれば、その後に、それ[75]が我々の人生及び嗜好に反映されるのは必然的であり、従って我々は集団的に行動し、集団的に選好しないし選好せず、集団的に受入ないし受け入れず、集団的に思考し、集団的に労働し、集団的に建設し、集団的に喜び、集団的に悲しむ。これによってのみ、ムスリム達は無明時代の無明性、後進性、劣等性から、イスラームの文明、倫理、思想、学問、領土の一体性、子孫の一体性へと変化したのであり、彼らの元に於いて集団と楽園が集ったとき、彼らは天と地を一つにしたのである。

---

[75] 心。

❏ 集団と共にあれ、分断に気をつけよ、真に悪魔は一名と共にあり、2名からは遠くあるからには。楽園の中央を望む者は、集団と共にあれ。*［ウマル・ブン・ハッターブ経由、アルバーニーが『スンナの書』の精査に於いて真正と評価］*

文明は集合、相互補完、統一、完璧性、厳密性、謙譲、柔和、寛容、他者の受入、近接性、意欲、意志、忍耐である。

金曜集合礼拝の説教
開発発展コース

オックスフォードのとあるモスクで、金曜日の礼拝指導者が一言もアラビア語を発せずに英語で説教を終えた際、礼拝者達は抗議して騒然となった。礼拝指導者の説教は正しくない、アラビア語以外で行った、説教がアラビア語でなければ金曜集合礼拝全体が受け入れられない…。

我々はここ英国に於いて、この様な出来事を前にして驚きと感心とともに立ち止まることが多い。愛情、聖性、尊敬といった我等アラビア語話者が失ってしまったものを彼らがこの言語に対して保持していることを見出す際の、アラビア語を解すことのない同胞達の一部に対する評価と満足を伴った感心である。それは、我々の中に面目無さを引き起こすような、部分的に我々を正道へと引き戻すような、アラビア語に対する我々の尊敬と愛情を殺してしまう否定的な日常化の影響から脱却することを奨励するような、その[76]再発見、その価値と地位と聖性の再発見を助けるような尊敬である。

それは本当にこれら同胞の輝く側面であり、我々アラブに罪の意識を感じさせ、我々が我々の母語に対して忘れている聖なる側面を想い出させるものである。しかしながら、この光景には別の顔がある。

これらの同胞達が金曜集合礼拝の説教が譬え彼らが理解しない場合においてすらアラビア語のみで成されることに固執するのを我等が眺めるその時に、金曜集合礼拝の説教の存在目的であるその基

[76] アラビア語の。

本的且つ必須の役割に関する一部のムスリム達における不十分且つ歪んだ理解の問題が、明瞭に体現されて立ち現れるのである。同様に、ムスリム達における宗教と人生の危険な分裂症的言動が明らかになる。おまえの説教をおまえのクルアーン及びおまえの預言者の言葉でなせ、そしてそうした後であればおまえが言ったことや言わなかったことは重要ではない。５回の礼拝を成せ、そうすればおまえが盗んでも、騙しても、嘘をついても、姦淫しても問題は無い。豚を食すな、許された肉を食せ、そうして望むままに罪を犯すが良い。一方ではムスリム達のこのイスラームへの誤解の程度によって、また他方では宗教の支柱と基礎的事項の喪失を伴った彼らの枝葉末節への集中の程度によって、西洋を前としたイスラームの印象は歪められるのである。ムスリム達の彼らのイスラームへの無知によってどれほどの不正を、またイスラームの子弟達の手によるイスラームによってどれほどの不幸をイスラームが被ったことだろうか？

これらの同胞達は礼拝指導者に対し、彼らの地域言語あるいは彼らの理解できる何らかの外国語ではなく、アラビア語で説教を行うことを条件付ける。通常、この説教は、若干のクルアーンの節やハディースを越えないであろうし、説教師は彼が全ての説教に於いて彼らを前にして繰り返すことが通例になっている若干の伝承された文言や箴言を付け加えるかもしれないし、全く付け加えないかもしれない。そうして、人々は入ったときと全く同じように金曜集合礼拝から出てくるのである。新しいことも、理解も、教訓も、益も、訓戒も、諸規定の解明も、時の話題への取り組みもない。この様にして我々は、特に金曜集合礼拝の説教の精神を殺し、その言語的体躯のみが残るようになるのである。

まさに我々は、この重要な毎週の声明から意味を引き剥がし、口先だけの単に機械的な儀式へと変化させているが、これはムスリム達の多くが敬神行為と生活とを分離し、敬神行為からその実践的意味を引き剥がしているのと全く同様である。まさに彼らは、盗みながらにして礼拝し、嘘をつきながらにして斎戒し、欺瞞、不正、中傷、彼らにとって実施することが習慣化しているアッラーの聖法の侵犯、罪、そして間違いの全てを犯し実施しながらにして大巡礼を行う。彼らの宗教と現世との間のこの驚くべき精神分裂病を聖別するために。

彼らの一名が、文盲にも拘わらず、許された肉の条件を遵守し尊重しなければならないと君に対して講演するのを見出すのだ。例え、許された肉の条件に関する別のより正しい君の理解があったとしても。彼はそうしながらにして、食わせ者、詐欺師、如何様師、大嘘つき、泥棒、厄介者、偽証者、法律の抜け道を探す者、もしかしたら麻薬常習者であるかもしれないことをあばら骨の間に隠している、あるいは気にせずに表に出しているかもしれない。そうして彼は、彼こそが真のムスリムであると固執するのである。そしてこれは、彼の理解した許された肉の条件 ―正しかろうか、間違っていようが― が明らかとならなかった際に宗教やイスラームについて君に教えようとしなかった場合に於いてである[77]。

これが、ムスリム達の広範な層が立ち至った事態である。礼拝せよ、それから思うままに成せ。おまえの説教において何でも良いので言え、大切なのはアラビア語で行われることだ。人生に於いてそして人々との遣り取りに於いて欲するままに成せ、重要なのは、許された肉に

[77] 無学者なりに許された肉とはなんぞやとの講義を開陳する能力すらない場合には、宗教やイスラームについて教えようとする。肉について教えようとするのは、比較的ましであるということ。

関する不十分で地域的な理解に基づき、許された肉以外を食さないことだ。

イスラーム社会の生活、成長及び発展において金曜集合礼拝の説教が果たす基本的役割について多くの者が無知であり、金曜集合礼拝とその説教は実施することが必須である宗教儀礼的義務に過ぎないものとして彼らを通り過ぎる。おお、彼らは既にそれを行い、その義務を解消したのだ。決まった刻限に礼拝に着き、説教師に耳を傾け、彼の後に真っ直ぐな列によって並び、礼拝を行い、アッサラーム・アライクム・ワラフマトゥッラー、アッサラーム・アライクム・ワラフマトゥッラー[78]…。

この様な状態を前にして、自問することには意義がある。果たして、金曜集合礼拝の説教師への傾聴、説教中に口を閉じ静粛で居続けることが推奨されるのは、礼拝指導者への敬意、尊重、礼儀としてのみであって、それ以上ではないのか？　これによって、金曜集合礼拝の説教は単なる宗教的動作儀礼及び物理的訓練であって、その内容にも、その内容の意味にも重要性は存在しないのか？

礼拝は崇拝行為であり、説教は行動計画である。それは、金曜集合礼拝から分離することの出来ない有機的な一部分であり、一部のハディースは説教を逃した者を、金曜集合礼拝を逃した者の地位に置いている。

- ❑　金曜日に天使達はモスクの扉の上にあり、人々が来た順番に記録する。某はこれこれの時間に来た、某はこれこ

[78] アッサラーム・アライクム・ワラフマトゥッラーは礼拝の終わりに唱える定型句。

れの時間に来た、某は礼拝指導者が説教をしている時に来た、説教に間に合わなかった場合には、某がやってきて礼拝には間に合ったが金曜集合礼拝には間に合わなかった、と。*［アブー・フライラ経由、アフマド所収］*

これによって、礼拝指導者は礼拝者達の大多数の基準や彼らの文化的水準、彼らの環境及び関心の性質に応じて、説教を詳述しなければならないのである。もし、彼らの大多数が彼の投げかけたものを伴って出て行くことを彼が望むのであれば。大多数が労働者である者達を前にした説教は、大多数が文化人である者達を前にしたそれとは違うべきであり、学校の生徒達を前にしたものはまた違い、大学の学生及び教師達を前にしたものはまた違い、イスラーム新規入信者達を前にしたものはまた違い、とこの様に続く…。

彼（S）[79]は、今日の我々の礼拝指導者達の多くが行うように、ある機会と別の機会における説教に於いて同じクルアーンの節を繰り返すことはなかった。彼らの説教は若干の繰り返されるクルアーンの節及びハディースを越えることはなく、彼らはそれを我々の前で、時間的及び空間的に現実に於いて生じている事柄と結びつける努力も無しに、オウムのように繰り返すのである。我々がクルアーンの節、全く同じ節をある機会と別の機会に於いて人々の耳に繰り返す際、我々はクルアーンの節の正統な地位に対して罪を犯しているのである。というのも、これは礼拝者達の精神に否定的に反映され、これらの節やハディースに対する彼らの愛情が嫌悪、拒絶へと変化するのである。いや、ことによるとクルアーンの節全てに対してこれが反映されるかもしれない。

[79] 預言者ムハンマド。

説教の言語が、その内容を前にして、前面にではなく後方にある事柄となるのは何時であろうか？　イスラームの基礎的な教えと永遠の倫理性にとって、許された肉が基礎的ではなく従属的な事柄となるのは何時であろうか？　我々の生活が、我々の敬神行為及び宗教儀礼の実施の体現、適用、認証となるのは何時であろうか？

もし、我々の高貴な預言者（S）が強調したように、至高者が各世紀の冒頭にムスリム達のために彼らの宗教を新たにする者を遣わし給うのであれば、まことに金曜集合礼拝の説教師の役目は、彼らのために毎金曜集合礼拝の冒頭に宗教規定の詳細と彼らの直面する諸問題や出来事のための週毎の言葉を新たにすることである。彼らが、生活の速度と歩調を合わし、それとの連携を保ち、その創成と発展に寄与するために。

もし、全ての組織に、それがその労働者達に対して行う必修の発展訓練プログラムがあるのだとしたら、金曜集合礼拝の説教はムスリムの生活にとっての必修の発展、指導、訓練プログラムであり、そしてイスラーム組織と生活組織とを繋ぐ教育的、訓練的、啓蒙的、知識的、実践的、公的な各週の連繋なのである。

ここから我等は始める

かつてモスクで一緒に礼拝していた兄弟[80]を探したところ、ここで礼拝している別のムスリムと係争状態にあるために別のモスクでの礼拝を選好してもはや我々とは一緒に礼拝しないのだ、と告げられた。それから、長い間見なかった別の兄弟と会ったので、私たちのモスクで君を見かけなくなったのは何故か？、と尋ねた。答えて曰く、私は説教師が説教壇に登り人間は卑しい精一滴から創られたと述べるようなモスクでは礼拝しない、如何にして精一滴を卑しいものとするような蛮勇をふるったのだろうか？、と。それから、私がモスクに向かっているときにムスリムの友人と偶然会い、道ながら話をしたが、モスクに着いた途端、去りながら私に別れを告げたのである。そこで私は驚いて、一緒に礼拝しないのか？、と尋ねた。頭を左右に振りながら答えて曰く、私はサラフィー主義者達が礼拝しているモスクでは礼拝しないのだ、と。

私は自問した。想像せよ。イスラーム共同体がかつてこれら3種の人々に分配されていたとしたら、つまり3分の1は係争者の礼拝するモスクでは礼拝せず、また3分の1は説教師ないし礼拝指導者の人為的間違い ―仮にそれが間違いであったとして― を許さず、また3分の1は見解や学的努力の成果において相違している別の礼拝者と一つのモスクで一緒になることを望まないとしたら、この様な共同体が、自分たち自身を統治する事に加えて、何時の日か世界を統治する用意があると諸君は考えるだろうか？

我々はモスクの倫理に、そこにおける集合礼拝の条件と倫理に、そして後にも先にも人間文明が経験したことのない記録的な時間内

[80] 信仰上の同胞を指す。

で大地の全面に対してイスラーム、イスラーム文明、イスラーム倫理を広めるためにイスラーム軍の軍団を輩出したその歴史的役割に、何をしてしまったのだろうか？

2012年4月、私は「現代宣教者アカデミー」組織が「若者世代との連絡、そして中庸で穏当なイスラームの使信の伝達のための、高貴なアズハルの学問的及び行動的優等生の男性卒業生及び女性卒業生の模範例の卓越」を目的としてカイロで行ったコースに参加するよう求められた。

20年近くに亘る「英国大学及び高等学院認定評議会 The British Accreditation Council (BAC)」の査察官としての経験を通じて、また同評議会の業務拡大と昨今の英国以外の大学及び学院を含む領域伸張、またそれの意味する英国の文明水準及び経験知のそれらの大学への移転実績を有していることから、私は同組織[81]に対して私が「国際イスラーム認定評議会」と命名したものを設立するよう勧告した。この新評議会の条件に適合する諸文明センターをエジプトを皮切りとしてアラブ及びイスラーム諸国に設置する事を目的とし、これらセンターが大学や教育機関のみに限らず、全ての大なり小なりの国家機関、会社、政府機構及び部門、小さな道路及び街区、居住建造物、病院、医院、学校、学院、クラブ、百貨店[82]、モスク、協会、公園、児童公園、公衆水洗便所、建築作業所などを担当し、「現代宣教者アカデミー」に参加している50名の学生がエジプトの各県に配置されてこの発想の核となり、小さな地域

[81]「現代宣教者アカデミー」組織。

[82] makhāzin は stores の同義語として使われており、英国では store が百貨店を指す（『プログレッシブ英和中辞典』第 3 版、小学館）。

的諸機構が中央集権的に前述の認定評議会に結びつけられる。そして、それ[83]がその[84]条件や原則を適用し、これら地域的諸機構がその地域における諸組織に対し文明的及び宗教的競争精神を発信し、競争によって最終的にはこれら諸組織が評議会の認定を得ようと急ぎ、このようにして継続的な競争行為の連鎖の中で、評議会への認定を申請しなかった諸組織はこれを通じて周りから取り残されたと感じるのである。

また、これらセンターやサイトはその影響がエジプトの大地における生活の諸側面に移行することによって、月や年を追う毎に増加する。そして、10年ないし20年以内に、エジプトはこのプログラムを通じて完璧性、秩序性、規律性、衛生、外見の良さ、生産性、労働現場における安全性、教育水準、初等教育水準、対人関係水準の向上の点で、欧州諸国と同列になるであろう。そして、当然ながらこれによってそれ[85]は失われている宗教的価値観を取り戻すであろう。そして、両者[86]双方が相手方を確立するのである。

勿論のこと、1月25日革命[87]後の悲しむべき連続的な出来事のせいで、この考えは今もってその場を紙上から現実へと移動するには至っていない。そしてこのことによって、我々は段階的に別の方向で考えるようになったのである。なぜ、この様な大きな運動を、イスラーム国家構造における小さな文明的ユニットとして開始しないのか、全て

[83] 地域的諸機構。

[84] 新評議会

[85] エジプト。

[86] かかるプログラムと宗教的価値観。

[87] 2011 年、ムバーラク大統領退陣へと至った革命を指す。

の道、全ての街区、全ての村にあるモスク ―何処でも良いので存在する限りのモスク― の集団として？

全てのモスクは、その礼拝指導者とその老若の指導者達の柱を筆頭に、その基礎的な役割に加えて、条件としては「集合礼拝」に関する議論において提示した10の文明的基礎に端を発する、その領域内における諸機関に対する地域的認定評議会へと変化することが可能である。

「英国認定評議会」 ―もし仮に大学というそれの限定的対象を我々が超越し、それが国家における如何なる作用細胞をも包摂するとしたら― が認定対象機関に対して求めるものは、つぎの基礎的条件に要約される。

建造物の外観および内観。
保健及び衛生条件、労働者及び組織のサービスの受益者のための安全条件。
組織の提供するサービスの品質に対する建造物、事務所、部屋の有効性及び適合性の程度。
労働者及び受益者の双方に対する必要な保険の充実。
組織運営及びその目的の達成における管理の成功具合。
労働者の適任性、彼らの有する証書の品質、及び文書化を伴った適切な経験の程度。
労働者に対する訓練コースの制度化の常習化。
公正かつ平等な賃金制度と、全ての労働者に対する正式な契約の存在。

労働者の個人的創見及び能力開発に対する奨励及び報奨制度の存在。
労働者及び受益者のファイル及び記録に関する新型で正確な制度の存在。

組織の制度、政策、計画、全労働者の所掌業務を明確に文書化したものとして保持していること。
組織から発出される告示及び刊行物の信頼性。
組織が一般に対して提供する証書、経験知及びサービスの信頼性。
他者と対応する言葉遣い[88]、文章及び口頭による語りかけの言葉遣いの大部分が文明的であること。
管理部門の労働者及び受益者との連絡及び彼らの見解を混ぜ入れること、彼らの要求への応答具合。
労働者及び受益者、特に養護を必要とする者に対して組織が供与する便宜。
彼らの間での平等、及び、人種／部族／党派／学派による差別の不在。
組織の事業及びサービスの年次評価における外部判定者の参画。
季節／年／段階の終わり毎の実施成果の評価。

これらが、英国認定評議会の監査人があらゆる組織を訪問する際に鞄の中に入れて持つファイルの要約である。これは、我々が提言した文明にとっての10の原則から基本的に離れるものではなく、また集合礼拝が確立しそれへと呼び招いているものであり、集合礼拝

[88] 身内に対する横着な言葉遣いではなく、発話対象者が部外者であることを意識した丁重な言葉遣い。

から発生した運動がそれを我が子のように受け入れ、文明の原因の中で我々が捨て去ったものを取り戻すことが可能なのである。

この運動はあちらのモスク、こちらのモスクで始まるかもしれない。全て[89]が、10の原則に依拠して、その認定を得るために全ての組織において満たされるべきであると見なした規則を、自らに対して設定する。それから、これらの数少ないモスクの機構が、次の段階に於いて、統一的条件及び規則を結晶化させる統一評議会を設立するために会合し、それからこの規則が発展し拡大し、国家規模での「祖国認証評議会」の基礎法となるのである。

モスクがこの様な段階に到達する為には、集合礼拝の真の機能について意識的であり社会の更生と人生における礼拝の一般的役割について熟知している礼拝者の「集団」形成のための、礼拝指導者 ―場合によっては地域の他モスクの礼拝指導者達が参画するかもしれない― による入念な計画が先に立つ必要がある。そして、この第一設立集団が地域の他の諸モスクを包摂するより大きな集団の核となるかもしれず、より大きく広範な「最高認定評議会」に至るまで斯くの如しである。

そしてエジプトから、あるいは別の如何なるイスラーム諸国からであれ、この運動が開始され、このプロジェクトはイスラーム世界の全地域へと飛び立ってゆくのである。

この様な評議会の目的として、もし上手く計画された場合には、十年単位での短い期間においてイスラーム世界が第一等の文明的

[89] 全モスクが。

立場を回復すること、また、アラブ世界およびイスラーム世界の二つにおいて健全な文明的宗教的思考の精神を発信することが存在する。イスラーム教（al-Dīn al-Islāmī）」の学問的側面の再生と、礼拝を筆頭とした公的生活と敬神行為との連繋と、世界を前にしたイスラームの真の文明的側面を再び顕在化させることを通じて。

これは壮大な行為である、しかしながら、千里の道も一歩から、もし我々が本件を十分に真面目に捉えたならば、今に至るまで何世代もの諸政府や思想家達が達成できなかった事をこの評議会によって我々が実現することが可能なのである。

礼拝の5本線

- ❑ 信仰する者たちよ、おまえたちが酔っている時には、言っていることがわかるようになるまで礼拝に近づいてはならない。*［クルアーン4 章43 節］*

我々はこの節の外面を幾度読誦し繰り返したことであろうか。そうして、その単語の背後にある教訓を読まなかったのである。

もし諸君が側に誰もいないのに両手と頭を動かしながら喋っている男を道で見かけたら、諸君は彼に対して、きっと彼は頭に携帯電話の延長線を設置しそれによって誰かと話しているのだろうと考え、そうしてその男性を精査し、凝視し、その口に音声伝達装置もなければ耳に受音装置もなければ手あるいは懐中に携帯もなければ、諸君の前には彼が狂人であるか痴呆であるか酩酊していると述べる以外の選択肢はない。果たして私は話を誇張しているだろうか？

そしてこれがまさに礼拝者達の多くの状況なのである、ただし、二つの状況の間には重要な違いがある。彼らを眺めると、彼らの側には彼らの語りかける対象者はおらず、彼らの誰の手にも話している携帯はなく、それにも拘わらず、いやそれよりもさらに不可解なのは、彼らが誰かに語りかけているとは決して想起させないような仕方で喋っている、あるいは聖なる節の表現によれば彼らは言っていることがわからない状態なのである。

君が話をする際に君がその話で何かを言わんとしていることが顔や外観によって顕れること及び君が話しかけている対象者が存在することと、君が誰かと話しているあるいは何かを言わんとしていることが君の上に顕れることなく、口や舌を動かすこととの間には、重要な違いが存在する。そして後者の状態は、大変危険で驚くべき病態なのである。

彼らの話とは、元来は意味があったにもかかわらず、彼らの外見、表情及び口からの言葉の出方を通じて、もはや今となっては如何なる意味をも有しているようには見受けられない、単語の素早い暗唱である。というのも、彼らの話の仕方、表情への反映、話の声調の変遷やその[90]意味の彩りに伴ってそれ[91]が彩られるといった、我々が他者と対面であるいは電話で行うあらゆる話に見られる方法で、それ[92]が顕在化しないからである。

---

[90] 話。

[91] 声調。

[92] 意味。

試しに今、電話を手に取り、友達に連絡し、妻かあるいは家族の誰か一人に、この通話中に何回君の表情、声の調子、話し方が変化したか？を記録するように依頼せよ。

我々の表情、言葉の調子、音声の抑揚、あるいは場合によっては手の動き、体の姿勢は、通常の通話に於いて話の流れに沿って何十回も変遷し色調を変えるのである。話の受け取り、返事、依頼、喫緊の依頼、希望、失望、抗議、驚き、受容、拒否、非難、用心、願望、嘆願、称賛、評価、質問、回答、感心、心配、恐怖、強欲、判定、強調、否定、例外、停止、継続、訂正、当惑の間で…？[93] もし我等がこの様でないとしたら、我々は機械人間以上の存在ではないのである。

諸君が礼拝している際に、諸君が「ロボット」や酩酊者や狂人ではないことを、そして丁度我等の誰かが友人や先生や上司に連絡しているように、礼拝中の「誰か」が本当に誰かと連絡しているかどうかを、そして諸君が自分自身と話すのでもなく「誰もいない」のを相手に話すのでもなく、通信線の反対側に生きた対象者があって、人々からロボット的であるないし痴呆であるないし狂気であると非難されない状態であることを、確認しようとしたことがあるか？

もし諸君が本当にそれを確実視しており、アッラーが通信線の反対側に於いて諸君と共に存在し給い、諸君が話しかければ聴き給い、諸君が想起すれば彼も諸君を想起し給い、諸君が願えば答え給うと信じているのであれば、諸君をご覧になる御方、諸君の話を聞き給

[93] 原文は平叙文であるにも関わらず疑問符が付いていたので、そのままとした。あるいは、「事態はこの様ではないだろうか？」といった表現が省略されている可能性もある。

う御方にとって何がそれを確証するのか？　否、至高なるアッラー御自身、諸君の音声の抑揚を聴き給う御方、諸君の心臓の動悸を知悉し給う御方、諸君の胸中を知り給う御方に対して、諸君が「誰もいない」のを相手に話すのではなく彼に話しているのに他ならないということを、如何にして確証するのか？

❑ 確かに信仰者達は成功した。彼らは己の礼拝において畏まる者たち。*[クルアーン 23 章 1-2 節]*

❑ それゆえ、災いあれ、礼拝する者たち（ではあるが）、己の礼拝から気が逸れた者たちに。*[クルアーン 107 章 4-5 節]*

アッラーに接続する如何なる一瞬にせよ、例え言葉を含まなかったとしても、全く接続が実現しないまま何頁も復唱するよりも良い。アッラーは我々の舌ではなく心をご覧になるのであって、言葉を用いずに心でアッラーに一瞬語りかけることは、心を用いずに言葉で彼に長時間語りかける事よりもより良くより偉大である。これは、我々が本当にアッラーに達すること、彼に接続することによって我々自身のプログラムを戻すこと、彼の光と恩寵によって我々の幸福へと続く道を洞察すること、そして彼が我等に真実として約束し給うたように我等の心の悪事と魂の過ちを礼拝の善行によって消し去ることを本当に望んだ場合に於いてである。

❑ そして昼の両端と夜の初めに礼拝を遵守せよ。まことに善事は悪事を追い払う。*[クルアーン 11 章 114 節]*

礼拝は体の運動　―例えそれが抜きがたくあるとしても―　ではなく、それを終えてそうして他の要件を終えるべく通り過ぎるために我々が確

保する単なる通常の時間 ―例え時間がそれを実施するために不可欠な容れ物であったとしても― ではなく、それは唇や舌の動きを伴う言葉 ―例えこれがその実施の一部だったにせよ― ではなく、僕の実施する礼拝は同時的、連繋的、相互補完的な5本の線の間に分配されるのである。もし我々がそれ[94]が威厳ありいと高くあるアッラーとの真の接続となることを望むのであれば、これらの一つたりとも独立したり他の線から分離したりしてはならない。これらの線が、礼拝の構成要件の中に言及されているのを見出すことは出来ないが、しかしながらそれはこれら構成要件の柱[95]なのであり、それなくしては礼拝は礼拝たり得ないのである。

1．時間の線。5分ないし6分を越えずにズフルあるいはアスルあるいはそれ以外の礼拝の義務を完遂したと納得するないし自らを納得させようとしないように。あなたが礼拝のために確保する時間は、礼拝ないしこの礼拝によるアッラーとの「接続」発生の確定ないし無確定に関する基礎的事項である。恐らくは、時間の線において最も重要な部分は、節と節の間、もしかすると言葉と言葉の間を分かつ沈黙の瞬間かもしれない。従って、あなたの舌の上で、どの言葉達も他の言葉よりも先に出ようと欲して押し合いへし合いすることのないようにせよ。言葉を味わい、転がすようにせよ、我等の誰かが口の中で蜜を転がし、その品質を確かめるように。礼拝における全ての表現、文章、いや単語に沈黙の空隙を与えよ。精神の中でそれを転がし、その意味を吸収し、その滋味を玩味し、それ[96]を通じてあなたがそれ[97]

---

[94] 礼拝。

[95] 柱を意味するruknは法学用語の訳語としては構成要件と訳されるため、構成要件の構成要件とも訳しうる。

[96] 沈黙の空隙。

[97] 礼拝。

から気を散らされなかったことをまたそこにある意味を了解し意を払ったことを確認する。礼拝の半分を沈黙とせよ、また半分を心のこもった静かな密かな会話とせよ、その言葉が出る唯一の源は心であり、それが向かう唯一の対象はアッラーである。

2．舌の線。我々はそれによって可能な範囲で使徒（S）が我等のために推奨した言葉を読み、全ての言葉と全ての意味に対して与えられるべき抑揚、調子、上昇、下降を与える。これら全ての要素[98]の間で必要な均衡、それなくしては謙りが実現しないような均衡が実現し、その[99]存在及びそれら諸要素の間の完全な調和無しには礼拝が存在しない様に。

3．身体の線。我々の外見、様態、表情が、舌により発声される意味の誠実な本当の翻訳となるのである。体、顔、両目が舌の上にある意味を、例えこの舌が動かなかったとしても、表現するという点で。発話能力を失ったものが如何に礼拝するかを見たことがあるか？
舌を補うべく、両目、顔、体における全表現能力を用いるのだ。彼の沈黙の礼拝から学べ。何よりもまず最初に、君の礼拝が発話能力のないものの礼拝となるようにせよ、それからその後にアッラーが君に与え給うた発声及び明瞭な発話能力によってそれ[100]を支援せよ。

4．心の線。我等の舌が動く際に共にあるもの[101]と共に我等の心臓は鼓動し、両者は相互認証するのであって、精神と思考が涸れ川

---

[98] 抑揚、調子、上昇、下降。

[99] 言葉に関係する諸要素。

[100] 礼拝。

[101] 言葉、発声。

にあり舌が別の涸れ川にある[102]ことはあってはならない。この二つの線の相互作用の結果が体の中で身震いとして、あるいは顔の青白さとして、あるいは音声の震えとして、あるいは両目頭に溢れる涙として具現化したならば、なんと素晴らしいことか。

５．実践の線。我々が礼拝をする際に、日々の生活が礼拝における心と舌の両線双方の実践的適用となるようにしようとの意図及び決意が我等の中に確立される。我々の行為が言葉を裏書きし、我々の生活が礼拝の中で復唱することの説明図となり、この礼拝が我々の日常的実践、他者及びアッラーとの我々の関係とは分離した形式的な単なる儀式ではないという具合に。我々が我等のウドゥーから2つのウドゥーを成したように、我等の礼拝から二つの礼拝—外面的なものと内面的なものの— を成そうではないか。聖クルアーン及び高貴なハディースに於いて礼拝が常に行為及び勧善懲悪の実施に結びつけられていたことを想い出そうではないか。

❑ 吾子よ、礼拝を遵守し、良識を命じ、悪行を禁じよ。*［クルアーン31 章17 節］*

❑ だが、彼らの後から礼拝を失い、欲望に従った後継者が後を継いだ。*［クルアーン19 章59 節］*

❑ 礼拝によって醜行、忌み事が禁じられなかった者は、それによってアッラーからの乖離以外が増すことはなかった。*［アブドゥッラー・ブン・アッバース経由、サッファーリーニー・アルニハンバリー『Sharḥ Kitāb al-Shihāb』所収］*

[102] Aが涸れ川にありBが別の涸れ川にあるとは、AとBが隔絶していることを示す表現。

体の四肢によって礼拝せよ、あたかも顔を有さないが如く。
顔の表情によって礼拝せよ、あたかも舌を有さないが如く。
舌の抑揚によって礼拝せよ、あたかも体を有さないが如く。
心臓の鼓動によって礼拝せよ、あたかもそれが最後の心拍であるかの如く。
礼拝を延ばせ、あたかもそれが最後の礼拝であるであるかの如く。

諸君は遠い国で行われる盛大な催し物に出席するよう招待が送られ、手元にある一番良い服を着て、遙かな旅の諸困難に襲われ、旅のために時間やお金で払ったものを払い、機会で失ったものを失った。彼方で、目的地に着いた際、招待券を示し、そうして入場が認められ、大広間の大勢の出席者達の間に席が用意され、催し物が始まるのを待ちながら座った。

まだ、幕が上がらないというのに、彼が椅子の上で寝てしまうまでに数分しか掛からなかった。突然、仕事を実施することが出来るようにその場を立ち去って欲しいと依頼する清掃人の声によって目覚めた。既に、出し物は始まり、そして完了し終了し、招待客達は解散して自分たちの家へと去り、その広間で寝ていた我等の友人以外には残っていなかった？！

これが、最上の神的招待によって礼拝を計画し、ウドゥーをおこない、モスクに行き、そこに到達する為に時間ともしかするとお金で払ったものを払い、モスクで長いもしくは短い時間を過ごしながらにして、これら全ての後にも拘わらず、その[103]霊的な光景を楽しむことなく、その崇高な意味と地位に反応せず、創造主との連繋を感じ取ろうとせ

[103] 礼拝の。

ず、獲得が期待されていた報奨を獲得することもなくして礼拝を終えようとする者の事態である！！

かつて使徒（S）はある2名のムスリムを義兄弟と成し、それからその1名が殺され[104]、一週間後にもう片方が彼を追った[105]。そこでムスリム達は、アッラーよ彼を赦し彼の同行者に追いつかせ給えと祈った。すると彼（S）[106]は、彼[107]の礼拝の後の彼[108]の礼拝、彼の行為の後の彼の行為は何処にあるというのか？両者の間には天と地の間ほどがある[109]、と言われた。*［ウバイド・ブン・ハーリド・スラミー経由、アブー・ダーウード所収、アルバーニーが真正と判定］*

アッラーよ…。一週間の礼拝が、行為する礼拝者を天と地の間に匹敵する階梯ほどに上昇させるのであれば、この想像を超える階梯に占める一回の礼拝の割合は如何なるものだろうか？！　高貴なハディースを再度精査せよ、「彼の礼拝の後の彼の礼拝は何処にあるのか？」という質問では満足とせず、直後にそれとは不可分の「彼の行為の後の彼の行為は？」と続けているのである。礼拝と行為との間には有機的な一体性が存在し、どちらか一方が他方から分離されてはいけないと、彼（S）が我々に対して念を押されているのである。

---

[104] *Mirqāt al-Mafātīḥ : sharḥ Mishkāt al-Maṣābīḥ* によれば、ジハードによる殉教が死因。

[105] 畳の上で死んだ。

[106] 預言者ムハンマド。

[107] 先に死んだ者。

[108] 後に死んだ者。

[109] 畳の上で死んだ者の方が来世での位階が上であるため、殉教者が彼に追いつくのがより適切である。

全ての礼拝の後に、君自身に問いかけよ。私の礼拝はどの程度の距離、私を上昇させただろうか？　諸天の上か？　月の上か？　雲の上か？　自宅の屋根の上か？　頭の上から手を広げ親指の先から小指までの長さか？　指二本分か？　指一本分か？　全く何も無しか？

全ての礼拝の後、君が数分前にモスクに入った人間とは別人であると確信しているのでなければモスクから出るな。

赤い鍵、番号1　アッラーフ・アクバル

「アッラーフ・アクバル」との表現にそもそも独自性、比類の無さ、我々を地上から離れて発進させる驚くべきカ　__後に詳述する__が存在するにもかかわらず、イフラーム[110]のタクビールにはかかる独自性を越えた独自性が存在する。真にそれは、「イフラームのための」タクビールであって、それはつまり、「禁じられた」時間的空間に入ることを意味している。大巡礼の始めに、巡礼者が「イフラーム」の段階に入るのと同様である。

もし彼らの一人が君に「その敵はより弱い」といって黙ったとしたら、君の考えはどうなるだろうか？　その続きは何だ？　なぜ文章を完成させないのだ？！　と独りごちるであろう。あるいは、きっと何かを思い出したので黙ったのかもしれない、あるいは、ある理由ないしそれ以外の理由によって[111]文章を変えたいと欲し訂正したのかもしれない、あるいは健康上の出来事が彼の発声能力に生じたせいで表現を完成させることが妨げられたのだ…と君自身に語りかけるかもしれない。こういった解釈が君に思い浮かぶであろう。なぜなら、実際のところ、君はあらゆる通常の文章と同様に、例えば次のような閉じた完成した表現で文章が来ると予期していたからだ。

その敵は我々を圧倒することよりも弱かった[112]、あるいは、その敵は我々を攻撃することよりも弱かった、あるいは、その敵は我々が考えていたよりも弱かった、あるいは、その敵は我々が直面した様々な敵の中で一番弱かった…といったものである。というのも、「より弱い　aḍ‘af」

---

[110] 礼拝開始。

[111] 何らかの理由によって。

[112] その敵は我々を圧倒するには力不足だった。

という言葉が何処であれ発せられたならば、我々が常に優越の名詞[113](これは全ての af‘al 型の名詞である)の後に付ける比較対象辞の「よりも min」が後続するからであり、これは最初の3例文に相当するのであるが、あるいは属格支配者[114]が後続するのであって、これは最後の例文「様々な敵の中で最も弱かった」に相当する。しかしながら、驚くべきイスラーム的表現「アッラーフ・アクバル」は、これら二つの何れからも免れており、その後に「よりも min」もなければ、「属格支配者」もないのである。

これは、立法者が我々のためにこの様に「開かれた」状態で放置し給うた表現であり、もし仮に慣れ親しんだ比較対象辞の「よりも min」ないし慣れ親しんだ属格支配者を伴ってもたらされたとしたら、その想像的発展を失い、一体何よりも偉大なのだろうか？…と我々に問いかけ、我々がそれは何であろうかと想像する可能性を推し量る如何なる創造的努力にも相応しくない「閉じた」表現に転じるのである。

「アッラーフ・アクバル」という表現はその後に続く多くの可能性に開かれたままにもたらされ、それはそれを口にする者の前に、それに続く何十、いや何百、いや何千もの可能性の中から ―当然ながら舌によってではなく脳内のみで― 復唱するための場を開く豊かな可能性なのである。

おお、悪魔よ、アッラーはおまえよりも偉大である…おお、不正者よ、おまえよりもである…おお、金銭よ、おまえよりもである…おお、懸念よ、

---

[113] アラビア語では形容詞と名詞の境界は明確ではなく、一般に理解される比較級を指す言葉。
[114] 「～の」に相当する表現で muḍāf ilayhi と呼ばれる。

おまえよりもである…おお、悲しみよ…おお、喜びよ…おお、アッラーとの話を逸らすことの出来るあらゆるものよ…。

それは単に「偉大である kabīr 」のではなく、「より偉大である akbar」のだ。その本当の理解及び意味の把握が我々アラブにとって不明瞭となっており、日常化と繰り返しの闇に隠れている限り、それが翻訳者達にとっても不明瞭であることは不思議ではなく、その結果彼らはそれ[115]を時には「偉大である kabīr 」つまり「great」として、また時には「至大 al-akbar」つまり「the greatest」として他の諸言語に訳し、本当に訳されるべき「greater」とはしないのである。そして、これらの歪んだ翻訳によって、それは開かれた属性を失い、他のあらゆる伝統的な閉じた表現と同様の一般的な表現に転化するのである。

アザーン朗唱者達の殆どまた礼拝のイカーマを唱える者達に耳を澄ますが良い。最初のタクビールの R を丸めるような形で二つのタクビールの朗唱を統合し、「アッラーフ・アクバルル……ラーフ・アクバル」と二つのタクビールが一つのタクビールであるかのように見えるのを見出すであろう。彼らはこの統合によって最初のタクビールの性格を失わせており、それを聞くものにとって、想像力で埋める必要がある仮想の点が後続する開かれた表現という、その真の姿は現れないのである。「アッラーフ・アクバル……」、この様に3つの三点リーダー[116]が後続する様な仕方では。

---

[115] akbar.

[116] 本書では原則的に原文の二点「..」を三点リーダーで表記しているが、ここでは原文に3つの点と記述されているため3つの三点リーダーと訳し、「アクバルル」に後続する2つの点を三点リーダー2つで示した。

かかる二つのタクビールの融合は、日常化によってこの表現の持つ特別な言語的性質に対する感覚を我々が喪失したという真実の体現に他ならない。そうして、我々はそれを他の諸表現と一線を画す開かれた要素の全くない通常の表現にしてしまった。そうであれば、例え翻訳者達がそれを「アッラーは偉大である」ないし「アッラーは至大である」と訳したとしても我々が非難する必要はない。

今、最初[117]のアザーンを聞くマディーナの住民達の間に自分たちがいると想像するよう努めるがよい。かかる表現、未完成の新しい言語的組合せに突如見舞われた際の彼らの感情はどうであったろうか。

「アッラーフ・アクバル……アッラーフ・アクバル……アッラーフ・アクバル……アッラーフ・アクバル……」、この様に「アクバル」が続々、また続と…。この新しい表現が、彼らの伝統的言語的記憶が想定する統語論的補完を聞く事への渇望に、水をもたらす[118]こと無しに。

あなたの礼拝が始まる際の「アッラーフ・アクバル」は、あなたと共に天へと高く昇る礼拝宇宙船にあなたが乗っていて、間もなく始動させようとしている赤色及び赤色以外の諸ボタンの集合内の第一赤ボタンである。

---

[117] 歴史上最初、の意。

[118] rawā は水をもたらす、灌漑するという意味と、述べる、伝える、伝承するという意味を併せ持つ。

読誦と朗唱の間

同胞の一人が私に尋ねた。何故、我等は礼拝における読誦について計画しないのか？。アッラーに我等が繋がり彼の前に謙ることを助けてくれるために、例えば「また離婚を宣告された女は独りで三回の月経を待つ」*[クルアーン2 章228 節]*などの礼拝中に読む諸節は何を我々に提供することが可能なのか？

至高なるアッラーの諸節の朗唱を彼と共に始める際には、あなたが人間の言葉を読誦するのではなくて神的な明文を復唱するのであるという真実を想起する必要がある。あなたは「それを読誦する taqra'-hā」のではなくて「それを朗唱する tatlū-hā」のであり、これは聖クルアーンの読誦のみを指す動詞である。

クルアーン以前には、アラブは「talā」という単語をこの新規なクルアーン的意味では知らなかった。かつてこの単語は彼らの元では「続いた tabi'a」という以上の意味を持たなかった。ある男が我々の場にやってきて、別の者が彼に続いた、というように。しかし、聖クルアーンはこの古い意味を手にして、それに読誦における「追随 ittibā'」という意味を成した。まず、クルアーンの言葉は諸世界の主から発出され、それから、天使ジブリールが「彼に追随した talā-hu」 __つまり、彼の後にやってきて、その復唱において彼に続いた__、それからアッラーの使徒（S）がジブリールに追随しその読誦において彼に続き、今日では、我等の誰かが至高なるアッラーの諸節を読誦する際には、我等はアッラーの使徒（S）に「追随し natlū」その読誦において彼に続くのに他ならない。そしてそれは、彼がジブリールに「追随した

talā」読誦であって、それはまたジブリールが彼の威力比類無き威厳に満ちた主に「追随した talā」ものである。

この点の重要性について理解しただろうか？　それは、我々と威厳に満ちたいと高くあるアッラーとの間に連綿とある「追随 tilāwah」ないし「連続 tatāl」ないし「連鎖 tasalsul」行為である。それによって、我々がクルアーンの諸節を朗唱する際、かかる聖なる複数の環—節の読誦者はその一つを体現する—　から成る連鎖を通じた我々と至高なる彼との間の暖かく親密な直接的連繋を感じるのである。こうして、この聖なる連鎖の中のいずこに君の位置する場所があるのかが克明に明らかとなったのであり、読誦する際にはそれを感じ取るようにせよ。

クルアーン読誦技術[119]の諸規則には、伝達の信託と完璧なまでの正確性を保つのに大きな役割がある。この聖なる連鎖において我々の前にいる者にその通りに「我々が追随する」ことを教えてくれる。そしてそれは、縮約、伸張、短縮、分割、接合、停止によって、その[120]連環に関する無欠の信託と完全なる正確性の訓練を我々にしてくれる。我々の朗唱が、ジブリールがその主から受け取りそれから彼が彼の主から受け取ったのと全く同じようにアッラーの使徒（S）に伝えそれからアッラーの使徒（S）がジブリールから受け取ったのと全く同じように我々に伝えた、朗唱の原本に対する謄本となるように。

---

[119] tajwīd.

[120] 朗唱。

いやむしろ、クルアーン読誦技術の諸規則は、我々が読誦に与える時間よりもより長い時間を朗唱に対して与えるべきことを我々に教えてくれる。そして、朗唱の方がより長いというかかる時間的差異は、至高なるアッラーの諸節とその御言葉の意味を吸収するためにより多く助けてくれる。従って、舌と唇の動きと、想像と思考の動きとを併置せずに急いで通り過ぎることはない。人々章[121]をクルアーン読誦技術なしに読み、それからクルアーン読誦技術によってもう一度朗々と朗唱し直すが良い。君の読誦よりも朗唱の方がより長い時間が掛かることが自ずから明らかとなるであろう。

君の礼拝に於いてアッラーの諸節を「読誦する」のではなく「朗唱する」ように可能な限り努めよ。君がそれを「朗唱」することによって、それに対する個人的責任を、より多くの謙譲、畏怖、敬意をそれ[122]に結びつける責任を、ジブリール ―彼に平安あれ― が伝えたとおりの至高なるアッラーの御言葉の「複写」、復唱、正確性に関する無欠の信託に対するより多くの熱意と共に、感じることとなろう。

---

[121] 第 114 章。

[122] 朗唱。

聖クルアーンが有する新しい言語

君の読誦が「朗唱」の段階に上昇するよう君を助けてくれることの一つに、君が読むのは我々人間の言葉に似た伝統的一般的アラビア語ではないのだという重要な心理を認識することがある。一番最初にムスリム達が彼らの預言者（S）の舌から聖クルアーンを聞いたときに、彼らが最も揺さぶられたのは、その言葉の美しさではなく、修辞法でもなく、言語的正しさでもなく、その意味でもなく、比喩表現でもなく、その正確さでもなく、その調子でもなくして、否むしろ、これら全ての特徴がお互いに隣り合って集合したことであり、さらにはより驚くべきより偉大な事実、彼らの言語的正しさ、自らの詩作及び文学への信頼、自信、威勢にも拘わらず彼らがそれまで自らの言語に関して知らなかった事実、つまりアッラーの使徒（S）御自身を含めて彼らの知っていた如何なるアラブ人の言葉とも違う、この言葉の持つ新規性と独自性であった。

啓示が下される前、彼らはこの啓典をもたらした男の言葉を知っていたが、それは彼らの言葉と多少なりとも異なってはいなかった。彼らがある朝目覚め、この男が彼の言葉とも彼らの言葉とも全く異なった言葉によって彼らよりも一歩抜きん出たことを見出したとき、それは驚くべき言語的衝撃であった。

それは言語上の品詞、単語、表現、塊、接続、関係、修辞上の形態及び特徴により、全てにおいて異なっていた。しかしながらそれと同時に、それがアラビア語に付加し組み込んだもの、慣例を豊饒としたもの、革新と発展のための限界なき地平を開いたことのこれら全てにも拘わらず、それはアラビア語の規則に立脚したその動かぬ基礎

に依拠した純然たるアラビア語であり、これがそのたじろぐべき驚くべき奇跡的側面である。

もし、ここでかかる言語的諸側面の一つ、例えば統語論上の品詞の新しい使い方に光を当てたとするならば、何十ものこれらの品詞がクルアーン以前には ―そしてクルアーン以後にも― アラビア語が知らなかった新たな意味を帯びていることが見出されるであろう。このようにして、「そしてアッラーはよく赦し給う慈悲深い御方であらせられた」[123]のように「～であった kāna」は「真に～である inna」の意味となり、「人間には、言及されるようなものでなかった時期が来た（経過した）か」[124]のように「～か hal」は「既に～ qad」の意味となり、「それゆえ星々の（沈む）場所にかけて誓わない」[125]のように「～ない lā」は「はい na'am」の意味となり[126]、「決して、まことに人間は無法に振る舞う」のように「決して～ない kallā」は「本当に ḥaqqan」の意味となり、「おそらく信仰を拒む者たちは、ムスリムであったならば、と望むであろう」[127]のように「おそらく rubbamā」は「確実に min al-mu'akkad」の意味となり、「そして誰も皆、われらの許に召し出された際」[128]のように「～の際 lammā」は「～以外に illā」の意味となり[129]、「啓典の民が、いかなるものに対しても力を持たないことを知らないように」のように

[123] クルアーン 4 章 96,100,152 節、25 章 70 節、33 章:5,50,59,73 節、48 章 14 節。
[124] クルアーン 76 章 1 節。
[125] クルアーン 56 章 75 節。
[126] 否定文が肯定文になるということ。lā は「いいえ」の意味でも用いられる。
[127] クルアーン 15 章 2 節。
[128] クルアーン 36 章 32 節。
[129] 「そして誰も皆、われらの許に召し出されずにはいない」、となる。冒頭の in が否定詞で、英語の「No～except…」に近い。

「〜しないように li-allā」が「〜するように li-kai」の意味となり、斯くの如しである…。

一方ではアラビア語の基礎法則、それへの依拠、それを発展させつつも正常な状態に保っていることと、他方では普通ではないかかる濃度で卓越性、斬新性、独自性のある言語的及び統語論的慣習から脱却することとのこの驚くべき統合の中には、我々が礼拝に於いて至高者の御言葉を復唱する際に震え身震いし謙るのに十分な奇蹟が存在する。またそこには、至高なるアッラーの全ての章が、堅牢性と破壊不可能性を示唆するこの新規で独自の呼称を帯びるのに相応しい十分な理由も存在する。至高者が「その周りに壁立し給うた sawwara-hu」模倣や改竄に抗うもろもろの壁（aswār）によって。それ故、それ[130]はあたかも堅牢な城壁によって守られた要塞であるかの如くにしてもたらされた。それが「クルアーンの章 sūrah」である[131]。それ故に、この要塞が含む全ての文及び節が、アラブがこの意味では知らなかったような新しい名前を帯びることに相応しかったのである。それが「節 āyah」である。これは、復活の日に至るまで改竄、模倣、破壊からの免除性及び不可能性[132]を確認する独自の卓越した名称である。*［詳細については拙著 al-Mu ʻjizah, vol.1, Washington : International Institute of Islamic Thought, 2012 を参照］*

---

[130] クルアーン。

[131] 壁は sūr（複：aswār）、クルアーンの章は sūrah（複：suwar）である。

[132] 不可能性は、奇蹟性とも訳される。

開かれた言語と緑地

聞くのにあるいは復唱するのに慣れてしまった言葉や表現が我々の生活の中で耳に達したり立ち現れたりすることは多く、他の通常の表現や言葉がそうであるのと同様に、我々は対して注意も払わずに通り過ぎるのであるが、しかしながらもし若干の熟慮を払い、習慣や日常化の影響を記憶から取り除けば、その真実に於いてはこの様ではないのである。この、高貴なハディースの許で今少し立ち止まってみよう。

> ❑ 彼（S）は屈礼及び跪拝において、subbūḥ な御方、聖なる御方（quddūs）、諸天使及び霊魂の主、と述べられました。*［アーイシャ経由、ムスリム所収］*

「subbūḥ」という言葉は、「subḥān」という言葉がそうであるのと同様に、イスラーム以前にはアラブが知らなかった新奇なイスラーム的言葉であって、両者ともに開かれた表現、つまり私が「緑地」と呼ぶことが出来るようなものがそれに後続するのであって、「アッラーフ・アクバル」という表現がそうであったのと同様に、我々の想像力の前にドアを開けたままにしておき、その後ろにある空隙を想像力が超越[133]の意味の中から望んだ内容によって埋めるのである。

「subḥān」という言葉は「fu ʻlān」形の一般的ではない動名詞であり、「subbūḥ」という言葉がそうであるのと同様に、我々が話題にしている対象者を「高めること」、そのものから何らかの属性を「隔絶させること」を意味し、我々が「讃えあれ我が主こそ超越者 subḥāna

[133] tanzīh。隔絶、神人非同形［同性］論。

rabbī」と述べたことによってあたかも「私は我が主を隔絶させる unazzih rabbī」と述べたのである。しかし、私は彼を何から、どんな属性から隔絶させたのか？　これが、屈礼及び跪拝の両タスビーフの何れに於いても言及されなかったことであり、両者はこの様に開かれたままに放置されたのである。両表現は両者ともに、「アッラーフ・アクバル」という表現がそうであったのと同様に、言語的に未完成な、数多くの選択肢で埋めることが出来るような仮想空間が後続する状態でもたらされたのである。もしそうでなければ、両者は完成されたつまり閉鎖された諸形態の一つを取っていたであろう。例えば、讃えあれ至高なる／偉大なる我が主こそ…欠如からの超越者、讃えあれ至高なる／偉大なる我が主こそ…欠陥、疲労、不正、過誤、脆弱性、睡眠、疾病…等々からの超越者といった。

この様な言語的に未完成の、従って言語的な緑地及び数多くの可能性に開かれた表現が、我々の想像しない程の数で、礼拝の中に群れ集まっている。これよりもさらに奇妙なのは、これらの表現が、言語的に完成された他の表現や言葉　―しかしながらそれにも拘わらず他の様々な理由によって開かれているのである―　と隣り合って存在していることである。一番最後の種類の表現や言葉は開端章およびそれ以外の聖クルアーンの諸章、そして挨拶及びイブラーヒームの祈願　―後ほど詳しく述べるように―　に数多く存在するのである。

実際のところ、我々は恒常的に礼拝の2ラクア毎に33を下ることはない言語的に未完成の表現を復唱するのである。これはつまり、我々の想像力が仮定によって埋めることが出来る33の緑地が与えられていることを意味し、その意味を理解し頭の中に取り込むための

十分な時間を与えてくれるのである。この数値は、開端章も、挨拶も、イブラーヒームの祈願も、我々が読む他の諸節も、祈願も、念唱も含まないのである。2ラクアにおけるそれらの恒常的表現の詳細は次のとおりである。

11の「アッラーフ・アクバル」（これこれよりも偉大である） ＋ 2の「アッラーは彼を称賛する者を聞き届け給う」（これこれについて称賛した） ＋ 2の「我らが主よ、称賛はあなたに属します」（これこれについての称賛」 ＋ 6（2ラクア×3）の「讃えあれ偉大なる我が主こそ超越者」（これこれからの、あるいはこれこれのために） ＋ 12（4跪拝×3）の「讃えあれ至高なる我が主こそ超越者」（これこれからの、あるいはこれこれのために）。

開かれたないし言語的に未完成の表現のかかる濃度は、多様性要因を豊富にし、それから、可能な限り多くの謙譲を保持し、我々が口に出すことを理解し、天との連繋を実現するための礼拝に於ける想像ないし空想要素の重要性を指摘している。

しかしながらここで、「言語的に完成された開かれた表現」と「言語的に未完成な開かれた表現」を区別することが重要である。言語的に未完成の表現全ては同時に開かれた表現であるが、逆は真ではないのである。

例えば「讃えあれ我が主こそ超越者」ないし「アッラーは彼を称賛する者を聞き届け給う」ないし「我らが主よ、称賛はあなたに属します」といった表現は言語的に未完成であり、それ故、その後に続く水平に広がる緑地への候補者である。なぜならばそれは、その後の空隙を

埋める数多くの追加的言語的選択肢に開かれているからである。他方、私たちがこれから見出すこととなる開端章にある開かれた表現及び言葉は、言語的及び統語論的に完成されており、それ故、その後にそれを完成させるための如何なる水平に広がる附言も必要とはしないが、しかしながらそれには複数の解釈の余地があり、したがってそれはかかる解釈の可能性によって、言語的に完成されているにも拘わらず、深潭への垂直方向の附言によって、同様に開かれた表現であるのだ。この理解に従えば、開かれた表現や言葉は、それぞれの色、味及び意味を持った階層が相互に積み重なった複層階を有する建築物に相当する。

開端章と読誦の役割

この偉大なる章がクルアーンの開端であるのみならず、礼拝の開端でもあるという真実の許で君は一度でも立ち止まったことがあるか？　いや、のみならず、聖ハディース[134]が名付けたように、それは礼拝それ自体である。

> ❑ アッラーはかく述べ給う。我は礼拝　__つまり開端章__を我と我が僕の間で二つに分割した。それで、半分が我のもの、もう半分が我が僕のもの、そして我が僕には彼が請願したものがある。僕が「称賛はアッラーに帰す、諸世界の主に」と言えば、彼[135]は「我が僕が我を称賛した」と述べ給う。彼が「慈悲あまねく慈悲深き御方」と言えば、彼は「我が僕が我を褒め称えた」と述べ給う。彼が「裁きの日の主宰者に」といえば、彼は「我が僕が我を賛美した」と述べ給う。そして彼が「あなたにこそわれらは仕え、あなたにこそ助けを求める」と言えば、彼は「これは我と我が僕の間にある[136]、そして我が僕には彼が請願したものがある」と述べ給う。そして、彼が「われらを真っすぐな道に導き給え、あなたが恩寵を垂れ給うた者たち、（つまり）御怒りを被らず、迷ってもいない者たちの道に」と言えば、彼は「これは我が僕のものである、そして我が僕には彼が請願したものがある」と述べ給う。*［アブー・フライラ経由、ムスリム所収］*

---

[134] ḥadīth qudsī はアッラーはかく述べ給うた、という内容のハディース。クルアーンとは区別される。

[135] アッラー。

[136] 両者間で分割される、の意。前半の僕が謙っている部分は称賛に相当するためアッラーに属し、後半の請願内容は僕に属する。

この章が、崇拝者と被崇拝者という当事者間の、乙は甲に対し、継続的な称賛と感謝「称賛はアッラーに帰す」につき、また、彼の主性「諸世界の主」を、今現在君の上に下っている慈悲「慈悲あまねき御方」を、原初から永劫まで続く「慈悲深き御方」を、復活の日に諸世界に対する無限定の主宰者性及び審判者性「裁きの日の主宰者」を、僕性また帰服また神の唯一性を、「あなたにこそわれらは仕え」を認めることにつき確約すること、これに対して、甲が乙に対し、現世及び宗教事項に関して援助し「あなたにこそ助けを求める」、現世に於いて彼が嘉し恩寵を垂れ給うた者が導かれる「真っすぐな道」へと導き、「御怒りを被った者達」の道また同様に敬神行為および神の唯一性から「迷っている者達」の道から退けることが明記されている聖なる契約に相当すると君は考えたことがあるか？

開端章を読んでいる際に、それが私たちの言葉のような言葉ではなく、我々が語る我々のアラビア語のようなあるいは我々に到達しているハディースのなかで最も偉大な使徒　―彼に祝福と平安あれ―がかつて話していたもののような通常の言語ではないことについて君は考えたことがあるか？

29語である開端章の中に、クルアーンが下される以前にはアラビア語では知られていなかった、また我々の知る高貴なハディース内における使徒（S）の言語　―但し、ハディース中におけるクルアーンの節ないし節の一部の明確な引用ないし解釈を除き―　でも知られていない、少なくとも58の新たな言語用法があると君に告げたらどうだろうか。*［詳細については拙著 al-Mu ‘jizah, vol.2, Washington : International Institute of Islamic Thought, 2015 を参照］*

アラビア語に於ける「fa‘īl」形は通常、継続的ないし少なくとも安定的属性を示す。従って、吝嗇家（bakhīl）は常にあるいは安定した期間吝嗇であり、鷹揚、愚か、忍耐強い、長い、短い、大きい、小さい、美しい、醜い、幅広い、高いも同様である。他方、餓えている（jau‘ān）、渇いている、怒っているなどの「fa‘lān」形は「現在」の一過的ないし一時的属性であって通常短期間で解消されるため、餓えた者が餓えた者として生まれたわけではなく、怒っている者の怒りは長くは続かないであろうし、渇いている者、惑っている者、目覚めている者、眠い者、酔っている者、寒さを感じている者も同様であって、それは動きや活動を形容する属性であって、丁度今、我々がそれを口にするこの瞬間に生じているからである。

果たしてこの事実の中に、「慈悲あまねき（al-raḥmān）」という言葉の中に現在と遣り取りするような生命活動性、及び「丁度今」我々の上に慈悲が下されていることを示唆するような刺激的で動因的な放射線を示すものが、あるのだろうか？

そうであれば、「慈悲あまねき（al-raḥmān）」とは丁度今、そして「慈悲深き（al-raḥīm）」は原初から永劫まで常に、君の上に慈悲を実施する御方である。二つの意味は完全に区別されており、前者「慈悲あまねき（raḥmān）」は真ん中にある長音アリフ（ā）を我等が口を垂直に大きく開けて発音する際に、垂直次元を想起させるのである。それ[137]はつまり、天から地へ「丁度今」現時点で慈悲が下されることであり、従って、それは新鮮で活動的で生きた言葉、それによって慈悲がちょうど今生きが良く、この瞬間に我々に向かって動いており、

[137] 垂直次元。

我々の上に下されているのだと感じるような言葉なのである。また、後者「慈悲深き（raḥīm）」は真ん中にある長音ヤー（ī）を我々が発音する際に口を水平に大きく開けて発音する事によって、その水平次元、つまりアッラーの慈悲が原初から永劫まで延伸し継続していることを想起させるのである。

礼拝に於いて開端章を朗唱する際、これら全てを想い出すように努めよ。そして、その意味をより多く取り込み、その言葉の精神をより多く吸収するために、君、まさに君がこれらの言葉を編み出した者であり、それが君、君の思考と理性から湧き出、君がまさに君の表現で編み出したのだと、それが言葉[138]が相似することのない模倣不可能なアッラーの言葉であることを忘れることなしに、想像するよう努めよ。そうすれば、それが君の内側から溢れ出て、君の心臓がそれによって鼓動し、君が意図している言葉を君が発音しているのに他ならず、君が本当に心から信じている言葉を君が朗唱しているのに他ならない、との感情が始まるであろう。単に君以外の者が言った言葉を、その言葉に打ち震えることなくその内容を理解することなしに君の舌が復唱するのではなくして。

もし君がこの試験に合格すれば、道程の端緒を掴んだことになり、開端章の全ての言葉の価値、全ての表現の偉大さ、これらの言葉や表現が持つ意味の凄さ、活動性、特性、独自性といった特徴を感じることが出来るようになるであろう。

この章には、クルアーンの他の章にはない、特別な重要性が存在することを常に思い起こせ。君の礼拝に於いて、望みどおりに章や

[138] 人間の一般的な言葉。

節を読誦することが出来るものの、開端章は不可欠である。仮に、君の礼拝に於いてクルアーン全てを読んだものの、開端章を読まなかったのであれば、君は礼拝を行わなかったのである。もしかすると、君のために読誦として記録される[139]かもしれないが、礼拝としてではない。

❑ その啓典[140]の開端章を読まなかった者には、礼拝はない。*[ウバーダ・ブン・アッニサーミト経由、ブハーリー所収]*

[139] 人間の行状記に、善行として記録される。

[140] クルアーン。

慈悲あまねく慈悲深きアッラーの御名において

これは、たとえクルアーンの中で最も美しい節ではなかったとしても、その最も美しい諸節のなかの一つである。しかしながら、繰り返し、習慣、日常化によって我々がその中にある性質を見ることが妨げられてしまい、「ありがとう」、「ごめんなさい」、「さようなら」[141]といった種類の単なる礼儀正しい言葉遣いであるかのようにそれを復唱するようになっている。しかしながら、なぜ諸世界の主はそれを我々が礼拝に於いて一番最初に復唱する節として選び給うたのか、自問しようではないか？　なぜ、それによってクルアーンが開かれる一番最初の節なのか？　殆ど全ての章[142]に入る場合に我々が通過する一番最初の表現であるのは何故か？　なぜ、それは開端章の一部[143]なのか？

我々がこれら全ての冒頭にバスマラを復唱すること、我々の生活の殆ど全ての事柄の冒頭にそれを復唱することによって、それが何らかの行為の開始ないし着手を単に意味する節であると幻想するようになった。のみならず、統語論学者達はこの幻想によって我等の後を漂流し、「御名において bi-smi」という前置詞と名詞が掛かる真の行為ないし出来事の仮想[144]について大した労力を払わずに、その仮想が「アッラーの御名において開始する」であると述べ、これによって彼らは自分たちの統語論的問題を解決したのであるが、この節の重要な真の意味が代償とされたのである。

---

[141] ma‘a al-salāmah.

[142] 第９章の冒頭には存在しない。

[143] １章１節として組み込まれているのか。

[144] 「御名において」だけでは文章として不完全なため、その前後に省略されている内容を仮想的に復元すること。

事態は、それがアッラーの御名による行為ないし聖なる明文の開始に過ぎないということとはかけ離れている。そして、我々が読む際にバスマラがクルアーンの各章の冒頭にあるいは我々が実施する際に諸行為の始めに存在することが、我々がこれから解説するその本来の意味 ―それ[145]がこの場所[146]に位置することを要請する意味―のお陰であって、それ[147]が我々や統語論学者を我々と共に幻想へと引き寄せたことに、疑いは入れない。

その節[148]は、我々がその後に読むあらゆるクルアーン的伝達、あらゆる命令、あらゆる禁止、あらゆる約束、あらゆる警告、あらゆる形容、あらゆる情報、あらゆる訓告、あらゆる訓戒が、威厳ありいと高きアッラーの代理として、彼の権威と源泉性に基づいて、舌から発せられるのに他ならないということを示しており、これはそもそも最も重要な指示内容である。

人間がこの大地の上でのアッラーの代行者であるのだとしたら、「そしておまえの主が天使たちに、われは地に代行者をなす、と仰せられたときのこと」*[クルアーン2章30節]*、彼がこの様な大きな仕事、彼にこの大地を委任し給うた御方の言葉、その御方の言葉そのものをそれが至高者から発出されたのと同じ元来の姿で朗唱すること、に立ち向かおうとする際に、自分自身及びまたそれを聞くものに、自らが下方にてこの大地の世界の中で、上方の天の世界から発出さ

---

145 バスマラ。

146 冒頭。

147 バスマラが冒頭に位置すること。

148 バスマラ。

れたそれらの言葉を復唱するに際して、至高者の代行権によって、彼の源泉性によって、威力比類無き威厳に満ちた彼のこの地上での代行者としての属性によって、それを復唱しているのに他ならないと想起させることが必要である。

裁判官が目の前にある事件について判決を下し、「人民の名において」との発言によって判決の朗読を開始する際に、彼はこれによって「人民の名において開始する」と意図しているのであろうか？　それともこれとは違って、「人民の名において発言する」と言いたいのであろうか？　彼が「名において」と復唱する際、彼がこれから発言しようとしているこの判決が、「人民の代行権によって」発出されるのに他ならないことを強調しているのである。従って、彼はこの人民を代表し、その源泉性に依拠し、彼の決定は彼らから付与された権能より発出するのである。君が親戚の誰かが君の要求に答えてくれるようにと依頼する際には、「親類の名において懇願する」と言うが、君は「親類の権能、源泉性および責任において、これを依頼する」と意味しているのに他ならないのである。

我々が開端章あるいは章を「慈悲あまねく慈悲深きアッラーの御名において」の節ではじめる事は、読誦者に対し、彼が朗唱しようとしているこの天の教えについて、これから彼が「アッラーの権能と源泉性によって」読誦するのに他ならないことを想起させることである。そして、もし我々がここの「bi」という前置詞の掛かり方について統語論学者達が提唱する「…の名において開始する」との解決策に満足するのであれば、我々は彼らと共に探求や発見の困難から逃れて安心したであろうけれども、我々は広いものを狭くし、この言葉の素晴らしく重要で基本的な意味を失うこととなったであろう。

私がバスマラによって礼拝を開始する際、これは私にとって、今これから行おうとしていることが、単に私から発出される自動的な動作、私の舌の上で押し合いへし合いし心が動かされる事もない繰り返される暗記された言葉とならないように、いや寧ろそれはアッラーとの真の連繋である、と想起させる警鐘である。それに対して、私がこれから行おうとしていることは、私と彼との間の誓約の実施であり、私が未だに彼のこの地上における代行者としての地位に対して誠実であると確認するのである。

私がこの拙著の最初の頁を「慈悲あまねく慈悲深きアッラーの御名において」との表現によって飾ろうとした際、それは諸世界の主からの私への喚起、そして私から彼への確認に他ならないのであった。最初の言葉から最後の言葉までこの本の中にある全てが、彼の御尊顔の希求、彼の諸原則の遵守、彼の則を越えないこと、彼の大地の上で私に与えられた権能の諸条件に従うという私と至高者との間の強固な契約に従ったものとなることを。

「アッラーの御名において」は君とアッラーとの間の、君がこの大地における彼の代行者に過ぎないとの約定書である。したがって、彼の王権以外に王権はなく、彼の権能以外に権能はなく、彼の動産以外に動産はなく、彼の不動産以外に不動産はなく、彼の食物以外に食物はなく、彼の飲料以外に飲料はなく、おお人間よ、無限の宇宙の中に威力比類無き威厳に満ちた彼が散りばめ給うた何百京[149]もの大小のイクター[150]のなかの、「大地」という名前のこの小さなイク

[149] 1,000,000,000,000,000,000（10億×10億）、途方もなく大きい数字を指す。
[150] 封土とも訳されるが、所有権ではなく、用益権・徴税権として与えられた土地。

ターに天から降されたものは、このイクターに関する諸事のなかで君に任されたものをその本来の所有者の代行権によって運営し、下されたとおりに諸条項を実施し、今にもその有効期限が切れそうな君と彼との間の短期契約に則ることを目的としているのに他ならない。

果たして君は、出発の準備が出来ているか、清算簿[151]を手にして主宰者の前に現れるための準備を行ったか？

しかし、「慈悲あまねく慈悲深きアッラーの御名において」の話題はここで終わらない。かかる「許可」ないし「委任」ないし「代行契約」にとって、「アッラーの御名において」で停止しそこで終了することも可能であったのだが、至高者はこの「契約」を分離されず切り離されることのない一部と見なされる「附記」と結びつけ給うた。それが、「慈悲あまねく慈悲深き」である。

君と彼との間の「代行契約」に相当するバスマラに於いて、またムスリムとその主との間の最も重要な二つの連絡手段 ―礼拝とクルアーン― にとっての特別な冒頭部分に於いて、一つの語源から派生した「慈悲あまねき」と「慈悲深き」という二つの言葉の邂逅は、そして至高なるアッラーの諸属性のうちのこれら二つの属性が邂逅することへの固執は、私たちにとっての、いやむしろ、おお礼拝者よ、特に君にとっての、また君の周り全てにとっての、一つ以上の使信を包含しているのである。

1．聖ハディースにあるとおり「彼の慈悲は彼の怒りに先行する」御方である至高者が、君が美称の中のこの驚くべき慈悲者の一対 ―「意味に於ける明快な相違はあるものの」この二つの名前の近似性

[151] 行状記。

および単一の語源からの派生にも拘わらず― によって始めるよう、113章の冒頭が強調するような驚くべき固執を伴って、君のために選び給うたからである。彼がその時々に諸章の冒頭を彼の数多くの諸属性のうちの代用となる他の一対で「彩色」することに赴き給わないことに注意せよ。いやむしろ、彼がこの冒頭部分を選び給うた際に、もし我々が人間的発想に立ち戻ったとしたらそうしてしまうように二つの要素間での均衡を実現させるべく、力と慈悲が邂逅することが可能な別の一対を君のために選び給うことはなかったのである。例えば「威力比類なく、慈悲深い御方」*[クルアーン45 章42 節]*[152]といった一対、あるいは別の「威力比類なく、よく赦し給う御方」*[67 章 2 節]*という一対のように、威力比類なき御方の書の複数箇所において両者[153]が邂逅しているにも拘わらず。

2.「慈悲あまねき」と「慈悲深き」の両属性にかかる重大な重要性があり、両者が君の礼拝の基本的部分であり、君の全ての朗唱にとっての開端であることによって、もし君が本当にアッラーの大地に於ける彼の代行者という地位に相応しいのであれば、両者が君の有機的一部、君の信仰の基本的柱であることを意味する。

3. 至高者であり「慈悲あまねく」「慈悲深き」彼からの御許可によって、君が代行者であるのだから、至高者である彼の許で選ばれ選好されたこの二つの属性の定めるところによって、君が良き代行者となること、常に、そしてクルアーンによるこの二つの属性に対する固執、繰り返し、追求および強調と相応しい程度に、君に対して委任された「慈悲」の責任水準に達していることが必要とされる。

---

[152] これは間違いで、26 章 9,68,104,122,140,159,175,191,217 節が正しい。

[153] 力と慈悲のように均衡のとれた二つの属性。

君はムスリムである、従って世界が君の顔の親切さ、両唇の微笑、心の繊細さ、近くの者及び遠くの者に対する愛着、全員に対する愛情、敵及び友人に対して平等な寛容性において、放免、愛情、人道性、柔和さ、謙虚さといった他者の包容に関する「慈悲あまねき」と「慈悲深き」を意味する全てを見出さなければならない。

見よ、今日、世界がムスリムを見る際の印象は、本当にこの様な印象であるか？

慈悲あまねく慈悲深き御方

この二つの単語は、「fa‘lān」と「fa‘īl」という言語的に相違した二つの形であるが、両者は慈悲という同一の語源から派生している。これら二つの語形の言語的事実は、両者それぞれにもう片方とは全く違った意味的性格が存在することを示している。「慈悲あまねき（al-raḥmān）」という単語は「fa‘lān」形、つまり、「渇いている」、「怒っている」、「覚醒している」、「幸福である」のように我々の言語において一般的に「今」生じていることを指示する形である。これら全ての単語は今現在生じている性質を示しており、渇いているは今現在そのようであるが近いうちに渇望は消滅するであろうし、怒っているは今現在そのようであるが近いうちに怒りは静まるであろうし、といった次第である。

従って、「慈悲あまねき御方（al-raḥmān）」とは、彼の慈悲が「今現在」…つまりこの言葉を君が読むその瞬間に君の上に降りてきている御方である。それには、天から地へと延伸する現在的垂直的鉛直的意味があり、それによって我々は、アッラーの許から清々しく新鮮に我々の上に下されて我々に向かって動くことを止めない慈悲を感じるのである。それ故、それを読む際にはそれが君の上に滝のように下って、君の頭頂から両足裏まで至高者の慈悲の横溢によって君を洗浄するのを感じ取るように努めよ。

他方、「慈悲深き（al-raḥīm）」は「fa‘īl」形つまり我々の言語において一般的に継続性、延伸、永続を指す形である。従って、鷹揚な者は常に鷹揚であり、吝嗇家は常に吝嗇であり、低劣なものは継続的に低劣である。そうであれば、彼は永遠にそして如何なる時にも

「慈悲深き御方（al-raḥīm）」であらせられ、ここに於ける彼の慈悲は普遍的、過去、現在、未来という時間に於いて延伸しているのである。それは、原初から永劫まで延伸し継続する水平的次元を有し、この言葉を読む瞬間に新鮮さを感じる躍動的生命的意味を有する属性である。*［詳細については拙著 al-Mu ʻjizah, vol.2, Washington : International Institute of Islamic Thought, 2015 の 51~92 頁を参照］*

両単語の次元の分離と両者の区別の正しさについて、我々に安心をもたらすのは、預言者ハディースにある使徒（S）のその読誦法である。

> ❑ アナスは問われた。アッラーの使徒（S）の読誦はどのようであったか？　答えて言った、それは延長であった、と。それから彼[154]は、慈悲あまねく慈悲深きアッラーの御名においてを、慈悲あまねくを伸ばし、慈悲深きを伸ばし、アッラーの御名においてを延ばして読んだ。*［クターダ経由、ブハーリー所収］*

「慈悲あまねき」と「慈悲深き」にはクルアーン読誦法規則の定める延長条件が満たされていないにも関わらず、両者を延長することは、両者のそれぞれに独立性および区分性ある性格を与える。というのも、我々の知るとおり、延長とは時を意味し、時は形容が後続者から分離していることを意味し、分離は意味や方向性における独立性及び独自性を意味するからである。

---

[154] アナス。

赤い鍵2：あなたにこそわれらは仕え、あなたにこそ助けを求める

諸君、不正を被った男が政府部局に赴き奪われた権利を取り戻そうとしている姿を私と共に想像せよ。彼は自分の権利を求めながら職員のいるところに入る。彼[155]は彼に申請書を書き、印紙を貼るように求め、それからそれを逓送便に載せ、局長に到達して検討されその件について決断 ―この決断が正しかろうが間違っていようが、公正であろうが不正であろうが― が下されるに至るまで、通例のルーチンの経路を辿るのである。

この男性の状況と、幸運な別のある男性の状況を比較せよ。彼は、上述の局長と熱烈な友好関係にあり、この局長が彼の申請の行方を最終的に決め、その件についての諾否を決定する最初からの最終責任者であり、彼は公正であって不正を全く働かず、英明であって正答が彼から逃れることは決してない…。

「あなたにこそ助けを求める」の事態とは、この様なことであって、さはさりながら比較の余地は全くなく、最高の譬え[156]はアッラーに帰し、アッラーは常により高くより威力ある御方。

君が公式な申請書を提出する下級職員達は存在せず、その代わりに、彼が君のために聴き給い、否むしろ彼が君から求め給い、否むしろ彼こそが君が自分自身で彼に語りかけ自らの必要を要請するよう命じ給うのだ。さらに偉大なことには、君が望みのものを彼に

---

[155] 職員。

[156] クルアーン 16 章 60 節、30 章 27 節に見られる表現。

依頼する際に彼が望み給う文言を彼御自身が君に指導し給うのである。そうして、開端章の冒頭において彼が御自身に付与し給うたあの諸属性全てを君の舌の上に置き給い、君が彼の僕であることを、また彼が君の主であり、君と君の権益の保護に関して責任のある君の神であることを、君が彼に対して確認する機会をその最後に与え給う。「あなたにこそ助けを求める」…。

> ❑ アッラーの使徒(S)は言われた。アッラーはかく述べ給う。我は礼拝 __つまり開端章__ を我と我が僕の間で二つに分割した。それで、半分が我のもの、もう半分が我が僕のもの、そして我が僕には彼が請願したものがある。僕が「称賛はアッラーに帰す、諸世界の主に」と言えば、彼は「我が僕が我を称賛した」と述べ給う。彼が「慈悲あまねく慈悲深き御方」と言えば、彼は「我が僕が我を褒め称えた」と述べ給う。彼が「裁きの日の主宰者に」といえば、彼は「我が僕が我を賛美した」と述べ給う。そして彼が「あなたにこそわれらは仕え、あなたにこそ助けを求める」と言えば、彼は「これは我と我が僕の間にある、そして我が僕には彼が請願したものがある」と述べ給う。そして、彼が「われらを真っすぐな道に導き給え、あなたが恩寵を垂れ給うた者たち、(つまり)御怒りを被らず、迷ってもいない者たちの道に」と言えば、彼は「これは我が僕のものである、そして我が僕には彼が請願したものがある」と述べ給う。*[アブー・フライラ経由、ムスリム所収]*

従って、我々は今、章の中心に位置する節と共にある、否むしろ、節の中心が章の中心である。というのも、君がアッラーへ捧げる彼を偉大なものとして称賛し超越者として称賛するのを強調する立場が

ここで終わり「あなたにこそわれらは仕え」、そして同じ節に於いて君の望みをアッラーに依頼する依願的祈願的な別の立場が状況として始まるのである「あなたにこそ助けを求める」。

一つの節に集められた二つの違った停留所に存在するこの驚くべき独自性によって、あたかも、この節の前半部分「あなたにこそわれらは仕え」のところで朗唱を中断し、それからその後にその後半部分「あなたにこそ助けを求める」を続けなければならないかのように、本当に我々は感じるのである。いやむしろ、アリー・ブン・アブー・ターリブ（R）より、「w が産出されるようになるまで d を飽和させる」[157]事を定めた「われらは仕え na‘budu」という言葉の読誦が伝えられる。*[‘Abd al-Ṣabūr Shāhīn, Tārīḫ al-Qur’ān, Qairo : Dār al-Qalam, 1961, p.175].* これは、長音の前に来たものがその後から来たものとは違う性格であることの確定とその独立性の顕在化を助けている。

君がこの二つの表現を礼拝に於いて復唱するとき、両者が一つの節においてもたらされているにも関わらず、君が二つの相違した立場を前にしていること、また、同節の前半部分「あなたにこそわれらは仕え」をこれから発音する際の調子が、後半部分「あなたにこそ助けを求める」をこれから発音する際の調子とは異なる必要があることを、君は感じたことがあるか？　君が現在、この契約の乙に関連した部分から、甲に関連した部分へと移行していることを想い出せ。

[157] d を長音化して dū とせよ、の意。アラビア文字の d と w を合わせると dū と発音するため。

君の前髪[158]、生命、行く末がその手にある御方に対する荘厳化、服従、偉大化、称賛の抑揚を声に出して「あなたにこそわれらは仕え」を発音するであろう。しかし、君は希望、依願、祈願、依頼、脆弱性の抑揚を声に出して「あなたにこそ助けを求める」を発音するであろう。この強力な「助ける者」の御許から君の上に注がれんがばかりの、助け、救済、慈悲、応答の大雨を感じながら。どうしてそうでないことがあり得ようか。初期世代が述べたように、その御方が君に敵対すれば一体誰が君と共にあるというのか、またその御方が君と共にあれば一体誰が君に敵対するというのであろうか、というその御方が、君の前におられ君は彼に語りかけて彼は君を聞き届け給うというのに？

それは、アッラーが彼と彼の僕との間で分割し給うた節であり、それによって至高者が礼拝者である彼の僕に対して最も正直な約束者から発出される、最も美しい約束を、約束し給うたのである。「そして我が僕には彼が請願したものがある」。

聞き届けられることを、酷暑の日に人々と一緒に雨乞いの礼拝に出かけたが、彼のみが脇の下に傘を携えていたというあの礼拝者の確信によって確信しながら、「あなたにこそ助けを求める」を読め。
われらを真っ直ぐな道に導き給え。…な者たちの道に

さて、既に称賛の扉が開かれたので君は称賛し、慈悲の扉が開かれたのでそれを降ろすように君は求め、請願の機会が開かれたので君は請願したが、今ここで、諸世界の主は人間がこの現世で依頼することが可能な最も大きな依頼を君の舌の上に乗せ給う。つま

[158] クルアーン 11 章 56 節、96 章 15,16 節参照。

り、真っ直ぐな道への導きである。我々が自らの身の上に関して恐れることで、この道からの逸脱よりも大きな事があるであろうか？

諸君想像せよ、もし仮に我々が最も偉大な富貴者で、最も賢い賢者で、完全に健康な健康者で、最も完全な幸福者で、そうして神の唯一性と導きの恩寵を与えられていないとしたら、あれやこれやすべての用益は何であろうか？　現世での幸福？　我々が来世を禁じられたとしたら、現世の幸福とは何であるか？　楽園ないし火獄に於ける永遠の生命の一瞬に比して、現世の 100 年ないし 1000 年ないし 10 万年ないし 100 万年は何であろうか？

❑ そして信仰を拒む者たち、彼らの所業は平野の逃げ水（蜃気楼）のようで、喉が渇いた者たちはそれを水だと思うが、ついにそこに辿り着いても何も見出さず、そこにアッラーを見出し、そうして彼（アッラー）はその者に彼の清算を完済し給うた…
［クルアーン 24 章 39 節］

❑ 復活の日、不信仰者達の内で最も恵まれていた現世の民の一人が連れてこられ、彼に対して火獄の中に一回浸けよと告げられ、そうして彼はそこに浸けられる。それから、彼つまり某に対して、一度でも恵みを受けたことがあるかと告げられると、彼は、いいや、私は一度も恵みを受けたことはないと述べる。また、信仰者達の内で最も被害と試練の激しかった者が連れてこられ、彼に対して楽園の中に一回浸けよと告げられ、そうして彼はそこに浸けられる。それから、彼つまり某に対して、一度でも被害や試練を受けたことがあるかと告げられると、彼は、私は一度も被害も試練も受けたことがないと述べる。

［アナス・ブン・マーリク経由、イブン・マージャ所収、アルバーニーが真正と判定］

本当に、「あなたにこそ助けを求める」を読む際に我々が感じる楽しみは、その直後に「われらを道に導き給え」を読む際に感じるそれとは、別である。最初の表現は現世についての請願であり、後者は来世についての請願であるが、同時にそれは現世的意味の可能性を妨げることはない。すなわち、真っ直ぐな道は、開かれた表現であって、神の唯一性や導きに加えて、同様にあらゆる事柄における叡智、道理、正見なども意味することが可能である。

果たして、人間が人生に於いて、人生の諸事に際して助けを求め周囲にいる他者をも助けることができる真っ直ぐな正見を授かること以上に大きな現世的恩寵が存在するだろうか？

「開端章」に於ける「道」という語の「開放」性は、それ[159]のみに限られているわけではなく、むしろ章の終わりまで続いている。さて、誰が「あなたが恩寵を垂れ給うた者たち」で、誰が「御怒りを被った者たち」で、誰が「迷った者たち」なのであろうか？　果たして多くのクルアーン解釈学者が赴き、一部の高貴なハディースにおいてもたらされているように、彼らは順番にムスリム、それからユダヤ教徒、それからキリスト教徒なのであろうか？

❑ …｛御怒りを被った者たち｝ユダヤ教徒、また｛迷った者たち｝キリスト教徒。*［アディー・ブン・ハーティム及びアブー・*

[159]「道」。

ザッル・アルニギファーリー経由、アルバーニーによる『真正ハディース双書』において真正と判定］

これら三つの表現は言語的に完成されており、その後に如何なる仮想的言語空隙の可能性もないが、しかしながらこれらに対応する別の人間的表現と比較すれば、これら三つのクルアーン的表現の持つ開放的性質の本質を我々は承知するであろう。

開かれたクルアーン的表現を「閉じた」代替的表現に置き換えて同節を改めて私と共に読み、両表現間の違いを明瞭に理解せよ。

われらを真っ直ぐな道に導き給え、ムスリム達の、ユダヤ教徒のでも、キリスト教徒のでもない道に。

今、開かれたクルアーン的表現の「豊饒さ」の程度が、君に明らかとなったか？　それは、「あなたが恩寵を垂れ給うた者たち」の意味を全ての恩寵を授かった者達に「開き」、「御怒りを被った者たち」の意味をアッラーが御怒りになった全ての者たちにそして「迷った者たち」の意味を全ての正道から迷った者達に、預言者的クルアーン解釈を否定することなく、同時にこれら3つの表現を「閉じて」これら全てを特定の集団に限定する　──我々が我々の人間的表現に於いて行ったように──　ことなく、開くのである。

大変重要なのは、「われらを真っ直ぐな道に導き給え」を読む際に、それが主の叡智によって、礼拝に於ける他の数多くの開かれた表現や言葉の中にあって、我々に開かれた状態でもたらされたことを想い出す事である。我々の望みどおりに開いて地表上の全ての被造物

を含むことも出来れば、我々の望みどおりに狭窄させその読誦者である「私」を越えないようにする事も出来る程である。本当に、それは単数形でもたらされず、この様に複数形「われらを導き給え」でもたらされたのである。

この真実を既に承知したからには、諸君の祈願によって子息、家族、親戚、隣人、知人といった諸君の周囲にいる者を、できる限り包摂するように努めよ。否むしろ、諸君の祈願が、友人も敵も平等に、ムスリムであろうと非ムスリムであろうと、世界全体を包摂するようにせよ。真理、公正、真っ直ぐな道への導きを友人達、敵達、人類全体平等に与え給うようアッラーに依頼することよりも素晴らしく、高価で、偉大なことがあるだろうか？

ここにある代名詞「我々」が全て ―例外なく全て― を含むように拡大する程度まで、その壁を君が破ることは、君と他者 ―あらゆる他者― との間の忌避および嫌悪の壁を破ることであり、忌避の旗を揚げ続け、授乳期の子息達にムスリムになりたいのであれば忌避し嫌悪しなければならないのだと教えるあの者達に対して、君が君の心の中に愛と寛容の旗を揚げ続けるのであるとの継続的声明、決意及び訓練なのであるということを想い出さねばならない。君はムスリムである、しからば君は愛情ある人、寛容な人であるとの黄金の原則を想起せよ。

- ❑ 赦免（寛容）を取り、良識を命じ、無知な者たちから遠ざかれ。*［クルアーン 7 章 199 節］*
- ❑ だが、免じ、（関係を）正す者、その報酬はアッラーの上にある。*［クルアーン 42 章 40 節］*

❑ また、もし、おまえたちが大目に見、寛恕し、そして赦すなら、まことにアッラーはよく赦し給う慈悲深い御方であらせられる。*［クルアーン 64 章 14 節］*

開端章における長音の停留所

もし、長音が若干の停止に匹敵するのであれば、かかる追加的時間的休息によって言葉や表現に独特の性格と強力な独立性の充填を与える。というのも、既に解明したように、かかる時間的な空隙が、中に長音が位置する言葉や表現の意味を熟考し吸収するための緑の追加的待機を意味するからである。

ここで、読誦に於ける「完全な停止」と「長音」とを区別する必要がある。それは、特別な種類の停止、ないし「疑似停止」である。使徒(S)は、開端章を始める前と、それを終えた後に完全なる停止で停止したものであったし、全ての節の終わりにも完全な停止で停止したものであった。これは、全ての節と節の間を分ける別の緑の空隙を意味する。他方、長音の停止ないし別の表現によれば疑似停止、つまり節の内部に位置するあの外在因性的附加的時間的延長は、その性質として、我等の読誦により多くの謙譲、意味の空想、読誦内容の吸収を与えること、また、これまでの意味について熟考しこれからの意味を迎えるために準備するだけの十分な時間を我々に与えてくれる、より多くの緑の追加的待機を我等に与えること、がある。私が開端章の29単語について数えたところでは、少なくとも21の発声上の長音があり、さらに諸節の末尾に於ける自然な停止箇所が7箇所ある。開端章に於けるかかる強力で重点的な長音の充填は、通常の我々の話し言葉あるいは書き言葉には見出せず、また同様に他の諸章の殆どに於いて見出せないものである。

開端章に於けるかかる連続的な長音 ―恐らくはクルアーン読誦法の規則に反して[160]、否むしろ開端章がそもそもこの規則の適用をほぼ完全に免れているという点で殆ど唯一の存在であるのだが― もまた開端章独自の特徴であり、礼拝者が、その御方の前に立ち彼に対して礼拝するその威厳が充ち満ちた御方についての熟考、一任、服従、卑下に沈潜することを助けるのである。

聖クルアーンにおける最も短い二つの章、「豊饒章」と「純正章」[161]における長音の状況を例として数えたとしたら、前者に於いては章の 10 語を通じて「innā __ a'ṭaynāka __ shāni'aka」の 3 件を越えないことを、後者に於いては章の 15 語を通じて「Allāh __ Allāh __ yūlad __ lahu[162]」の 4 件を越えないことを見出すのである。

ここで重要なのは、本書に於ける発想、分析、提言の全ては実際のところ否定や再考の余地のある「人間の考え」を越えないことに改めて注意喚起することであり、これらの考えに矛盾する事実が典拠によって確定した場合には、我等は常に明文や典拠と共にあるのであって、ムスリムにとってこのようであること以外は許されないのである。

---

[160] khilāfan li-qawāidi al-tajwīd gāliban.

[161] 108 章と 112 章。

[162] lahu と表記されているが、クルアーン読誦法（tajwīd）に従って lahū と読まれる。

屈礼及び跪拝の中心性

私が 40 歳にして初めての大巡礼を行ったとき、質素な布きれ2枚を体に付けてカアバ神殿の周りを急いで周回礼を行いながら、自分が小さな子供そっくりであるのを見出した。そして、悪魔が私にささやきだした。大学のおまえの学生達 ―その中にはムスリムもいれば非ムスリムもいる― がこの状態のおまえを見たとすれば、どうであろうか？ 彼らは、一体我々の先生に何が起こったのだろう？と言うであろう。果たして、これが威厳、自信、自信ある歩き方、重々しい所作と共に我々の前に現れることを習慣としていた人物であろうか？アッラーのお陰で、彼のみに向けられた僕性と信仰の精神が、このささやきの火を消し、私がムスリムであると思い起こさせるべく、私に向かって急ぎ立ち向かってくるのに時間は掛からなかった。

私はムスリムである、これはつまり、私は無抵抗である、つまり服従している、つまり卑小である、脆弱である、僕である、あるいは別の表現によれば、諸天と地を有し、生かし死なす、全能な、あの威力比類なき御方、強き御方、強制者、尊大な御方を前にして、全く何ものでもないということである。

この最上の霊的微風は、この後、私の諸敬神行為の如何なる敬神行為に於いても、私がアッラーに対して身を低める度に私に生じるようになった。それは、屈礼で屈む毎に私に同行するようになり、そうして私は「讃えあれ偉大なる我が主こそ超越者」、彼が全ての脆弱さ、そして不正、そして欠損、そして疲労、そして見落とし、そして、そして、そして…からの超越者であると讃え、それから、屈礼から立礼する毎に、つまり私が「アッラーは彼を称賛する者を聞き届け給う」との黄金の神的法則を想い出し、それ故に「我らが主よ、称賛はあなたに属し

ます」と彼が私を創造し給い、そして私を導き給い、そして私に与え給い、そして、そして、そして…してくださった件について称賛しつつ答えて、それから、跪拝で跪く毎に、つまり「讃えあれ至高なる我が主こそ超越者」と私が改めてこれこれから、そしてこれこれから、そしてこれこれから…の超越者であると讃える毎に、私に同行するようになった。この様にして、私の頭が大地でアッラーに対して最も低くなる際に、あちらの天で彼に対して最も近い状態になる事を言葉でも行為でも感じるようになったのである。

❑ アッラーの使徒(S)の解放奴隷であるサウバーンに会ったので、「行うことによってアッラーが私を楽園にいれ給う行為について伝えよ」、と私は述べた。あるいは彼[163]は、「『アッラーにとって最も好ましい行為について』、と私は述べた」と言った[164]。だが、彼[165]は沈黙した。そうして私は彼に尋ねたが、彼は沈黙した。それから三回目の質問を彼にすると、彼は「私はアッラーの使徒(S)にそれについて尋ねたところ、彼は『アッラーに対する跪拝を多くすることがおまえに課せられる、おまえが一回の跪拝をする毎に、必ずしやアッラーがそれによっておまえの位階を上げ、おまえの過誤を減少させ給う。*[ミウダーン・ブン・タルハ経由、ブハーリー及びムスリム所収]*

諸君は礼拝の際に ―否むしろ屈礼と屈礼の間に、そして跪拝と跪拝の間に― 盗みを行う者が礼拝者達の間に存在すると一度で

---

[163] ハディースの伝承者。

[164] ここでは著者の引用方法のせいで主語に一貫性がないが、「いれ給う行為について伝えよ」と『好ましい行為について(伝えよ)』と依頼している人物は同一である。

[165] サウバーン。

も想像したことがあるか？　この種の泥棒の最も驚くべき点は、彼らが他人からではなく自分自身から盗むという事である。

> ❏ 飲酒者、姦通者、泥棒について皆はどう思うか？[166]
> これは、固定刑の規定が下される前のことであった。彼らは、アッラーとその使徒がよくご存じです、と述べた。彼は、これらは醜行である、そしてそれらに関して罰がある[167]、そして最も悪い窃盗とは己の礼拝を盗む者のである[168]、と述べた。彼らは、どうやって彼は己の礼拝を盗むのですか、と述べた。彼はその[169]屈礼も跪拝も完遂しないのである、と彼は述べた。*［ヌウマーン・ブン・ムッラ経由、アルバーニー『奨励真正集』所収］*

どうして、こうではないと言えようか？　礼拝はアッラーから我々への贈与として、また、毎日周知の時間に日々の給与が我々に送金され、アッラーのお望みの金額が我等のために運ばれ、来世の口座に入るための、「定時の書き定められたものとして」[170]下されたのではないのか？　しかしながら、礼拝は我々の殆どの前では遊びと時間の浪費の手段に変化してしまった。現在では、それは彼らの許では、権利から義務、単に早急な四肢の運動、早急な口の運動、早急な終わりへの到達に転化した。

---

[166] 預言者ムハンマドによる問いかけ。

[167] *Mirqāt al-Mafātīḥ : sharḥ Mishkāt al-Maṣābīḥ* によれば、固定刑の規定が下される前であったため、来世での罰を指すとも、罰に関する啓示が下されるであろうの意ともされる。

[168] 礼拝を盗む者の窃盗である。

[169] 礼拝の。

[170] クルアーン 4 章 103 節参照。

❑ 礼拝は三分の三であり、浄化が三分の一、屈礼が三分の一、跪拝が三分の一であり、それを充分正当に行った者からはそれが受け入れられると共に彼の全ての行為も受け入れられるが、礼拝が撥ねられた者は、彼の全ての行為が撥ねられる。*[アブー・フライラ経由、アルバーニー『奨励真正集』所収]*

アッラーよ…。もし、屈礼に三分の一があり跪拝に三分の一があるのだとしたら、その場合に両者以外に一体何が残るのであろうか？ 屈礼と跪拝が、礼拝に於いて我等に課された唯二つの動作であることに我等は気付いただろうか？　我々はそれ[171]を立礼によって動くことなく開始し、座礼によって動くことなく終結させるため、この二つの動きの無い姿勢の間には屈礼と跪拝という二つの動作のみが存在する。

使徒(S)がこの二つに関して「動作」と「沈黙」の邂逅を中心としていたことに我等は気付いただろうか？　我等の動作全ては、発声後に待機、停止、沈黙、思考を必要とする開かれた表現を伴っている。

我等が「アッラーフ・アクバル」と復唱しそれが開放的性質であるということは、その後の「アッラーは何よりも偉大なのか？」という若干の沈黙と思考を意味する。「アッラーは彼を称賛する者を聞き届け給う」それから「我らが主よ、称賛はあなたに属します」と復唱し、またこの両者も開放的性質であるということは、両者の後の「我々は何に関して彼を讃えるのか？」という若干の沈黙と思考を意味する。「讃えあれ、偉大なる我が主こそは超越者」と「讃えあれ、至高なる我が

[171] 礼拝。

主こそは超越者」を復唱し、両者の開放的性質は、両者の後の「我々は彼が何から隔絶しているとし、何に関して彼を超越者として讃えるのか？」という若干の沈黙と思考を意味する。

屈礼と跪拝の礼拝からの取り分が三分の二であるのは、これに起因する。その[172]なかで、「讃えあれ、偉大なる我が主こそは超越者」と「讃えあれ、至高なる我が主こそは超越者」を復唱する度毎に、アッラーの偉大さと威力比類なさを空想するのに役立つ何らかを空想せよ。

君のタスビーフから、また全ての礼拝から敬神行為を成せ、そこから習慣を成すな。

もし、「アッラーフ・アクバル」が「忍耐」のための機会で、人生において直面する試練や困難に立ち向かうべくそこから力を得て、また「称賛はアッラーに帰す、諸世界の主に」と「我等が主よ、称賛はあなたに帰す」がアッラーの君に対する恩寵と厚遇の「想起」及び空想の機会であるとすれば、「讃えあれ、偉大なる我が主こそは超越者」と「讃えあれ、至高なる我が主こそは超越者」は、アッラーの偉大さと創造と創出についての「思考」と「熟考」の機会なのである。

君の礼拝を君の現世と君の来世のために投資せよ、そして、跪拝し口でタスビーフした際に、四肢、理性、心、魂がともに跪拝しタスビーフする者達の一員となれ。

---

[172] 礼拝。

赤い鍵3：諸々の挨拶はアッラーに帰す

君は、アッラー御自身に対して君が挨拶することの意味を充分承知しているか？　住まいの楽園で、無限の宇宙的スィドラの許で[173]高御座に座しながら君を見つめ給う彼の前で、君が座りながら、おおアッラーよあなたに挨拶します、と言うことの価値を？

これまでに君が辿ってきた段階は悉く、全てこの最大の瞬間を獲得するのを助けるための、またかかる無限の宇宙的諸階層及び距離を通過することができる十分な霊的充填を君に与えるための準備段階に過ぎなかったのである。君が最終的に、この様な特別の地位に、そしてアッラーに挨拶するという特別な報酬を獲得するために相応しくなるように…。

その瞬間を全次元で体験し、仲介者も執り成し人もなくホットライン上であるいは生放送でこのようにアッラーよ私はあなたに挨拶しますと君が彼に語りかけアッラーに挨拶するのを本当に感じたとしたならば、自分自身が占めているこの立場のなんと素晴らしいことか？！アッラーこそが最も高く最も威力比類なき御方…。アッラーこそが最も高く最も威力比類なき御方…。

この会見の後に、もし仮に扉のところで君を待っている偉大で壮大なご褒美が続かなかったとしても　―尤も、実際には生じるのであるが―、この会見それ自体が、もし君がこの会見の滋味を感じたとすれば、喜びに次ぐ喜びであり、他に並び立つものの無い賞なのである…。

---

[173] クルアーン 53 章 14-15 章参照。

「諸々の挨拶」の祈願に於いて、我々は一つの挨拶ではなく、それぞれ違った偉大な4つの挨拶を前にしているのである。おお、一番最初に我々は偉大なる我等の創造主に直面し、至高者のみに特化したこの大変特別で楽しい挨拶「諸々の挨拶はアッラーに帰す」によって挨拶する。それから、おお、その後に、高貴な彼の使徒（S）に対して、芳しい挨拶の一群の間に於いて直ちに後続する「あなたに平安あれ、おお預言者よ」との挨拶を投げかけ、その時から、その時からのみ、最大の賞を獲得し始めるのである。この驚くべき花束「我々に平安あれ」という第3の挨拶を我々自身に投げかける際に。以上は全て、「アッラーの義しい僕達」全てに対する我々の第4の挨拶の投げかけによって諸挨拶の聖なる一行を終了させる前の事項である。

これらの4挨拶の間に数多くの「緑地」が耕されており、既に見てきたように、これは礼拝において非常に重要な言語的要素である。これは、開放的要素と均衡を取る役目を果たし、赤い基本的な言語的用地に続く肥沃で緩やかな言語的敷地を我等に与えるのであり、これらの肥沃で緩やかな用地を ―その前に位置する赤い支柱的用地の意味を理解しその残像と示唆内容を空想しつつ― 発音するのに掛かる時間的空隙を我々に許すのである。

例えば「諸挨拶」の祈願が、緑の追加的言語用地ないし時間的余裕の殆ど存在しない数珠繋ぎの急速な言語的リズムでもたらされたと想像してみよう。「諸々の挨拶はアッラーに帰し、預言者に平安あれ、我々にも、アッラーの義しい僕達にも」…。

あるいはもっと早い調子で、この様に、「諸々の挨拶はアッラーに帰し、その使徒にも、我々にも、義しい者達にも」…。

これら二つの提案された性急な形式は、その意味を少しも失ってはいないが、原文に於いてもたらされた意味の諸次元や残像の多くを損なっていることを看取せよ。

我々の速記的手法では、「諸々の挨拶はアッラーに帰す」とアッラーに挨拶を投じた後にこの特別な状況の滋味を理解しその重要性と偉大さを楽しむための十分な ―かかる挨拶によって挨拶した者に対する威力比類無き威厳に満ちた彼からの、急ぎの答礼および即時的応答としての、頭頂から足の裏までを洗う至高者の慈悲及び祝福の大雨が降り注ぐのを感じるのに十分な時間がある程度の― 時間的余裕が礼拝者に与えられない。至高者は、信仰者の礼拝に於ける彼に対する挨拶が、一波、二波ないしそれ以上に伸展する、緑で肥沃で長いものとなることを望み給うた。そしてこれを助けるのが、諸単語の末尾にある最終文字の子音化であり、単語が君と共により長く留まり、より長い時間的伸張を獲得することになる。

「諸々の挨拶は al-taḥīyātu……アッラーに帰し li-llāh [174]……また諸々の礼拝も wa al-ṣalawāt……諸々の善行 al-ṭayyibāt……諸々の増し清めるもの al-zākiyāt……諸々の祝福されたもの al-mubārakāt……」。

[174] li-llahi の末尾の h が子音化している。以下同様。

ここで、想起せよ。君は自分の小さな子供に、君の兄弟に挨拶するのと同じ言葉で挨拶をするか？　君は自分の兄弟に、君の上司に挨拶するのと同じ言葉で挨拶をするか？　君は自分の上司に、君の大臣に挨拶するのと同じ言葉で挨拶をするか？　君は自分の大臣に、君の国王ないし君の国家元首に挨拶するのと同じ言葉で挨拶をするか？　しからば、この「諸々の挨拶」を投げかける際に、諸天と地の主、諸王の王に挨拶するに際して私の言葉はどのようであるべきかを自問せよ。

そしてこのことは部分的に、次に来る挨拶、今我等が高貴な使徒(S)に対して投げかけようとしている「あなたに平安あれ、おお預言者よ」に当てはまる。

アッラーにとって最も好ましい被造物たる人、我々にとって完全に最も好ましい人に対して君が平安を投げかける際、二つの滋味を感じるであろうからそのいずれも取り逃さないようにせよ。そして、自分自身に十分な時間を与え、両者全てを楽しみ味わい酔いしれる前にこの時間を通り過ぎてはいけない。

1．君の主に対して、まるで彼が君の前にいるかのようにして、挨拶を投げる滋味、君が挨拶しているときに彼が君のことを聞き届け給うのだとの君の確信の滋味から抜け出た直後の、アッラーの使徒に対する、まるで彼が君の前にいるかのような、平安の挨拶の投げかけの滋味。
2．彼の君に対する答礼を感じる滋味、特にこの挨拶に対して彼が君に答礼するべくアッラーが彼に生命を返還し給うと確信している際の。

❑ 誰かが私に平安の挨拶をして、私が彼に対して平安を答礼するべくアッラーが私に私の霊を戻し給わないことはない。*［アブー・フライラ経由、イブン・タイミーヤ『ファトワー集』及びナワウィー所収］*

しかし、これよりももっと驚くべき、より素晴らしい、より面白いことは、この高貴なる答礼に至高なるアッラーが彼の預言者と共に参加し給うことを君が知ることである。それ故、君が彼の預言者に恩寵を祈願する[175]か平安を祈願した際には、彼御自身もまた君に対して挨拶、恩寵祈願、平安期願を投じ給うのであって、これは一つ以上の聖ハディースによって確認されている。

❑ 金曜日は私[176]への恩寵祈願を多くせよ。というのも、以前ジブリールが威力比類無き威厳に満ちた彼の主から私のところに来て、次のように言ったからだ。地上にて、ムスリムでおまえに恩寵を ＿つまり、金曜日に＿ 一回祈願した者があれば、我と我の天使達が彼に対して 10 回の恩寵祈願をしないことはない。*［アナス・ブン・マーリク経由、アルバーニー『奨励真正集』にて良好と判定］*

おお、アッラーよ…何という平安祈願か！何という恩寵祈願[177]か！何という報奨か！…。どんなに想像力があったとしてもアッラー

---

[175] ṣallayta. 礼拝（ṣalāh）の原義は祈願（du‘ā’）。また、挨拶（taḥīyah）の原義は、生命・元気（ḥayāh）があるようにとの祈願（du‘ā’）。

[176] 預言者ムハンマド。

[177] 礼拝も恩寵祈願も共に ṣalāh。

が君に恩寵祈願し給うことの価値を想像することが出来るか？　それから、何兆ものアッラーの天使達がアッラーの御命令によって君に恩寵祈願することの価値を？　１回ではなくして連続する10回であって、さらには、君が諸々の挨拶の最中や諸々の挨拶以外の際にアッラーの使徒に対して恩寵祈願を復唱する全ての回数毎に、君に対してこの聖なる恩寵祈願が復唱されるということを？

赤い鍵4：我々にも、アッラーの義しい僕達にも平安あれ

これは、単なる挨拶ではなく、君のアッラーへの入域及び彼と彼の高貴な使徒（S）への挨拶によって獲得した最大賞の象徴なのである。君の元首ないし王への訪問において、宮殿を辞去する際に、通常訪問客達に与えられる王室ないし元首位に相応しい褒美が君のために扉の許に置かれているのを見出すであろう。また、それは王室級ないし元首級であるであるため、通常の贈り物とは成らず、王や元首の地位に相応しい贈り物である。

では、君が表敬訪問した際の、諸王や諸元首の創造者、天と地の創造者の贈り物はどのような物となる事が可能であろうか？　君の想像以上に偉大で壮大で途方もないものであることが必然である…。それは、何百京もの賞であり、アーダムの創造から「彼らが甦らされる日」[178]までの間に天と地においてアッラーが創造し給うた／創造し給う義しいアッラーの僕達の数だけ、君は受け取るのである。これは、アッラーの使徒（S）が我等に約束されたように、アッラーの僕達の一人に対して投げかける全ての平安の挨拶に関して、一つの善行ないし複数の善行が本当にその者[179]にある場合に於いてである。

❏ アッサラーム・アライクムと言った者、彼には10の善行が書き留められ、アッサラーム・アライクム・ワラフマトゥッラーと

[178] クルアーン 7 章 14 節、15 章 36 節、23 章 100 節、26 章 87 節、37 章 144 節、38 章 79 節にある表現。
[179] 挨拶を投げかけた者。

言った者、彼には20の善行が書き留められ、アッサラーム・アライクム・ワラフマトゥッラーヒ・ワバラカートゥフと言った者、彼には30の善行が書き留められる。*[スハイル・ブン・ハニーフ経由、アルバーニー『奨励真正集』にて真正と判定]*

君が礼拝に於いてこの二重の挨拶を復唱する際、君の上に二重の褒美が、君がそれを復唱しながらにして、降りているのを感じなければならない。

1．無限の神的平安の空想と、それが君、君の家族、君の愛する者達 ―「我々に平安あれ」― に降っている際にそれを感じ、彼の慈悲、優しさ、安心、平安によって君や彼らを浄化し給うという褒美。

2．無限の数だけ存在する「アッラーの義しい僕達」に対する平安の挨拶の投げかけの報酬として、この無限の分量の善行を空想し、それが静謐と平安によって頭頂から両足裏まで君を覆い尽くし浄化するのを感じるという褒美。

再度ではあるが、非常に重要なのは、平安の挨拶が君のみにとってではなく、それがここで「我々に」と複数形の代名詞を取っていることに注意することである。君が自分自身のみに平安の挨拶をすることと、君の周囲の愛する人々、親戚、縁遠い者達、信仰者達、そして天と地とその間にいるアッラーの義しい僕達の限りない末裔達全てに対して平安の挨拶をして彼らの全員から賞に継ぐ賞が君に届く事との間の違いのなんと大きな事よ。

最後に。与える者としてまた同時に受け取る者として、君の「諸々の挨拶」ないし君の「タシャッフド」[180]を読め、そして君の「イブラーヒーム的恩寵祈願」を読め。君は礼拝に於いて与えているだけではなく、否むしろ、君の読誦する全ての単語とともに、それを唱えることに関する報奨を、その発音の直後に受け取ったことを確認しなければならない。贈与の文章を読め、その後にこの贈与に関する報奨を受け取るべく暫時立ち止まれ。君が読む以下の全箇所に於いて、この様に読め、それからこの様に立ち止まれ。

「諸々の挨拶はアッラーに帰す…」を与えよ。それから、待って、答礼の受け取りを享受せよ。
「また諸々の礼拝も…」を与えよ。それから、待って、答礼の受け取りを享受せよ。
「また諸々の善行も…」を与えよ。それから、待って、答礼の受け取りを享受せよ…。以下同様に…。
「おおアッラーよ、ムハンマドに恩寵を垂れ給え…」を与えよ。それから、待って、答礼と報奨の受け取りを享受せよ。
「またムハンマドの一党に…」を与えよ。それから、待って、答礼と報奨の受け取りを享受せよ。以下同様に…。

現時点で、これら全ての後に、君が礼拝する際に、両肩から取り除きたい義務の実施に相対していると未だに考えているのか？　それとも、あらゆる現世の賞よりも大きな賞、あらゆる権利よりも偉大な権利の受け取りがほど近いのだと感じるのか？　新しく生まれたかのようにして礼拝から離脱しないのであれば、多くの良きことを君は逃したのだ。

---

[180] 座礼の際の信仰告白。

祈願と祈祷の着座

祈願は、諸種類ある礼拝の簡略化された種類であり、それには礼拝の精神が存在するものの、それにはその[181]公的な枠組み、諸規則、諸準備、諸過程、及び規定の諸時間は存在せず、持ち運びに軽く、いつでもどこでも君の前に不意に現れる移動可能（モバイル）な自由な礼拝の一種であり、従って君がそれ[182]から呼びかけられた場所で、また、自分の陥ったあらゆる状況下で、それを行うことに困難はない。

私はここで、英語に於けるちょっとした言語現象を考慮に入れたい。彼らは、彼らの言語に於いて祈願（al-du‘ā’）と礼拝（al-ṣalāh）を区別せず、英語では双方共に「pray」[183]であり、かかる混淆と混同の中には、祈願が、その形式に於ける語りかけがアッラーに対して向けられている限り、諸種類ある礼拝の一種であるということを示す言語的に賢い示唆が存在する。恐らくは、これによって預言者が語りかけの際にアッラーに向いていた祈願の言葉と、預言者が語りかけの際に我々を向いていたハディースの言葉との区別が説明されるであろう。預言者の祈願の言葉には、味わい精査する者が看取するように、アラブ的表現や修辞法の神秘に習熟した批評家が指摘するように、通常の預言者ハディースの言葉から、修辞的に美的にリズム的に魔術的に感情的に影響的に区別される、独自性が存在する。高貴なハディースの言葉の美しさ、修辞法、人類によってアラビア語で書かれた全ての表現の上にあるという事実を我々が確認しつつ。こ

---

[181] 礼拝の。

[182] 祈願。

[183] pray は動詞であるため、英訳者はこの部分を prayer と訂正している。なお、英訳者は ṣalāh を canonical prayer、du‘ā’を supplication と区別して訳しており、原著者の短見を暗示している。

れよりも驚くべき事は、同様に優秀な批評家にとって通常の預言者ハディースの言葉と聖ハディースの言葉とを区別することが簡単であるということである。

我々は、祈願の言葉、精神及びリズムに、あたかも天がその文体に参画したかのような霊的な感触を見出し、同様に聖ハディースにおいてもこうである。かつて、アッラーの使徒(S)は教友達に祈願を一言一言教えることに固執し、その文体や言葉を一切変えることなく保存することの必然性を説明したものであった。祈願に於いて、「預言者」という単語の箇所を「使徒」という単語に置き換えた者を、両単語が双方共に使徒(S)を指すにも関わらず、如何にして正したかを聞くが良い。

❑ バラー・ブン・アーズィブ(R)から伝えられるところでは、彼は言った。預言者(S)は言った。寝床に来る際には、礼拝のためのお前のウドゥーでもってウドゥーをし、お前の右側を下にして横たわり、それから、「アッラーよ、真に私は自らをあなたに託しました、そして私の顔をあなたへと向けました、また自分の事柄をあなたに委ねました、また自分の背中をあなたに凭れ掛からせました[184]、あなたへの希望と畏怖故に、あなた以外にはあなたからの逃げ場も隠場もありません、あなたが啓示し給うたあなたの啓典とあなたが遣わし給うたあなたの預言者を信じました」と言え。バラーは、そこで私は預言者(S)に付いて復唱したが、「あなたが啓示し給うたあなたの啓典」のところまで来た際に、私は「あなたの使徒を」と言ってしまった、と述

[184] 全ての事柄を委ねた、の意。

べた。彼[185]は、否、「あなたが遣わし給うたあなたの預言者を」である、と言った。*[ブハーリー及びムスリム所収]*

教友達は、かつて彼[186](S)がクルアーンの諸章を教えるのと同じように、どのようにして一部の祈願を教えていたのかを、祈願の言葉を置き換えや付加や除去なしに保存することへの彼(S)の熱意を示唆するものとして、伝承している。

❑ イブン・アッバース(R)から伝えられるところでは、かつてアッラーの使徒(S)は彼らにこの祈願を、クルアーンの一章を教えるのと同じように、教えていたものだった。彼は「皆、言いなさい。アッラーよ、本当に我等は(別伝承では、本当に我は)火獄の懲罰からあなたに守護を求めます、また、私は墓での懲罰からあなたに守護を求めます、また私はアンチ・キリストであるダッジャール[187]の試練からあなたに守護を求めます、生と死の試練からあなたに守護を求めます」と言っていたものだった。*[ムスリム所収]*

❑ かつてアッラーの使徒(S)はわれらにタシャッフドを、クルアーンの一章を教えるのと同じように、教えていたものだった。*[アブドゥッラー・ブン・アッバース経由、イブン・マージャ所収、アルバーニーが真正と判定]*（アブドゥッラー・ブン・ウマルの伝承には、彼はそこに一文字が付加されることも除去されることも好まなかったものだった、とある)。

---

[185] 預言者ムハンマド。

[186] 預言者ムハンマド。

[187] 原義は大嘘つき。

差引残高

見よ、我々の内の一人でも、礼拝から離脱する際に筆を持って、ちょっとした清算を行い、真にアッラーに語りかけたと、また礼拝の最中に例え1回なりとも一瞬ないし一瞬の一部なりとも何らかの通信が実現し心が震え身震いしたと感じたと、実感した瞬間の数を記録しようとしたであろうか。アッラーの使徒(S)が我々に提供した表に従って、例え人間的な大凡の形であったにせよ、この礼拝から得た収穫を推量するために最終的にこれらの瞬間を計算することが出来るような程度に。

> ❑ アンマール・ブン・ヤースィル(R)は使徒(S)が次のように述べたと伝えている。真に、男が　彼の礼拝の10分の1、9分の1、8分の1、7分の1、6分の1、5分の1、4分の1、3分の1、2分の1しか記録されずに　__礼拝から__　去るかもしれない。*[アンマール・ブン・ヤースィル経由、アブー・ダーウード及びナサーイー所収、アルバーニーが真正と判定]*

これらの徴の1つないしそれ以上が君から突如現れるか、これを感じることなしに、礼拝から離脱しないようにせよ。第1の屈礼で逃がしたならば、第2、それから第3、それから第4の際に努めよ。もし、推奨行為において失敗したならば義務行為[188]において、黎明に於いて失敗したならば、ズフル、それからアスル、それから日没、それから夜において努めよ。少なくとも1回の義務ないし推奨の礼拝において泣くか、それらの一部に於いて心が戦くか震えるか、威力比類無き威厳に満ちたアッラーとの通信の最大の滋味を感じたか　—なおこれは最弱の信仰である—　することなくして、君の一日から離脱しない

[188] それぞれ、推奨の礼拝、義務の礼拝を指す。

程度に。そして、もしこれを越えたならば ―君が越えることのなんと良きことよ― 君の来世の差引残高のために君の現世に於いて投資した利益のなんと素晴らしく、戦利品のなんと素晴らしいことか。

一部の大型百貨店は、客達が百貨店から出る前に、賞の獲得が実現した際の連絡用に彼らの住所と電話番号を示す券に記入すれば応募可能な価値ある販売促進賞を頻繁に宣伝する。

君は礼拝に於いて神的百貨店の内部にいるのであり ―最高の譬えはアッラーに帰す― そこで何十もの券に記入し、全ての券には賞が存在する。商業百貨店の賞と、神的百貨店の賞の違いは―否それは数多くある違いの中の一つなのであるが― 君が最終的に数多くある賞の一つを獲得するための単なる「応募者」ではなく、否そうではなく、これらの賞全てが君に100％保証されているということであるのだが、但し、もし君が正しくそれらの券に記入することに成功した場合のみにおいてであって、それ以上でもそれ以下でもない。

君は礼拝に於いて、完全に保証された利益を実現するための最大の投資プロジェクトへの ―それにも関わらず最小の経費による― 加入と相対しているのである。この巨大な商業プロジェクトが君から求める資本は、殆どゼロに等しい。

ザカートにおいて君は少なくとも2．5％を財物から支払う必要があり、大巡礼に於いては旅や宿泊のために相当な予算を必要とし、斎戒に於いては飲食その他数多くの許されたことを止めなくてはならず、さらに最後には断食明けの喜捨を支払わなければならない。他方、

礼拝の経費は、君のウドゥーに消費する水とその[189]実施に掛かる時間を越えることはない。これら全ては、税金や追加料金なしである…。その見返りは、君の口座にすぐに入る莫大な利益である、否むしろ、礼拝から離脱する前にその一部、即ち精神的な及び健康的な寛ぎ、静謐、頭脳の明晰、新しく生まれたとの感情を手で受け取るのである。丁度その時、別の一部は包装されて豪華な箱に入れられて、君の現世の住所へは成功、祝福、平安、様々な祈願への応答が、君の来世への住所へは以前の悪事の消去、数え切れないほどの善行のあちらの口座への追加が送られる。

この様なプロジェクトは、我々にとって利益と損失を記録するための特別な通帳を用意するのが相応しいのではないか？　ここでの損失とは、我々が知っているような意味での損失ではなく、まさにそれは資本金の減少ではなく、それは資本金に追加することが可能であったはずの利益規模の減少である。最悪の場合でも、礼拝に於いて我々の資本金は完全且つ安全なままに留まり、それに損失や減少の手が伸びることはない、但し、―アッラーよ禁じ給え―　我々の礼拝が似非信仰、詭術、見栄となるだけである。

利益及び損害の口座に関するこの新奇な投資的理解に基づいて、現時点で、君たちが全ての礼拝の最後に実現可能な利益の合理的な見積、同様に、脳裏に懸念が充溢し時折諸君に打ち勝って君たちを礼拝から遠ざけることになったかもしれないせいで、失ったこれらの利益の見積を行うことは可能であるか？

[189] 礼拝。

君に到達した礼拝の真髄の一覧表

最初に、君が自分の礼拝口座の見直しを実施している際に、我々の開陳した礼拝の五本線に戻り、これら全ての線、即ち時間の線、舌の線、身体の線、心の線、実践の線に対する君の遵守程度を見ることを忘れるな。また、かかる見直しを、君が礼拝に費やした分数に照らして行うことを忘れるな。もし、2分ないし3分間で2ラクアを終了したのであれば、君は礼拝していないのだから、戻って礼拝し直せ。と言うのも君の礼拝は、君の文字の中に広がったのに過ぎず、これらの文字の意味を理解し、その理解を翻訳してそれがその他の4つの線の運動に於いて具現化するための呼吸空間が存在しないのであるから。

全てのムスリムは、自分のために自分自身で、毎礼拝後に獲得することが可能であろう大凡の階梯を計測するための秤を設置しなければならない。本当に、自分の礼拝がどのようであったかを知るものは、自分一人であり、それ故私はこの素朴で原始的な人間的秤を提案したのである。それは、諸君にそして私自身に対して、その力を借りて、その上に、諸君が終えた全ての礼拝後の収穫に関する大まかな人間的な勘定と見積を確立することを勧めるものである。例え、我等の礼拝の最終的成果を、本当の意味で知り、本当の秤で量るのが、我々が礼拝によって我等の顔を向けるよく知りよく通暁しよく清算し給う御方以外にはないとしても。

1．私がイフラームのタクビールのためのタクビール実施者として両手を挙げている際に、あらゆるものを背後にうち捨てて、地上世界と無関係の別の高い世界に入ったことを、自分は感じ取ったか？

2.「アッラーフ・アクバル」が何回、私が礼拝から逸れないように助け、今さっき入ったばかりの私の新しい世界から私を逸らしかねない事柄を脳裏から追い払うことができ、そうしてそれによって全ての現世の些事や遊びから高く離れて恍惚として高みにいられるか？　私が現在「至大者」と共にあるからには。

3. 何回、「慈悲あまねく」という言葉が、その光によって垂直方向に（今現在、天から私の上に下されている新鮮な慈悲という意味で）私を浄化出来たか？　また、何回、「慈悲深き」という言葉が、その光によって水平方向に（原初から永劫まで延伸する永遠の慈悲という意味で）私を浄化出来たか、浄化が私の体全体部分と霊を共に含む程度に？

4. 開端章における、例えば「称賛はアッラーに帰す　__　諸世界の主に　__　裁きの日の主宰者に　__　あなたにこそわれらは仕え……」といったクルアーン的表現を読んで、自分自身の中でその意味を吸収し感じ取り、私の前に自己顕現したアッラーの偉大さを心に描き、そうして私がそれを読んだ際に私の内部で何かが変化したのを感じ取ったのは何回か？

5. 開端章ないしその後の諸節の中のクルアーンの節ないし表現を私が読んで、それを把握しその意味を熟慮し吸収するために、十分な緑の時間的空隙を与えたのは何回か？

6. 私が「われらを真っ直ぐな道に導き給え」を復唱した際に、導きへのこの高貴な呼びかけに包含されるようにと、家族、親族、ムスリム及び非ムスリムの友人達、ムスリム及び非ムスリムの敵達を心に描いたか？　また、彼らに対してアッラーから導きや真っ直ぐな道への

正導が降り注ぐことの祈念と、彼らに対する赤心に対する確認的報奨として、自分に対して下される即時的報奨の滋味を感じたか？

7．全ての「アッラーフ・アクバル」また屈礼及び跪拝の諸タスビーフの後で、仮想の緑の空隙を脳裏にて埋めようとしたのは何回か？
また、全てのタスビーフないしタクビールの後に、適切な仮想的考えによってこの空隙を埋めるための、どれほどの緑の秒数を実際に自らに与えたか？

8．次に挙げる赤ボタンのうち幾つを礼拝中に押し、その奔流が自分の奥深くに到達し、それによって身震いし、あるいは心が震え、あるいは泣いたか

➢「あなたにこそわれらは助けを求める」のボタンで？　この表現の後に、自らが求める助けの性質を感じ取るために、また、「われらは助けを求める」との包括的集合的形式によるこの要請によって包含される人々の有り様及び自らの有り様を思い浮かべる為に、何秒間を自らに与えたか？

➢「諸々の挨拶はアッラーに帰す」のボタンで？　長音が掛かった時間的長さはどの程度だったか、同様に、その後の停止、この二つの言葉[190]の発音、それからその後の部分「諸々の礼拝も」の発音、それから第3部「諸々の善行」……はどの程度だったか、そしてその際、アッラーへの入域、彼が私に教え給うたそのままの形式によって彼に挨拶を投じること、アッラーに挨拶を投げることの恍惚の感触、それから至高者

[190] al-taḥīyātu と li-llāhi.

からのこの挨拶に対する答礼を受け取ることの恍惚の感触というこの素晴らしい光景を我が霊魂に下そうとする時間を用意するべく努めている状態であったか？

➢「あなたに平安あれ、おお預言者よ、そしてアッラーの慈悲と彼の祝福を」のボタンで？　この挨拶、特に「平安 al-salām __ アッラー Allāh __ 彼の祝福を wa-barakātu-hu」中の長音文字の読誦に掛かった期間はどの程度であったか、これらの長音の空隙に、また同様にこの挨拶の後ろにある緑の時間的空隙 ―そしてこれはその後に続く挨拶においても同じである― に助けを求めつつ、まず預言者（S）に平安の挨拶を投げかける恍惚を、それから彼から直接応答を受け取る感覚の恍惚を脳裏に浮かべることができる程度に？

➢「我々にも、アッラーの義しい僕達にも平安あれ」のボタンで？　この挨拶を自分自身に、それから私の周囲の大切な人たちに、それから天と地の何処にいたのであれどの時代に生きたのであれ諸世代に亘る数十億のアッラーの義しい僕達に投げかける際に、第一に、私や彼らに清浄な聖なる「平安」の雨が降り注ぎ、私と彼らを害するあらゆるものから私の奥深くと彼らの奥深くを清め、第二に、その直後に別の清浄な雨が私を水浸しにし、私は天から私の投げかけた全ての挨拶に対する報奨としての気前の良い報酬を受け取っている状況であって、そうしてそれが私の頭頂から両足裏までを洗い、あらゆる頭痛、病、疲労、懸念、不安を取り除くのを、感じたか？

9．義務の諸ラクアにおいて逃してしまったかもしれないこれら諸点を推奨の諸ラクア[191]において ―あるいは逆かもしれない― 補填する事ができたか？

10．最後に、忍耐の諸訓練の中のこの新たな訓練に成功したか？忍耐力の新たな充填が自分に追加されたのを、自分の中で何かが変化したのを、霊的、身体的、倫理的、熟慮的、叡智的に、その変化が如何に些細であったとしても、感じたか？

[191] 義務の屈礼は義務の礼拝の屈礼、推奨の屈礼は推奨の礼拝の屈礼を指す。

君から逃れた礼拝の真髄の一覧表

1．どれほどの「アッラーフ・アクバル」を、それによって私の礼拝から気を逸らせる物に超克することなく、逃してしまったか？

2．どれほどの節を、気にも留めずに通り過ぎ、その意味を吸収し思い描くことなく、読誦したか？

3．どれほどの屈礼か跪拝に於けるタスビーフ、あるいは表現ないし挨拶をオウム返しのように復唱し、その純然たる甘美さやその意味の良さを享受せず、緑の仮想的空隙を投資しなかったか？

4．跪拝のためにひざまずく最中、自分の服、ズボン、髪を整えることを何回自分に許し、手や何らかの部位を、自分の敬神の程度に影響を及ぼす程度に不必要に動かしたか？

5．自分の前の礼拝絨毯の上の、あるいは自分の礼拝場所の周囲の、線、図案、色ないし物事が、礼拝から気を散らしたのは何回か？

6．現世の諸事の一つが打ち勝って、礼拝に於いて復唱していたところから遠く引き剥がされたのは何回か？

7．モスクないしそれ以外の場所で、自分と一緒にいる者達による余計な話によって礼拝から引き戻された、ないし、テレビかラジオの音、電話の鳴る音、ドアをたたく音によって気を散らされたのは何回か？

8．礼拝の五本線の内、自分の礼拝で逃し、他の諸線即ち時間、舌、身体、心、そして行為及び実践の線と共に存在することが叶わなくなったのはどの線か？

9．礼拝の後で。礼拝の最中に自分の主と密かに話した内容と相反する行為と自分とを隔ててくれると感じる追加の免疫を獲得したか？

10．礼拝の後で。決意、熟慮、忍耐のコースに成功したか？　それとも、礼拝に入って、入ったときと同じ状態で、そこから出たか？

＊　　＊　　＊

最後に、君の一日の終わりに、頭を枕に乗せ、アッラーの使徒（S）から伝えられる睡眠の祈願を復唱する際に、1分以上掛かることはない急ぎの行為で、その日の礼拝に於いて自分のために記録した諸点 ―特に赤い鍵に関連した諸点― の合計を心に思い浮かべるように、また、この合計を前日に獲得した合計と比較するように努めるのを忘れるな。君が、日々の残高と共に前進したのかどうかを知るためであって、あるいは後に後退したのであれば、次の日にその後退を訂正するようにせよ、君の諸点に関する折れ線グラフが継続的な上昇にあるように。

また、週末には週全体に関する最終的な評価を与え、それからこの評価と前週の評価とを比較し、君が投資利益に於いて継続的に前進していることを確認するように努めよ。

君の人生全てが礼拝となるために

私は、ひっきりなしに自分の理性で、預言者(S)が天に昇らされ、そこで礼拝の制定に関する最高命令を受け取った際の、礼拝の下令について我々に告げる高貴な預言者ハディースを精査する。預言者(S)が我々に告げるように、当初は 50 回の礼拝義務が下令され、それから高貴な預言者[192]は彼の共同体からこの礼拝回数を減らし給うよう彼の主に求め続け、遂にはそれを5回と成し給うた。私はかつて常に、もしかしたら諸君も私と共に自問したかもしれないが、このハディースが私の記憶をよぎる毎に、見よ、如何にして我等が毎日 50 回の礼拝が行えたであろうか、この場合に礼拝以外の何かを行う為の時間が残されていただろうか？、と自問したものであった。何時、我等は食べ、飲み、眠り、起き、読み、書き、話し、学び、働き、建設し、大地を普請し、人生を楽しみ、我等の一人がその家族や友人達を訪問し、そして、そして、そして……するのか？

やっとのことで、礼拝の本質、その精髄、その自己及び人生との相互作用的役割の性質、礼拝者が礼拝から離脱する際に獲得している効果を理解したとき、礼拝とは人生であり、人生とはその分子及び詳細に於いて、各種の礼拝の一種、否むしろ、様々に異なった多様な各種であることを理解した。

今まで君が過ごしていた短い睡眠の死の後で、目覚めて君がまだ生きていることを発見し、君の中に新たに生命を送った者を直観知によって感じる際、君は礼拝しているのである。

[192] ここの箇所には(S)が表記されていなかった。

君の子供達あるいは他人の子供達の顔を眺め、彼らが日々新しい外形、新しい能力、新しい言葉及び表現を獲得しながら、彼らの体質や性格の進歩の脅威、彼らの成長の神秘に当惑するとき、君は礼拝の最中であるのだ。

君が家族を善に導き、英知と良い訓告をもってアッラーへと呼び招き、その後に彼らが君に従うかあるいは逆らう際に、君は礼拝の最中であるのだ。

兄弟、同僚、隣人が君の権利に関して犯した罪に対して、心の底から彼らを許し、それからあたかも君が罪を犯したかのように彼らに許しを請う際に、君は礼拝の最中であるのだ。

君が侮辱を耳にしながら、それに応答せず、それをアッラーへの貸し付けとするのであれば、君は礼拝の最中であるのだ。

兄弟の死肉を食する[193]会合から、その者を擁護することあるいは話の流れを変えることが出来ない状態で立ち去る場合、君は礼拝の最中である。
非ムスリムに対する闘争、虐待、憎悪に代えて、真っ直ぐな道への導きへと呼び招く場合、君は礼拝の最中である。
君が非ムスリムにイスラームの慈悲、イスラームの寛容性、イスラームの繊細さ、イスラームの愛情、イスラームの文明性、イスラームの倫理、イスラームの微笑を見せるとき、君は礼拝の最中である。

[193] 死肉を食するとは、陰口をたたくことを意味するハディース起源の表現。

君が例え非ムスリム国にいたにせよ、君の住む国の制度を保持し、それへの謝意を表し、財務的、税務的、倫理的な約束を果たすのならば、君は礼拝の最中である。

悪が全面から君を取り囲み、内心でそれを拒絶し、そうして自分には手であるいは舌でそれを変えることが出来ないと見出したとき、君は礼拝の最中である。

家族を満足させまた君の周りの人を満足させるために努力した際、その努力に於いて正しかったかにせよ間違えたにせよ、君は礼拝の最中である。

君の事柄[194]はアッラーと共にあって、その全てが良きことであると信じ、例え君の悪魔が君にどれだけ囁きかけたとしても、彼[195]について良きこと以外を考えない時、君は礼拝の最中である。

アッラーが君に与え給うたもの及び試練に対してアッラーを賛美するとき、君は礼拝の最中である。

君が誘惑によって全面から取り囲まれつつも、目線を下げたとき、君は礼拝の最中である。

君が病、貧困、災難の苦しみに、あるいは生活の苦しさに耐えるとき、君は礼拝の最中である。

君が命を救ったとき、例え百万分の一であってもそれが失われても構わないのではないかとの疑念にあったとき、君は礼拝の最中である。

例え君の声、同情、祈願によってであれ、異国におけるムスリム及び非ムスリムと不安、痛み、悲しみを共有するのであれば、君は礼拝の最中である。

君が病人を訪問するとき、君は礼拝の最中である。このような礼拝の際に、君の預言者はウドゥーをするように奨めなかったか？

---

[194] 幸福や不幸、健康や不幸など。

[195] アッラー。

君が睡眠に身を委ね、労働と建設のための新しい日に備えて、長い一日の疲れから体を休めるとき、君は礼拝の最中である。このような礼拝の際に、君の預言者はウドゥーをするように奨めなかったか？

最後に、眠る前に、その日に君の為になったことと、君の不利になったこととを自分自身に清算するとき、君は礼拝の最中である。

君の人生の全ては礼拝である、もし礼拝者の目でそれを眺め、礼拝者が自らの言葉と相互作用するように、君がその[196]諸分子と相互作用したならば。あらゆる角、あらゆるカーブにおいて君の前に与えられたこれら諸礼拝の一つなりとも逃してはならない。人生の諸分子とは、創造者の偉大性について発言し、その威力が超越的であると讃え、その恩寵を賛美し、その恩恵を公表し、彼の僕達に常に彼の方を向くようにと、また、この種の礼拝のためにウドゥーを行わないとしても彼らが常に礼拝の最中にあるのだと注意喚起する言葉に他ならない。

人が君を害したとしても怒るな、憎むな、否むしろ、それをタスビーフと礼拝と成せ、次のように復唱しながら。讃えあれ、アッラーこそは超越者、私とあの人間が、同じアッラーの被造物であるというのか？どのような偉大な絵筆が、様々に違った外形、性質、倫理をもつ数十億の人々に、様々に違った性格を与えることが出来たのであろうか？、と。

君が居合わせること、周囲で聞くこと、見ること全てから、例えそれを理解しなかったとしても、タスビーフを成せ。どうして私にアッラーの創造の一部である光景、被造物、性格を貶めることが出来ようか？

---

[196] 礼拝の。

私の視力を奪う稲妻、心を震えさせる雷鳴、自然の即興による暴力、恐怖、革命ですら、私をアッラーへ一層近づける別種のタスビーフとして私の中に反映されるのに他ならない。

君の全ての動作と静止、起立と着席、食物と飲料、収入と支出、聴聞、目視、発話、思念、思考において、弛まず礼拝し倦まず崇拝しタスビーフし称賛し想起するこの宇宙の一部となれ、そうすれば生きている限り礼拝の最中であることになる。そして、以下の黄金法則を人生の憲法とせよ。

> 君の現世を正すことを欲しての家の外への一歩を、君の来世を正すことを欲した君の内面での一歩を一緒に踏み出すこと無くして、踏み出してはならない…。

> 君に残された寿命が1時間未満であると考えること無しに、君の1時間を無駄にしてはならない…。

> ウドゥーの際に、君の身体部位の上にある穢れを、その[197]下にある一部の穢れを洗い流すこと無しに、洗い流してはならない…。

> 礼拝の中にある言葉を、その後に君の行為がそれを認証するのであると決意すること無しに、復唱してはならない…。

> 人生に於いて謙虚に己を屈めること無しに、礼拝に於いて畏まって頭を屈めてはならない…。

> 君が、少し前にモスクに入った同一人物として、モスクから出てはならない[198]…。

---

[197] 身体部位。

[198] 別人のようになってモスクから出ろ、の意。

➢ 人生に於ける罪に別れを告げそれ[199]に服従を付け加えずして、ラマダーン月に別れを告げてはならない…。

➢ 左手で自分から悪しきことを払いのけること無しに、右手で良きことを与えてはならない。

➢ 君を楽園へと近づける犠牲動物を、それと一緒に君を火獄へと近づける罪を屠殺すること無くして、屠殺してはならない…。

➢ 不要な1クルシュ[200]を、寒さ、病、飢餓を救ってくれるものとして探し求めながら死んだ者を想起すること無くして、費やしてはならない…。

➢ 自分が半分しか飲まないであろう事を知りながらにして、盃を縁まで満たしてはいけない。

➢ 一滴の水を、それと同様のものを渇望しながらにして日々死ぬ者について想起すること無くして、無駄にしてはならない…。

➢ 一口分の食事を、それを禁じられた状態で死んだ者達について想起すること無くして、口に入れてはならない…。

➢ 食卓の食べ残しを、アッラーが食卓の上にあるもの全てを君に禁じることが可能であらせられると確信すること無くして、棄ててはならない…。

➢ 何らかの現世の果実を、それによって来世の果実を享受するように駆り立てられること無くして、享受してはならない…。

---

[199] 人生。

[200] オスマン朝期の銀貨。1ピアストル。現代エジプトではエジプト・ポンド（ギネー）の下に位置する。

➢ 与えることによって後に残したもの[201]を享受したものと同程度に、獲得して消費したものを享受してはならない[202]。

➢ 適切な靴を有していないとしても怒ってはならない、というのも人々の中には靴を履くための両足を有していない者もいるのだから…。

➢ 君の家の道具一つや家具一点が壊れたとしても不満を鳴らしてはならない、というのも家を持たない人もいるのだから…。

➢ 君の食事に塩を、それと共に君の言葉に砂糖を振りかけること無くして、振りかけてはならない…。

➢ 誰かについての悪口を、何処かに君について同様のことを言う者が存在すると確信することなくして、言ってはならない…。

➢ 君の両親の一人に対して悪口を、何時の日かそれと同様のことを君の子供から聞くこととなるであろうと確信すること無くして、向けてはならない…。

➢ 君より下の者を、アッラーが君から取り上げてその者に与えて君を貶めるのにいと容易くおわすことを知るまでは、軽蔑してはならない…。

➢ アッラーの権利に関して罪を犯した際に、君の権利に関して罪を犯した者を赦し始めること無くして、アッラーからの赦しを求めてはならない…。

---

[201] 他人に与えることによって天に宝を積む（後に残す）ことを指す。

[202] 消費よりも、他者への善行を優先せよ、の意。

➢ 君の心の窓を通じて多少なりとも嫌悪が侵入することを、別の窓から多量の愛情が侵入することを許したので無い限り、許してはならない…。

➢ 君が愛している人への祈願を、君が愛しているかどうか疑わしい人々ないし君のことを愛しているかどうか疑わしい人々への祈願を先に行わない限り、行ってはならない…。

➢ 長期間の忍耐を、君が大きな報奨と間近な解放を享受していると確信していない限り、困難であると見なしてはならない。

最後に、高貴な君の預言者(S)の忠告を行うことを忘れるな。「アッラーを目にしているかのように彼を崇拝せよ、自らを死者達の内に数えよ、全ての石や木の許でアッラーを想起せよ、もし悪行を行ったならその側で善行を行え、秘密には秘密で、公然には公然で」*[ムアーズ・ブン・ジャバル経由、アルバーニー『奨励真正集』所収]*

＊　＊　＊

さて、君の呼吸する全ての呼吸気と共に、君の人生はその全てが礼拝であると想起せよ。人生に於けるあらゆる状態及び転変において、礼拝に相対する者の身体の清浄性のように精神を清浄と成せ、君の血管の中でアッラーが巡らせ給う血の純粋性のように霊魂を純化せよ、君の諸細胞の各々による感謝そして全間接、全筋肉、君の体の毛穴の感謝のように君の主に感謝せよ。

君の礼拝の管理は、君の人生の管理に他ならないことを知れ。既に、イスラームは君に来世を保証するためにその第一の柱を与え、そして現世と来世を保証するためにその第二の柱を与えた。私が本書

で意図したことは、単に、小さな諸々の鍵が存在するようになり、君が両手でそれを取るということに他ならないことを知れ。そうして、君の思想の倉庫をそれで開け、それによってアッラーと共に君の想像世界を飛び回り、アッラーの被造物と共に君の発見の海に飛び込み、そうしてそれらの各々から礼拝の管理及び人生の管理のための君専用の本が存在するようになるように。

おおアッラーよ、私はそれから離れてあなたに悔いて戻った後にまた立ち戻ってしまった罪からの赦しをあなたに求めます。

そして、私からあなたに差し出しつつも不十分であったことについての赦しをあなたに求めます。

そして、あなたが私に恩寵としてくださりながら私があなたへの反逆のために活用してしまった全ての恩寵についての赦しをあなたに求めます。

そして、あなたの御尊顔を意図したにも拘わらずあなたへのものではないものが混じってしまった全ての善行についての赦しをあなたに求めます。

＜著者紹介＞

アフマド・バッサーム・サーイー

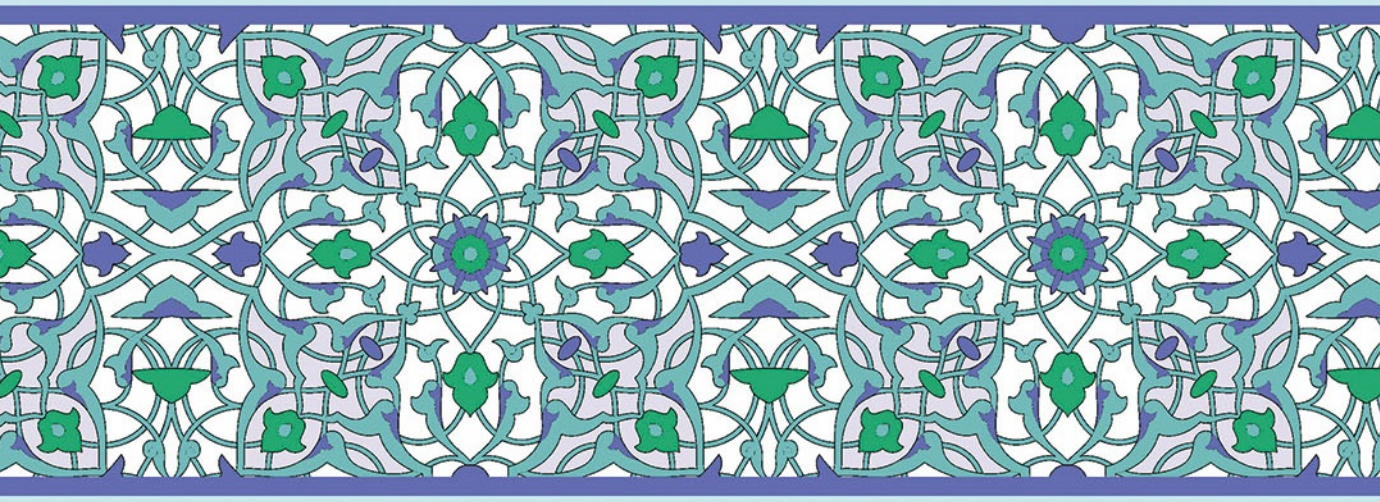
1941 年、シリアのラタキア市生まれ。アラブおよび英国の大学で教鞭を執った。1991 年、オックスフォード・大学院教育アカデミーを創設。英国の様々な学術評議会・機構で勤務。現在は英国大学・学院認定評議会の第一査察官を務め、またウェールズ大学の大学院生を指導する。

主な著書に、『シリアにおける新詩運動—その著名人を通じて—』（1978）、『修辞学と批評学の間の描写』（1984）、『文学と批評におけるイスラーム的現実主義』（1985）、『イスラームに相対するムスリム、キリスト教に相対するキリスト教徒』（2008）、『奇蹟—クルアーンの言語的奇蹟性の再読—』（1 巻 2012、2 巻 2015）、『礼拝の管理—イスラームにおける第二の支柱の再発見—』（2015）等。

＜訳者紹介＞

下村佳州紀

1975 年、東京都生まれ。東洋大学社会学部社会学科卒業。アブン＝ヌール学院（在ダマスカス）客員研究員、在イエメン日本国大使館専門調査員、在シリア日本国大使館専門調査員、同志社大学一神教学際研究センター共同研究員等を経て、現在黎明イスラーム学術・文化振興会代表理事。名誉博士（イスラーム学公宣単科大学、在ベイルート）。

Sā‘ī, Aḥmad Bassām, 2015, *I‘ādah Iktishāf al-Ṣalāt: Mukhtaṣar Kitāb Idārah al-Ṣalāt*, Herndon: The International Institute of Islamic Thought
Japanese translation published by International Institute of Islamic Thought East Asia.
礼拝の再発見に向けて

平成 29（2017）年 8 月 25 日　発行
著者―アフマド・バッサーム・サーイー
編集協力　黎明イスラーム学術・文化振興会
印刷―One Global Services
No. 8A, 1st Floor Jalan Lengkongan Brunei Off Jalan Pudu, 55100, Kuala Lumpur
発行―International Institute of Islamic Thought East Asia
©2017 International Institute of Islamic Thought East Asia
Printed in Kuala Lumpur, Malaysia